BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v1.6b [2017/09/28]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

目次

1	はじめに	3							
2	オプション	7							
3	和文フォントの変更								
4	フォントサイズ	36							
5 5.1	レイアウト ページレイアウト	41 42							
6	改ページ(日本語 T _E X 開発コミュニティ版のみ)	55							
7	ページスタイル	57							
8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	60 65 77 84 85 87							
9	フォントコマンド	88							

10	相互参照	91
10.1	目次の類	91
10.2	参考文献	96
10.3	索引	98
10.4	脚注	99
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	101
12	いろいろなロゴ	105
13	amsmath との衝突の回避	105
14	初期設定	106
付録 A	和文ドライバの仕様 轡	110
付録 B	和文ドライバ:minimal	111
B.1	補助マクロ	111
B.2	(u)pT _E X 用の設定	113
B.3	pdfT _E X 用の処理	117
B.4	XaTeX 用の処理	118
B.5	後処理(エンジン共通)	118
付録 C	和文ドライバ:standard 圏	120
C.1	共通処理 (1)	121
C.2	pT _E X 用設定	127
C.3	pdfT _E X 用設定:CJK + bxcjkjatype	131
C.4	X元下X 用設定:xeCJK + zxjatype	133
C.5	 LuaT _E X 用設定:LuaT _E X-ja	135
C.6	共通処理 (2)	137
付録 D	和文ドライバ:modern 圏	138
D.1	フォント設定	138
D.2	fixltx2e 読込	138
D.3	和文カテゴリコード	139
D.4	完了	139
付録 E	和文ドライバ:pandoc 圏	139
E.1	dupload システム	139
E.2	lang 変数	140
E.3	geometry 変数	141
E.4	CJKmainfont 変数	141
E.5	paragraph のマーク	141

E.6	全角空白文字	142
E.7	完了	142
付録F	補助パッケージー覧 圏	142
付録 G	補助パッケージ:bxjscompat ⑧	142
G.1	準備	142
G.2	X _H T _E X 部分	143
G.3	LuaT _E X 部分	144
G.4	完了	145
付録 H	補助パッケージ:bxjscjkcat 轡	145
H.1	準備	145
H.2	和文カテゴリコードの設定	146
H.3	ギリシャ・キリル文字の扱い	147
H.4	初期設定	153
H.5	完了	153
付録 I	補助パッケージ:bxjspandoc 圏	153
I.1	準備	153
I.2	パッケージ読込の阻止	154
I.3	fixltx2e パッケージ	154
I.4	cmap パッケージ	154
I.5	microtype パッケージ	154
I.6	Unicode 文字変換対策	155
I.7	PandoLa モジュール	156
1.8	完了	156

1 はじめに

この文書は「BXJS ドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
\langle \text{article} \rangle bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし) \langle \text{report} \rangle bxjsreport.cls 長いレポート (章あり)
```

⟨book⟩bxjsbook.cls書籍用⟨slide⟩bxjsslide.clsスライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATeX 2_{ε} 新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対する解説である。

これは IATrX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づい て奥村が改変したものです。権利については両者のものに従います。奥村は何の権利も主張 しません。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。 以下では実際のコードに即して説明します。

- 1 %<*cls>
- 2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

\bxjs@clsname

文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 4 % <book > \def \bxjs@clsname {bxjsbook}
- 5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch

[2016-08-22] 従来 jsclasses では、pLMTFX や LATFX の不都合な点に対して、クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで,新しい pIATrX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 7 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 8 \jsc@needsp@tchfalse

■BXJS クラス特有の設定 彎

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

9 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

10 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。 互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 12 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 13 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 14 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle, \jsBook=bxjsbook, \jsReport=bxjsreport, \jsSlide=bxjsslide.

- 15 \let\jsArticle=a
- 16 \let\jsBook=b
- 17 \let\jsReport=r
- 18 \let\jsSlide=s
- 19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 20 % <book > \let \ jsDocClass \ jsBook

```
21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
               22 % <slide > \let \ jsDocClass \ jsSlide
     \jsEngine
               [暗黙文字トークン]エンジン(TrX の種類)の種別:j = pTrX 系、x = XqTrX、p =
               pdfTFX(含 DVI モード)、1 = LuaT<sub>E</sub>X、J = NTT jT<sub>E</sub>X、0 = Omega 系、n =以上の何
                れでもない。
               23 \le 5 
               24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
               25 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
               26 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
                   \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
               28 \bxjs@test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}
               29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
               30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
               31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
               32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
               33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}
\ifjsWithupTeX [スイッチ] エンジンが(内部漢字コードが Unicode の) upTrX であるか。
               34 \newif\ifjsWithupTeX
               35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
               36 \jsWithupTeXtrue
               37 \fi\fi
               38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX
\ifjsWithpTeXng 〔スイッチ〕エンジンが pTpX-ng であるか。
               39 \newif\ifjsWithpTeXng
               40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}
 \ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが\varepsilon-TFX 拡張をもつか。
               41 \neq 1
               42 \bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}
                  非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。
                ※ NTT jT<sub>F</sub>X と Omega 系。
               43 \let\bxjs@tmpa\relax
               44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
               45 \ifx O\jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
               46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
               47 \else
                   \ClassError\bxjs@clsname
               48
                    {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
                     {It's a fatal error. I'll quit right now.}
                   \expandafter\@firstofone
               51
               52 \fi{\endinput\@@end}
\bxjs@protected \varepsilon-TrX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。
```

53 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected

```
54 \else \let\bxjs@protected\@empty
                55 \fi
\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。
                56 \ifjsWitheTeX
                57 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
                58 \else
                59 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand*}
                60 \fi
 \ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。
                ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
                61 \newif\ifjsInPdfMode
                62 \Onameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
                63 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
                64 \let\PackageWarningNoLine\PackageInfo % suppress warning
                65 \RequirePackage{ifpdf}
                66 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
                67 \Onameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
                68 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf
     T<sub>F</sub>X の if-文 (\if XXX······(真)\else(偽)\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。
                69 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%
                70 #1\expandafter\@firstoftwo
                71 \else\expandafter\@secondoftwo
                72 \fi}
    \bxjs@cslet \bxjs@cslet{\名前 1\}\制御綴:
                73 \def\bxjs@cslet#1{%
                74 \expandafter\let\csname#1\endcsname}
  \bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{\langle4前 1\rangle}{\langle4前 2\rangle}:
                75 \def\bxjs@csletcs#1#2{%
                76 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}
   \bxjs@catopt \bxjs@catopt{\langle文字列 1\rangle}{\langle文字列 2\rangle}: 2つの文字列を , で繋いだ文字列。ただし片方
                が空の場合は, を入れない。完全展開可能。
                77 \def\bxjs@catopt#1#2{%
```

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

78 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

79 \def\jsAtEndOfClass{%

80 \expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-h@@k\endcsname}

 $\operatorname{LuaT}_{\mathbf{E}}\!\mathbf{X}$ の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリコードを一時的に 11 に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の LualATEX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処理は特段の意味を持たない。しかし、昔は 12 になっていて、この場合、日本語文字のコントロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを 11 に変更する必要がある。

- 81 \@onlypreamble\bxjs@restore@jltrcc
- 82 \let\bxjs@restore@jltrcc\@empty
- 83 \if 1\jsEngine
- 84 \def\bxjs@change@jltrcc#1{%
- 85 \xdef\bxjs@restore@jltrcc{%
- 86 \bxjs@restore@jltrcc
- 87 \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}%
- 88 \catcode`#1=11\relax}
- 89 \@tfor\bxjs@x:=西暦\do
- 90 {\expandafter\bxjs@change@jltrcc\bxjs@x}
- 91 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何もしない。

- 92 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 93 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了させる。

- 94 \if@compatibility
- 95 \ClassError\bxjs@clsname
- 96 {Something went chaotic!\MessageBreak
- 97 (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak
- 98 I cannot go a single step further...}
- 99 {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak
- 100 then there'll still be hope....}
- 101 \expandafter\@firstofone
- $102 \ensuremath{\,^{\circ}}\ensur$
- 103 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

104 \newif\if@restonecol

\ifOtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

105 \newif\if@titlepage

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要

するに片起こし, 奇数ページ起こしになります。

106 %<book|report>\newif\if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。
107 % \chook|report \newif\ifCopenleft

\if@mainmatter 真なら本文, 偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

108 % <book | report > \newif \if@mainmatter \@mainmattertrue

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

109 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積 $1 \, \mathrm{m}^2$,縦横比 $1:\sqrt{2}$ の長方形の辺の長さを mm 単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては mm 単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が $1.5\,\mathrm{m}^2$ ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$ です。このため,I Δ TEX 2_{ε} の b5paper は $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$ ですが,pI Δ TEX 2_{ε} の b5paper は $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$ になっています。ここでは pI Δ TEX 2_{ε} に ならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形, 182mm×230mm), a4var (A4 変形, 210mm×283mm) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

- 110 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
- 111 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
- 112 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
- 113 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- 114 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
- $116 \verb|\DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{257truemm}}}|$
- 117 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128truemm}}}
- 118 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
- 119 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
- $120 \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{b4j\}{\texttt{bxjs@setpaper}\{257truemm\}\{364truemm\}\}}}$

- 121 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{257truemm}}}
- 122 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
- 123 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
- ※...var を Pandoc で使えるように後ろに paper をつけた形を用意する。
- 124 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}}{283truemm}}}
- 125 \DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}{230truemm}}}
- 126 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
- 127 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
- 128 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
- ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。
- 129 \newif\if@landscape
- 130 \@landscapefalse
- 131 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

132 \newif\if@slide

BXJS ではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if @slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- 133 %<!slide>\@slidefalse
- 134 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的なドキュメントクラスと同様にポイント数から 10 を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag* を新設しました。

\Optsize は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は

```
\jsUnusualPtSize (=-20) k \neq \delta.
135 \newcommand{\@ptsize}{0}
```

136 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}

137 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

- 138 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%
- \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}% 140
- 141 \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
- \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}% 143
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

\bxjs@setbasefontlength

base、jbase で指定される長さ(式)のための特別な \setlength。与えられた式が"(実 数〉Q"の形の場合、Q単位の長さを代入する(この場合"式"は使えない)。

※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、IAT_FX はファイル の読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \jQ をサポートすることは原 理的に不可能である。

145 \def\bxjs@setbasefontlength#1#2{%

ここで true の長さが使われるのは不合理なので、式が "true" を含む場合には警告を出す。

146 \bxjs@setbasefontlength@a#2true\@nnil

式の末尾が"Q"である時は特別に扱い、それ以外は\setlengthに移譲する。

- \ifx j\jsEngine \setlength#1{#2}% 147
- 148 \else
- 149 \bxjs@setbasefontlength@b#2\@nil Q\@nil\@nnil
- \ifx\bxjs@tmpa\relax \setlength#1{#2}% 150
- 151 \else \@tempdimc0.25mm #1=\bxjs@tmpa\@tempdimc
- \fi 152
- 153
- 154 \def\bxjs@setbasefontlength@b#1Q\@nil#2\@nnil{%
- \ifx\@nnil#2\@nnil \let\bxjs@tmpa\relax 155
- \else \def\bxjs@tmpa{#1}% 156
- 157 fi
- 158 \def\bxjs@setbasefontlength@a#1true#2\@nnil{%
- \ifx\@nnil#2\@nnil\else
- \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 160
- {You should not use 'true' lengths here}% 161
- 162 \fi}

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 163 \newif\ifjsc@mag
- 164 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 165 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 166 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}

```
167 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
168 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
169 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}
170 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
171 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
172 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
173 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
174 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
175 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
176 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
177 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
178 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
179 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
180 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
181 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
182 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
183 \verb|\DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}|
184 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
  JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
185 \verb|\DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}| \\
186 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
187 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

■トンボオプション トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIATEX 2_{ε} 本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIATEX 2_{ε} 本体で宣言されています。

取りあえず、 pT_EX 系の場合に限り、JS クラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
188 \if j\jsEngine
189 \hour\time \divide\hour by 60\relax
190 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
191 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
192 \DeclareOption{tombow}{%
     \tombowtrue \tombowdatetrue
193
194
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
195
     \@bannertoken{%
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
196
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
197
198
     \maketombowbox}
199 \DeclareOption{tombo}{%
     \tombowtrue \tombowdatefalse
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
201
```

- 202 \maketombowbox}
- 203 \fi
- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。
- 204 \if j\jsEngine
- 205 \DeclareOption{mentuke}{%
- 206 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 207 \setlength{\@tombowwidth}{\z@}%
- 208 \maketombowbox}
- 209 \fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- 210 \DeclareOption{oneside}{\@twosidefalse \@mparswitchfalse}
- 211 \DeclareOption{twoside}{\@twosidetrue \@mparswitchtrue}
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 213 \DeclareOption{onecolumn}{\Otwocolumnfalse}
- $214 \verb|\DeclareOption{twocolumn}{\Qtwocolumntrue}|$
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 215 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 216 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは IATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 217 %<book|report>\DeclareOption{openright}{\@openrighttrue\@openleftfalse}
- ${\tt 218 \% book|report> DeclareOption\{openleft\} \{\tt Qopenlefttrue \tt Qopenrightfalse\}}$
- ${\tt 219\ \% cook|report>\ DeclareOption\{openany\}\{\ Qopenrightfalse\ Qopenleftfalse\}}$
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- - 220 \def\eqnarray{%
 - 221 \stepcounter{equation}%
 - 222 \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%

```
223
      \global\@eqnswtrue
224
      \m@th
225
      \global\@eqcnt\z@
      \tabskip\@centering
226
      \let\\\@egncr
227
      $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
228
          \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
229
230
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil\displaystyle{{}##{}}\hfil
         &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
231
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
232
            \tabskip\z@skip
233
234
         \cr
   leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
235 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
236 \verb|\DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}}|
237 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
     \def\eqnarray{%
238
       \stepcounter{equation}%
239
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
240
241
       \global\@eqnswtrue\m@th
       \global\@eqcnt\z@
242
243
       \tabskip\mathindent
       \left| \cdot \right| = \ensuremath{\mbox{Qeqncr}}
244
245
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
       \ifvmode
246
247
         \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
       \verb|\addtolength| above displayskip{\parskip}||%
249
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
250
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
251
252
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
253
       \bgroup
254
         \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
255
256
         &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
         &\global\@eqcnt\tw@
257
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
258
         &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
259
       \tabskip\z@skip\cr
260
261
       }}
■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
262 % \DeclareOption{openbib}{%
       \AtEndOfPackage{%
263 %
```

\renewcommand\@openbib@code{%

264 %

- 265 % \advance\leftmargin\bibindent
- 266 % \itemindent -\bibindent
- 267 % \listparindent \itemindent
- 268 % \parsep \z@}%
- 269 % \renewcommand\newblock{\par}}}

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォントしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん使うと "Too many math alphabets …"というエラーが起こってしまいます。disablejfamオプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラスでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

270 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 271 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- $272 \end{center} $$272 \end{ce$
- $273 \end{tabular} $$273 \end{tabular} $$273$
- 274 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 275 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

 $276 \ensuremath{\verb| DeclareOption{disablejfam}{ \langle bxjs@enablejfam=f}|}$

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せにより、enablejfam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft JS クラスは \ifdraft という公開名のスイッチを用いているが、これは ifdraft パッケージと衝突するので、代わりに \ifjsDraft の名前を用い、本文開始時に \ifdraft が未定義の場合に限り、\ifjsDraft を \ifdraft にコピーする処理にする。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、\ifdraft は 2.0 版で廃止を予定する。

- 277 \let\ifjsDraft\iffalse
- 278 \@onlypreamble\bxjs@draft
- 279 \def\bxjs@draft#1{%
- 280 \expandafter\let\expandafter\ifjsDraft\csname if#1\endcsname}

- $281 \end{draft} {\bf \{bxjs@draft\{true\}\end{draft}\}}$
- $282 \end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}{\end{final}}}}}}$
- 283 \AtBeginDocument{%
- 284 \expandafter\ifx\csname ifdraft\endcsname\relax
- 285 \expandafter\let\csname ifdraft\expandafter\endcsname
- 286 \csname ifjsDraft\endcsname
- 287 \fi}

■和文フォントメトリックの選択 ここでは新しい jis フォントメトリックを標準で使いますが、古い min10、goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定します。また、winjis オプションで winjis メトリックが使えます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize

[スイッチ] papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 288 \newif\ifbxjs@papersize
- 289 \bxjs@papersizetrue
- 291 \DeclareOption{papersize}{\bxjs@papersizetrue}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- 292 \newif\if@english
- 293 \@englishfalse
- $294 \verb|\DeclareOption{english}{\Qenglishtrue}|$
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していましたが、新しく jsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATEX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読み 込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおりの 動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

BXJS クラスでは、nojslogo を既定とする。

 $295 \newif\if@jslogo \@jslogofalse$

- 296 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
- 297 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}

■BXJS 特有のオプションの一覧 湾

- エンジンオプション:xelatex 等。
- ドライバオプション: dvipdfmx 等。
- 複合設定オプション: pandoc 等。
- nopapersize: papersize (既定で有効)の否定。
- zw / nozw: \jsZw と等価な命令として \zw を定義する/しない。
- js / nojs: JS クラスを読込済として扱う/扱わない。
- precisetext / noprecisetext: X_HT_EX の "generateactualtext" を有効/無効に する。
- simplejasetup / nosimplejasetup : XTEX の "linebreaklocale" を有効/無効にする。
- bigcode / nobigcode : upT_EX で CMap として UTF8-UCS2 の代わりに UTF8-UTF16 を使う/使わない。
- oldfontcommands / nooldfontcommands: 古い "二文字フォント命令" に対する 警告を抑止する/しない。
- base= $\langle dimen \rangle$: 基底フォントサイズを直接指定する。(xxpt オプションの代用なので、既定値は $10\,\mathrm{pt}$ である。)
- jbase=(dimen): 基底フォントサイズを "和文規準で"直接指定する。
- scale= $\langle real \rangle$: 和文フォントのスケールを表すマクロ \jsScale の値を設定する。もちろんこの値を何らかの方法で和文処理モジュールに渡さないと意味を成さない。既定値は 0.924715 (= $13\,\mathrm{Q}/10\,\mathrm{pt}$)。
- noscale: scale=1 と等価。
- $mag=\langle int \rangle$: \mag 値の直接設定。既定は base から算出する。
- paper={\langle dimen:width\rangle} {\langle dimen:height\rangle} : 用紙サイズ設定。用紙サイズオプション の代用で、既定値は a4paper 相当。
- ja=⟨name⟩: 使用する和文ドライバの指定。
- jafont= $\langle name \rangle$: 和文フォントプリセットの指定。
- japaram= $\langle name \rangle$: 和文フォントパラメタの指定。
- magstyle= $\langle name \rangle$: "版面拡大"の実現方法の選択。
- $dvi=\langle name \rangle: DVI$ モードの時のみに参照されるドライバ指定。
- geometry={class | user}: geometry パッケージの読込を自動的に行うかユーザに

任せるか。

- fancyhdr=\langle bool\rangle: fancyhdr パッケージ用の調整を行うか。
- layout=(name): レイアウト変種の指定。
- textwidth-limit= $\langle number \rangle$: bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
- whole-zw-lines=(bool): 行長を全角単位に丸めるか。
- hyperref-enc= $\langle bool \rangle$: hyperref の文字コード指定補正を行うか。

\bxjs@invscale \bxjs@invscale は TEX における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが 128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
298 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
```

- 299 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
- $300 \def\bxjs@isc@sl@h{65539}$ }
- 301 \def\bxjs@invscale#1#2{%
- 302 \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
- 303 \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
- 304 \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
- 305 \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
- 306 \else
- 307 \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
- 308 \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
- 309 \fi
- 310 \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
- 311 \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
- ${\tt 312} \qquad \verb|\dtempdimb|@tempcnta|@ne$

- 315 \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
- $\verb| \dots| $$ \dots| $$ \dots| \dots$
- 317 \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
- 318 \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
- 319 \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
- 320 \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
- 321 \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
- 322 \endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

■複合設定オプション 彎

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断さ

れる場合に用意される。

\bxjs@composite@proc 複合設定オプションのための遅延処理マクロ。

323 \let\bxjs@composite@proc\relax

pandoc オプションは、Pandoc で LATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から LATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

324 \DeclareOption{pandoc}{%

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。

※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

- 325 \def\bxjs@composite@proc{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue 326
- \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}% 327
- 328 \let\bxjs@engine@given=*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- \bxjs@dvi@opttrue} 330

■エンジン・ドライバオプション 彎

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

331 %\let\bxjs@engine@given\@undefined

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

332 $\$ let\bxjs@engine@opt\@undefined

エンジン明示指定のオプションの処理。

- ※ 0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATEX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 333 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- \let\bxjs@engine@given=*}
- 335 \DeclareOption{latex}{%
- \def\bxjs@engine@opt{latex}% 336
- 337 \let\bxjs@engine@given=n}
- 338 \DeclareOption{platex}{%
- \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- \let\bxjs@engine@given=j}
- 341 \DeclareOption{uplatex}{%
- 342 \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
- \let\bxjs@engine@given=u}
- 344 \DeclareOption{xelatex}{%
- 345 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%

```
\let\bxjs@engine@given=x}
                   346
                   347 \DeclareOption{pdflatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
                        \let\bxjs@engine@given=p}
                   349
                   350 \DeclareOption{lualatex}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
                   351
                        \let\bxjs@engine@given=1}
                   352
                   353 \DeclareOption{platex-ng}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                   354
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   355
                   356 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                        \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                   357
                        \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                   358
                        \let\bxjs@engine@given=g}
                   359
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                   360 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                   361 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                   362 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                   363 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                   364 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                   365 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                   366 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                   367 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                   368 \DeclareOption{dvips}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                   371 \DeclareOption{dviout}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                   372
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   373
                   374 \DeclareOption{xdvi}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                   375
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                   377 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                   378
                        \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                   380 \DeclareOption{nodvidriver}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                   381
                   382
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                   383 \DeclareOption{pdftex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   385
                   386 \DeclareOption{luatex}{%
                        \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                   387
                        \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                   388
                   389 \DeclareOption{xetex}{%
```

- 390 \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
- 391 \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}

「もし DVI モードであればドライバを dvipdfmx にする」というオプション。

- ※1.2 版で dvi オプションが新設されたが、互換性のためこのオプションも残す。
- 392 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
- 393 \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}}

■その他の BXJS 独自オプション 彎

\ifbxjs@usezw \jsZw の同義語として \zw を使えるようにするか。既定は真。

394 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue

zw、nozw オプションの定義。

 $395 \verb|\DeclareOption{nozw}{{\{\%}}$

396 \bxjs@usezwfalse}

397 \DeclareOption{zw}{%

398 \bxjs@usezwtrue}

\ifbxjs@disguise@js JS クラスの派生クラスのふりをするか。既定は真。

 $399 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue$

nojs、js オプションの定義。

400 \DeclareOption{nojs}{%

401 \bxjs@disguise@jsfalse}

402 \DeclareOption{js}{%

403 \bxjs@disguise@jstrue}

\ifbxjs@precisetext XFTFX の "generateactualtext" を有効にするか。既定は偽。

 $404 \neq 04$

noprecisetext / precisetext オプションの定義。

405 \DeclareOption{noprecisetext}{%

406 \bxjs@precisetextfalse}

407 \DeclareOption{precisetext}{\%

408 \bxjs@precisetexttrue}

\ifbxjs@simplejasetup XxTeX の "linebreaklocale" を有効にするか。既定は真(であるが多くの場合は後に無効化される)。

 $409 \verb|\newif\ifbxjs@simplejasetup| \verb|\bxjs@simplejasetuptrue|$

nosimplejasetup / simplejasetup オプションの定義。

410 \DeclareOption{nosimplejasetup}{%

411 \bxjs@simplejasetupfalse}

412 \DeclareOption{simplejasetup}{%

413 \bxjs@simplejasetuptrue}

\ifbxjs@bigcode upTEX で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、オプションで指定することとする。

414 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodefalse

その上で、「 T_{FX} 環境がある程度新しければ利用可能であろう」と判断し bxjs@bigcode の 既定値を真とする。具体的な判断基準として、「TeX のバージョンが 3.14159265(2014年1 月)以上であるか」を採用する。

- 415 \edef\bxjs@tmpa{\expandafter\noexpand\csname\endcsname}
- 416 \def\bxjs@tmpb#1 #2#3\@nil{%
- 417 \ifx1#2\bxjs@bigcodetrue \fi}
- 418 \expandafter\bxjs@tmpb\meaning\bxjs@tmpa1 0\@nil

nobigcode / bigcode オプションの定義。

- 419 \DeclareOption{nobigcode}{%
- 420 \bxjs@bigcodefalse}
- 421 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

423 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※ oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。 ちなみに KOMA-Script では enabledeprecatedfontcommands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- 424 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 426 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue}

■keyval 型のオプション 彎

- 428 \def\bxjs@setkey{%
- \expandafter\bxjs@setkey@a\expandafter{\CurrentOption}}
- 430 \def\bxjs@setkey@a{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}
- 431 \DeclareOption*{\bxjs@setkey}

\bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。

- 432 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
- 433 \let\bxjs@KV@errx\KV@errx
- 434 \let\KV@errx\bxjs@safe@setkeys@a
- 435 \setkeys{#1}{#2}%
- 436 \let\KV@errx\bxjs@KV@errx}
- 437 \def\bxjs@safe@setkeys@a#1{}

 $\verb|\bxjs@set@keyval| \{\langle key\rangle\} \{\langle value\rangle\} \{\langle error\rangle\}|$

```
\bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                                                               438 \det \bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                                                                                \verb|\expandafter\bxjs@next\csname| bxjs@kv@#1@#2\endcsname| |
                                                               439
                                                                                \ifx\bxjs@next\relax
                                                               440
                                                               441
                                                                                         \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                                                              442
                                                                                         #3%
                                                               443
                                                                                \else \bxjs@next
                                                               444
                                                                                \fi}
                                                              445 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                                                               446 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                                                               447
                                                                                  \ClassError\bxjs@clsname
                                                                                      {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
\ifbxjs@scaleset 和文スケール値が指定されたか。
                                                              449 \newif\ifbxjs@scaleset
                             \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                                                              450 \def\jsScale{0.924715}
                                                                         base オプションの処理。
                                                               451 \define@key{bxjs}{base}{\bxjs@setbasefontsize{#1}}
                                                                         jbase オプションの処理。ここでは \jsScale の値を使用する。scale の処理との順序
                                                                 依存を消すため、jbase の処理の実行を遅延させている。
                                                               452 \@onlypreamble\bxjs@do@opt@jbase
                                                               453 \let\bxjs@do@opt@jbase\relax
                                                              454 \ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}} \{jbase} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$4$}}}} \ensuremath{\mbox{$4$}} \} to the contract of the
                                                              455 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
                                                              456
                                                                                \def\bxjs@do@opt@jbase{%
                                                                                         \bxjs@setbasefontlength\@tempdima{#1}%
                                                              457
                                                               458
                                                                                         \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                                                                                         \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}}}
                                                               459
                                                                         scale オプションの処理。
                                                              460 \ensuremath{ define@key{bxjs}{scale}{%}}
                                                                                  \bxjs@scalesettrue
                                                                                \edef\jsScale{#1}}
                                                                         noscale オプションの処理。
                                                               463 \DeclareOption{noscale}{%
                                                                                 \bxjs@scalesettrue
                                                                                 \def\jsScale{1}}
   \bxjs@param@mag mag オプションの値。
                                                               466 \let\bxjs@param@mag\relax
                                                                         mag オプションの処理。
                                                               467 \ensuremath{$\ $$ \ensuremath{$\ $$}{\mbox{edef}\xspaces} = $$ \ensuremath{$\ $$} \ensuremath{$\ $$} = $$ \
                                                                         paper オプションの処理。
                                                               468 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
```

```
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
                                   469 \let\bxjs@jadriver\relax
                                   470 %\let\bxjs@jadriver@given\@undefined
                                          ja オプションの処理。
                                     ※ jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
                                     ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
                                   471 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver{#1}}
                                   472 \displaystyle \frac{472 \text{ } \text{define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%}}}{}
                                   473 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver{#1}\fi}
           \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
                                   474 \let\jsJaFont\@empty
                                          jafont オプションの処理。
                                   475 \define@key{bxjs}{jafont}{\edef\jsJaFont{#1}}
         \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
                                   476 \let\jsJaParam\@empty
                                          japaram オプションの処理。
                                   477 \end{fine} \end{fine} \begin{fine} \end{fine} \align{fine} \alig
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
                                   478 \let\bxjs@magstyle@mag=m
                                   479 \let\bxjs@magstyle@real=r
                                   480 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
                                     (新しい素敵な名前。)
                                     ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
                                      させる。
                                   481 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
                                   482 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
                                   483 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
                                     \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
                                   484 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
                                   485 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
                                   {\tt 486} \qquad \verb|\label{thm:magstyle@defaultbxjs@magstyle@xreal}|
                                   487 \fi\fi
                                   488 \ifjsWithpTeXng
                                   489 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
                                   490 \fi
                                   491 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                                          magstyle オプションの処理。
                                   492 \ensuremath{ \mbox{define@key{bxjs}{magstyle}{\%}}}
                                             \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
```

```
\ClassError\bxjs@clsname
                496
                        {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
                497
                       \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                498
                     fi
                499
 \bxjs@geometry geometry オプションの値。
                500 \let\bxjs@geometry@class=c
                501 \let\bxjs@geometry@user=u
                502 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                   geometry オプションの処理。
                503 \define@key{bxjs}{geometry}{%
                504
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
                505
                      bxjs@geometry@#1\endcsname
                     \verb|\ifx\bxjs@geometry\relax| \\
                506
                       \ClassError\bxjs@clsname
                507
                        {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
                508
                       \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                509
                510
                     \fi}
\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。
                511 \newif\ifbxjs@fancyhdr \bxjs@fancyhdrtrue
                   fancyhdr オプションの処理。
                512 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
                513 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                514 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                     \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
\ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                516 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                   DVIモードのドライバとドライバ種別との対応。
                517 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                518 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                519 \let\bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode
                520 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                521 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                   dvi オプションの処理。
                522 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                     \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                      bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                524
                     \ifx\bxjs@tmpa\relax
                525
                526
                       \ClassError\bxjs@clsname
                527
                        {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                     \else
                528
```

bxjs@magstyle@#1\endcsname

\ifx\bxjs@magstyle\relax

494

495

```
\bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                                                          \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                                                           529
                                                            530
                                                                          \let\bxjs@driver@given\@undefined
                                                            531
                                                                          \bxjs@dvi@opttrue
                                                           532
                                                                     \fi}
  \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                                                              ※ layout が v1 の場合はアレになる。
                                                            533 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                            〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
\ifbxjs@force@chapterabstract
                                                              ※ bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                                                            534 \neq 534 
                                                            535 %<book>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                                  layout オプションの処理。
                                                            536 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                                                           537 % <book > \bxjs@layout@buggyhmargintrue
                                                           538 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                                                           539 }
                                                           540 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
                                                           541 %<book>\bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                           542 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                           543 }
                                                           544 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                                      \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
              \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。\textwidth の上限。
                                                            546 %\let\bxjs@textwidth@limit\@undefined
                                                           547 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
                                                                      \edef\bxjs@textwidth@limit{#1}}
                \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                                                            549 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                                                           550 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                                                      \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
             \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                                                            552 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
                                                            553 \verb|\let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue| \\
                                                           554 \verb|\label{lem:bxjs@kv@wholezwlines@false|bxjs@whole@zw@linesfalse|} 
                                                            555 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true]{\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}
             \ifbxjs@xkanjiskip@cmd 〔スイッチ〕xkanjiskip-cmd の指定値。
                                                            556 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@cmd \bxjs@xkanjiskip@cmdtrue
                                                           557 \verb|\label{lem:bxjs@kv@xkanjiskipcmd@true}| bxjs@xkanjiskip@cmdtrue | bxjs@xkanjiskip@xykanjiskip@cmdtrue | bxjs@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskip@xykanjiskipwoi | bxjs@xykanjiskipwoi | bxjs@xykanjiskipwoi | bxjs@xykanjiskipwoi | bxjs@xykanji
                                                           558 \let\bxjs@kv@xkanjiskipcmd@false\bxjs@xkanjiskip@cmdfalse
                                                           559 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{xkanjiskipcmd}{#1}{}}
```

\ifbxjs@hyperref@enc 〔スイッチ〕hyperref-enc の指定値。

- 560 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
- 561 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
- $562 \verb|\label{lem:bxjs@kv@hyperrefenc@falsebxjs@hyperref@encfalse||}$
- 563 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}

■オプションの実行

LATEX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に { } が含まれ ると正常に処理ができない。これに対処する為 \@removeelement の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

※クラスに \DeclareOption* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであるこ とを利用している。

- 564 \let\bxjs@ltx@removeelement\@removeelement
- 565 \def\@removeelement#1#2#3{%
- \def\reserved@a{#2}%
- \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty 567
- \else \bxjs@ltx@removeelement{#1}{#2}{#3}%
- \fi} 569

デフォルトのオプションを実行し、dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書 き込みます。この special は dvips や最近の dviout が対応しています。multicols や url を \RequirePackage するのはやめました。

- 570 %<article>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,notitlepage,final}
- 571 % \cbook \ ExecuteOptions \ a4paper, two side, one column, title page, open right, final \}
- 572 %<report>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
- 573 %<slide>\ExecuteOptions{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}
- 574 \ProcessOptions\relax
- 575 \bxjs@composite@proc

後処理

- 576 \if@slide
- \def\maybeblue{\@ifundefined{ver@color.sty}{}{\color{blue}}}
- 578 \fi
- 579 \if@landscape
- \setlength\@tempdima {\paperheight}
- \setlength\paperheight{\paperwidth}
- \setlength\paperwidth {\@tempdima} 582
- 583 \fi

■グローバルオプションの整理 ※ ―

グローバルオプションのトークン列に { } が含まれていると、やはり後のパッケージの読 込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions* がエラーになる)。従って、この ようなオプションは除外することにする。

```
584 \@onlypreamble\bxjs@purge@brace@elts
585 \def\bxjs@purge@brace@elts{%
                             \def\bxjs@tmpa{\@gobble}%
                               \expandafter\bxjs@purge@be@a\@classoptionslist,\@nil,%
587
                              \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
589 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@a
590 \def\bxjs@purge@be@a#1,{%
                           \ifx\@nil#1\relax\else
                                          \bxjs@purge@be@b#1{}\@nil
592
                                          \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
593
594
                                           \expandafter\bxjs@purge@be@a
                               \fi}
595
596 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@b
597 \def\bxjs@purge@be@b#1#{\bxjs@purge@be@c}
598 \@onlypreamble\bxjs@purge@be@c
599 \def\bxjs@purge@be@c#1\@nil{%
600 \ \left| \frac{1}{\Omega} \right| \ \left| \frac{1
601 \bxjs@purge@brace@elts
                  papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性が
     あるため、グローバルオプションから外す。
602 \@expandtwoargs\@removeelement
                               {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
604 \@expandtwoargs\@removeelement
```

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pIATeX/ upIATeX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upIATeX の場合は、グローバルオプションに uplatex を追加することで、自動判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

[2016-11-11] pI \neq TEX の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが、これは otf パッケージに uplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

現在の(正規化前の)和文ドライバの値を \bxjs@jadriver@given に保存する。

- $608 \ \text{ifx\bxjs@jadriver\relax\else}$
- 609 \let\bxjs@jadriver@given\bxjs@jadriver

{10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist

{noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

606 \@expandtwoargs\@removeelement

610 **\fi**

エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか を検査する。

```
611 \let\bxjs@tmpb\jsEngine
612 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
613 \let\bxjs@tmpb=g
614 \fi\fi
615 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
616 \let\bxjs@tmpb=u
617 \fi\fi
618 \ifx p\bxjs@tmpb\ifjsInPdfMode\else
619 \let\bxjs@tmpb=n
620 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
いる。)
621 \ifx *\bxjs@engine@given
622 \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pLATpX だった場
合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
623
    \ifx j\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
624
    \else\ifx u\bxjs@engine@given
625
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
626
    \fi\fi
627
628 \fi
629 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
631
      \ClassError\bxjs@clsname
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
632
633
    \fi
634 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
635 \ifjsWithpTeXng
636 \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
637\fi
■ドライバ指定 湾
                 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
638 \@tempswatrue
639\ \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
640
    \ifjsInPdfMode
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
641
642
        \@tempswafalse
      \fi
643
644
    \else\ifx x\jsEngine
      \verb|\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else|
645
        \@tempswafalse
646
      \fi
647
648
   \else
```

```
649
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
650
        \@tempswafalse
651
      \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
        \@tempswafalse
652
653
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
654
        \@tempswafalse
655
656
      \fi\fi
    \fi\fi
657
658 \fi
659 \if@tempswa\else
    \ClassError\bxjs@clsname
     {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
662 \fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
663 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
664 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
665 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
666 \else \@tempswatrue
667 \fi\fi\fi
668 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
670
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
671
      {No driver option is given}
    \fi\fi
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
674
      \edef\bxjs@nxt{%
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
675
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
676
677
        \noexpand\g@addto@macro\noexpand\@classoptionslist
678
         {,\bxjs@driver@opt}%
679
      }\bxjs@nxt
   \fi
680
681 \fi
  エンジンが pTrX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
 エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
 る場合を除く。
682 \ifjsWithpTeXng
683
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
684
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
685
```

```
686
                                                    \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
                              687
                                             \fi\fi
                              688 \fi
                                        ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。
                              689 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
                              690 \bxjs@papersizefalse
                              691\fi
                                 ■その他の BXJS 特有の後処理 ⑧ \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は
                                minimal に変える。ただしエンジンが (u)pT<sub>F</sub>X である場合は standard に変える。
                              692 \def\bxjs@@minimal{minimal}
                              693 \ifx\bxjs@jadriver\relax
                                             \ifx j\jsEngine
                              694
                              695
                                                    \def\bxjs@jadriver{standard}
                                                   \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal
                              697
                              698
                                            \fi
                              699 \fi
                                       エンジンオプションがない場合はエラーを出す。
                                 ※ただし ja 非指定の場合はスキップする。
                              700 \ifx\bxjs@jadriver@given\@undefined\else
                                             \ifx\bxjs@engine@given\@undefined
                              701
                                                    \ClassError\bxjs@clsname
                              702
                                                       {An engine option must be explicitly given}% = \frac{1}{2} \left( \frac{1}{2} \right)^{2} \left( \frac{1}{2
                              703
                                                       {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak
                              704
                              705
                                                          engine option.\MessageBreak\@ehc}
                              706 \fi\fi
                                       新しい LuaTEX (0.87 版以降) では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて
                                 いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag* であり、エラーの場合は既定値に
                                 置き換えられる。)
                              707 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else
                                             \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
                                                    \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                              709
                              710
                                                    \ClassError\bxjs@clsname
                              711
                                                       {The engine does not support 'magstyle=usemag'}%
                              712
                                                       {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak
                                                          The default value 'nomag*' is used instead.\MessageBreak \@ehc}
                              714 \fi
                              715 \fi
                                       オプション処理時に遅延させていた jbase の処理をここで実行する。
                              716 \bxjs@do@opt@jbase
\Cjascale 和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。
```

717 \let\Cjascale\jsScale

8bit 欧文 T_{EX} の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を通用させるため。)

718 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T

719 \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100

720 \catcode\@tempcnta\active

721 \advance\@tempcnta\@ne

722 \repeat

723 \fi

js オプション指定時は、jsarticle(または jsbook)クラスを読込済のように振舞う。 % 「2 つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に 異常ではない。

724 \ifbxjs@disguise@js

725 % <book | report > \def \bxjs@js@clsname{jsbook}

726 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}

727 \@namedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}

728\fi

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

729 \g@addto@macro\@classoptionslist{,nosetpagesize}

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

731 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}

732 \fi

-0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側0.5インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。

- 733 \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- 734 \begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup
- 735 \expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname
- 736 % \newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight
- \setlength{\stockwidth}{\paperwidth} 737
- \setlength{\stockheight}{\paperheight}
- \advance \stockwidth 2in
- 740 \advance \stockheight 2in
- 741 \fi

■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

- 742 %<slide>\def\n@baseline{13}%
- 743 %<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}%
- 744 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

- 745 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
- 746 \jsc@magtrue
- 747 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 748 \jsc@mag@xrealtrue
- 749 \fi\fi

サイズの変更は TrX のプリミティブ \mag を使って行います。9 ポイントについては行送 りも若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていた ところを \inv@mag in に直しましたので、geometry パッケージと共存できると思います。 なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/(10 pt) × 1000 と算出。BXJS クラスでは、\mag を 直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

- 750 \ifx\bxjs@param@mag\relax
- \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize 751
- \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25 752
- \divide\@tempdima16384\relax \@tempcnta\@tempdima\relax
- \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta} 754

```
755 \else
756 % mag 値が直接指定された場合
     \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
     \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@param@mag}
758
     \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
759
760 % 有効な mag 値の範囲は 1--32768
     \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
761
762
     \advance\@tempcnta100000
     \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\@nil{\@tempdima=#2#3#4.#5\p@}
763
     \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
764
     \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
765
766 \fi
767 \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
768 \def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\@tempdima=#2#3.#4\p@}
769 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
770 \edef\jsc@magscale{\strip@pt\@tempdima}
771 \let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize
772 %\typeout{\string\jsDocClass: \meaning\jsDocClass}
773 %\typeout{\string\jsEngine: \meaning\jsEngine}
774 %\typeout{\string\jsBaseFontSize: \jsBaseFontSize}
775 %\typeout{\string\bxjs@param@mag: \bxjs@param@mag}
776 %\typeout{\string\jsc@magscale: \jsc@magscale}
777 %\typeout{\string\ifjsc@mag: \meaning\ifjsc@mag}
778 %\typeout{\string\ifjsc@mag@xreal: \meaning\ifjsc@mag@xreal}
```

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

\mag する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、\jsc@mpt を \p0? と書く。その上で、\mag する場合は? を無視して \p0 と解釈させ、\mag しない場合は? を英字扱いにして \p0? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。※ (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \p0? 表記を止める予定。

```
779 \newdimen\jsc@mpt
780 \newdimen\jsc@mmm
781 \ifjsc@mag
782 \jsc@mpt=1\p0
783 \jsc@mmm=1mm
784 \catcode`\?=9 % \p0? read as \p0
785 \else
786 \jsc@mpt=\jsc@magscale\p0
787 \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
788 \catcode`\?=11 \let\p0?\jsc@mpt
789 \fi
```

790 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax

ここで pT_EX の zw に相当する単位として用いる長さ変数 $\setminus jsZw$ を作成する。約束により、これは $\setminus jsScale \times ($ 指定フォントサイズ) に等しい。

```
nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。
         791 \newdimen\jsZw
        792 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
         793 \ifbxjs@usezw
             \providecommand*\zw{\jsZw}
        795 \fi
\zwspace 全角幅の水平空き。
        796 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}
           そして、magstyle が nomag* の場合は、NFSS にパッチを当てる。
        797 \ifjsc@mag@xreal
             \RequirePackage{type1cm}
             \let\jsc@invscale\bxjs@invscale
          ムニャムニャムニャ……。
              \ensuremath{\texttt{Vexpandafter}}\ OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
         800
         801
              \verb|\expandafter\ex| OMX/cmex/m/n/10\endcsname\end{|} relax
              \let\jsc@get@external@font\get@external@font
        802
         803
              \def\get@external@font{%
                \jsc@preadjust@extract@font
         804
                \jsc@get@external@font}
        805
              \def\jsc@fstrunc#1{%
         806
                \edef\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%
        807
                \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.****\@nil}
        808
              \def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%
         809
                \f $
        810
        811
                  \edef\jsc@tmpa{#1%
                  \finum#2#3>\z0 .#2\ifnum#3>\z0 #3\fi\fi}%
        812
         813
        814
              \def\jsc@preadjust@extract@font{%
                \let\jsc@req@size\f@size
        815
         816
                \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
                \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
        817
                \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
        818
                \let\f@size\jsc@ref@size}
        819
              \def\execute@size@function#1{%
        820
                \let\jsc@cref@size\f@size
        821
                \let\f@size\jsc@req@size
        822
        823
                \csname s@fct@#1\endcsname}
              \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
        824
              \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
        825
                \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
         826
        827
                \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
                \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
        828
              \def\gen@sfcnt{%
         829
                \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
         830
         831
                \empty@sfcnt}
```

```
832
                        \def\genb@sfcnt{%
                   833
                          \edef\mandatory@arg{%
                            \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                   834
                          \empty@sfcnt}
                   835
                        \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
                   836
                   837 \fi
                      [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の,単位 pt を
                    \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                    られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
       \jsc@medskip 838 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                   839 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
       \jsc@bigskip
                   840 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
 \jsc@medskipamount 841 \newskip\jsc@smallskipamount
                   842 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
 \jsc@bigskipamount
                   843 %\newskip\jsc@medskipamount
                   844\ \%\ jsc@medskipamount =6\ jsc@mpt plus 2\ jsc@mpt minus 2\ jsc@mpt
                   845\ \text{\newskip\jsc@bigskipamount}
                   846 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt
                      [2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケール
                    します。
                      [2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,
                    \stockheight が定義されています。
                    ■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力し
                      [2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。
                   847 % \ifpapersize
                          \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
                   848 %
                   849 %
                          \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
                   850 %
                          \iftombow
                   851 %
                            \advance \@tempdima 2truein
                   852 %
                            \advance \@tempdimb 2truein
                   853 %
                   854 %
                          \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
                   855 % \fi
```

3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、 \LaTeX X の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000)では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の I Δ TeX で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

856 \chardef\bxjs@periodchar=`\.

857 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{\spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar}

 $858 \left(\frac{0}{bxjs@SE{}} \right)$

4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は,三つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って,たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い, 行送りは 16 ポイントである

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7	
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10	
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4	

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATeX 2ε で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが,これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに,プラスになったりマイナスになったりするのは,追い出しと追い込みの混在が生じ,統一性を欠きます。なるべく追い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが,ごくわずかなマイナスは許すことにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あるいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けても空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行され

るように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

- 859 \def\bxjs@tmpa{\def\set@fontsize##1##2##3}
- 860 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
- \set@fontsize{#1}{#2}{#3}% 861
- 862 % 末尾にコードを追加
- \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%
- 864 \size@update
- \jsFontSizeChanged}% 865

866 }

\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用 のフック \jsResetDimen を実行する。

- 867 \newcommand*\jsFontSizeChanged{%
- \jsZw=\f@size\p@
- \jsZw=\jsScale \jsZw 869
- \ifdim\parindent>\z@
- \if@english \parindent=1em 871
- \parindent=1\jsZw 872
- \fi 873
- 874 \fi\relax
- \jsResetDimen}

\jsResetDimen ユーザ定義用のフック。

876 \newcommand*\jsResetDimen{}

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では,拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

- 877 \ifjsc@mag
- 878 \let\jsc@setfontsize\@setfontsize
- 879 \else
- \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
- \@setfontsize#1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}} 881

882 \fi

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴え ます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されて いない。

883 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines

\widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対し て、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

```
884 \neq 1
```

- 885 \if@english
- 886 \narrowbaselinestrue
- 887\fi
- 888 \def\narrowbaselines{%
- 889 \narrowbaselinestrue
- 890 \skip0=\abovedisplayskip
- 891 \skip2=\abovedisplayshortskip
- 892 \skip4=\belowdisplayskip
- 893 \skip6=\belowdisplayshortskip
- 894% 一時的に警告を無効化する
- 895 \let\bxjs@ltx@nomath\@nomath
- 896 \let\@nomath\@gobble
- 897 \@currsize\selectfont
- 898 \let\@nomath\bxjs@ltx@nomath
- 899 \abovedisplayskip=\skip0
- 900 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 901 \belowdisplayskip=\skip4
- 902 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- 903 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

904 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%

- 905 \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- 906 \else \expandafter\@secondoftwo
- 907 \fi

908 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント(アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25\approx 1.73$ であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

909 \renewcommand{\normalsize}{%

- 910 \bxjs@if@narrowbaselines{%
- 911 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- 912 }{%else
- 913 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
- 914 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T_EX Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 915 \abovedisplayskip 11\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
- 916 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
- 917 \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- $918 \quad \verb|\belowdisplayshortskip| \verb|\belowdisplayskip|$

最後に,リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を, \@listi にコピーしておきます。 \@listI の設定は後で出てきます。

919 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

 $920 \normalsize$

\Chs

 $\column{2}{c} \column{2}{c} \column{2}{c$

\Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー

\Cvs ド 0x3441) へ変更しました。

\Cwd 等の変数は pTFX 系以外では未定義なのでここで定義する。

- 921 \ifx\Cht\@undefined \newdimen\Cht \fi
- 922 \ifx\Cdp\@undefined \newdimen\Cdp \fi
- $923\$ \ifx\Cwd\@undefined \newdimen\Cwd \fi
- $924\$ \ifx\Cvs\@undefined \newdimen\Cvs \fi
- $925\$ \ifx\Chs\Qundefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の88% と 12% の値とする。

 $926 \stlength\Cht{0.88\jsZw}$

```
927 \setlength\Cdp{0.12\jsZw}
928 \setlength\Cwd{1\jsZw}
929 \setlength\Cvs{\baselineskip}
930 \setlength\Chs{1\jsZw}
```

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば $16 \times 0.9 = 14.4$ ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ 4 ± 2 , 2 ± 1 ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
931 \newcommand{\small}{%
932 \bxjs@if@narrowbaselines{%
933 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
934 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
935 }{%else
936 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
937 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
938
     }%
     \abovedisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
939
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
     \belowdisplayskip \abovedisplayskip
941
942
     \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
     \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
943
                 \topsep \z@
944
                 \parsep \z@
945
                 \itemsep \parsep}}
946
```

\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は、元はそれぞれ 3 ± 1 , 2 ± 1 ポイントでしたが、ここではゼロ(\z0)にしました。

```
947 \newcommand{\footnotesize}{%
948 \bxjs@if@narrowbaselines{%
949 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
950 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
951 }{%else
952 %<!kiyou>
                \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
953 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
     }%
954
     \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
955
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
956
     \belowdisplayskip \abovedisplayskip
957
     \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
958
     \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
959
                 \topsep \z@
960
961
                 \parsep \z@
                 \itemsep \parsep}}
962
```

```
\scriptsize それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
           ます。特に注意すべきは \large で,これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い,
     \tiny
    \large 行送りを \normalsize と同じにすることによって、節見出しが複数行にわたっても段間で
           行が揃うようにします。
    \Large
             [2004-11-03] \HUGE を追加。
    \LARGE
          963 \newcommand{\scriptsize}{\jsc@setfontsize\scriptsize\@viipt\@viiipt}
     \huge
           964 \newcommand{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
     \Huge _{965} \if@twocolumn
     \HUGE 966 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
          967 % \ \newcommand \\large \\ \jsc@setfontsize \\ \large \\ \111 \\ \n@baseline \\ \}
          969 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
          970 %<kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large{11.111}{17}}
          972 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
          973 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
          974 \newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
          975 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
          976 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
          977 \newcommand{\HUGE}{\jsc@setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

978 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}AT_{EX} 2_{\varepsilon}$ 美文書作成入門』(1997年) では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが、\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

```
979 % \newcommand{\headfont}{\bfseries}
```

980 \newcommand{\headfont}{\sffamily}

981 % \newcommand{\headfont}{\sffamily\fontseries{sbc}\selectfont}

5 レイアウト

■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが, 2zw にしました。\columnseprule

このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

- 982 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}
- 983 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}
- 984 \setlength\columnseprule{0\jsc@mpt}

■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 985 \verb|\lineskip{1\jsc@mpt}|$

\normallineskiplimit 986 \setlength\normallineskip{1\jsc@mpt}

987 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@mpt}

988 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

989 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

990 \setlength\parskip{0\jsc@mpt}

991 \if@slide

992 \setlength\parindent{0\p0}

993 \else

994 \setlength\parindent{1\Cwd}

995 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

\@highpenalty 996 \@lowpenalty 51

997 \@medpenalty 151

998 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

999 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

1000 % \brokenpenalty 100

5.1 ページレイアウト

■準備 湾

```
現状ではここで \mag を設定している。
                     \topskip も指定する。
                 1001 \ifjsc@mag
                 1002 \mag=\bxjs@param@mag
                 1003 \fi
                 1004 \setlength{\topskip}{10\p0?}
                     \bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H})
                   に変換する。
                 1005 \def\bxjs@read@a{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@read@b}
                 1006 \def\bxjs@read@b{%
                       \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@read@c
                 1007
                       \else \expandafter\bxjs@read@d \fi}
                 1009 \def\bxjs@read@c#1#2#3\@nil{\def\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}}
                 1010 \def\bxjs@read@d#1\@nil{}
                 1011 \expandafter\bxjs@read@a\bxjs@param@paper\@nil
\bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                 1012 \edef\bxjs@layout@paper{%
                 1013 \ifjsc@mag truedimen,\fi
                 1014
                      \if@landscape landscape,\fi
                 1015
                       \bxjs@param@paper}
     \bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
                 1016 %<*article|report>
                 1017 \def\bxjs@layout{%
                      headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                       headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                 1019
                       hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                 1020
                       vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                 1021
                 1022 }
                 1023 %</article|report>
                 1024 %<*book>
                 1025 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                    %---
                 1026 % アレ
                 1027 \def\bxjs@layout{%
                      headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                       hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                       vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                 1030
                 1031 }
                                                    %---
                 1032 \else
                 1033 % 非アレ
                 1034 \def\bxjs@layout{%
```

```
1035
                                                                 headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                                                   1036
                                                                 hmargin=18\jsc@mmm,%
                                                   1037
                                                                 vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                                                   1038 }
                                                   1039 \fi
                                                                                                                                          %---
                                                   1040 %</book>
                                                   1041 %<*slide>
                                                   1042 \def\bxjs@layout{%
                                                   noheadfoot,%
                                                                 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                                                   1044
                                                                 vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
                                                   1045
                                                   1046 }
                                                   1047 %</slide>
                          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                                                   1048 \newdimen\fullwidth
         \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth の上限の全角単位での値。
                                                   1049 %<*book>
                                                   1050 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
                                                   1051 \ifx\bxjs@textwidth@limit\@undefined\else
                                                                 \let\c@bxjs@cnta\@tempcnta
                                                                 \setcounter{bxjs@cnta}{\bxjs@textwidth@limit}
                                                   1053
                                                                 1054
                                                   1055 \fi
                                                   1056 %</book>
\bxjs@postproc@layout geometry の後処理。
                                                   1057 \def\bxjs@postproc@layout{%
                                                   1058 % ドライバ再設定
                                                                 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
                                                   1060
                                                                      \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
                                                                 \fi
                                                   1061
                                                   1062 % textwidth 調整
                                                                 \ifbxjs@whole@zw@lines
                                                   1063
                                                   1064
                                                                      \@tempdimb=\textwidth
                                                                      \if@twocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
                                                   1065
                                                                      \verb|\divide| textwidth | @tempdima | multiply | textwidth | multiply | multipl
                                                   1066
                                                                      \advance\@tempdimb-\textwidth
                                                   1067
                                                                      \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
                                                   1068
                                                   1069
                                                                      \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
                                                   1070
                                                                 \fullwidth=\textwidth
                                                   1071
                                                   1072 %<*book>
                                                   1073
                                                                 \ifdim\textwidth>\jsTextWidthLimit\Cwd
                                                                      \textwidth=\jsTextWidthLimit\Cwd
                                                   1074
                                                   1075
                                                                      \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                                                   1076
                                                               \fi
                                                   1077 %</book>
```

```
1078 % textheight 調整
1079
                     \@tempdimb=\textheight
                      \advance\textheight-\topskip
                      \verb|\divide| textheight| baselineskip \verb|\multiply| textheight| baselineskip | textheight| baselineskip
1081
1082
                      \advance\textheight\topskip
                      \advance\@tempdimb-\textheight
1083
                      \advance\topmargin0.5\@tempdimb
1084
1085 % headheight 調整
                     \@tempdima=\topskip
1086
                      \advance\headheight\@tempdima
1087
                      \advance\topmargin-\@tempdima
 1088
1089 % marginpar 設定
                    \setlength\marginparsep{\columnsep}
1090
                      \setlength\marginparpush{\baselineskip}
1091
                      \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
1092
                                    -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
1093
                      \ifbxjs@whole@zw@lines
1094
                             \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
1095
1096
                     \fi
1097 % 連動する変数
1098
                      \maxdepth=.5\topskip
                      \stockwidth=\paperwidth
1099
1100
                      \stockheight=\paperheight
1101 }
```

\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。

- ※ geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
- 1102 \edef\jsGeometryOptions{%
- \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}

■geometry パッケージ読込 彎

geoemtry オプションの値に応じて分岐する。

まずは geometry=class の場合。

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

- 1105 \@onlypreamble\bxjs@revert
- 1106 \let\bxjs@revert\@empty
- 1107 \edef\bxjs@tmpa{\the\ht\strutbox}
- 1108 \ht\strutbox=10\p@?
- 1109 \g@addto@macro\bxjs@revert{\ht\strutbox=\bxjs@tmpa\relax}

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止 するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプ

```
1110 \ifbxjs@papersize
                           \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
                     1111
                     1112
                             \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
                           \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
                     1113
                     1114
                             \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
                     1115
                           \let\bxPapersizeSpecialDone=t
                     1116
                     1117 \else
                           \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
                     1119 \fi
                         ここで geometry を読み込む。
                       ※ geometry の begin-document フックにおいて、LuaTFX の旧版互換を有効にする。
                     1120 \edef\bxjs@nxt{%
                           \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}}
                     1122 \AtBeginDocument{\bxjs@pre@geometry@hook}
                     1123 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
                     1124 \bxjs@nxt \bxjs@revert
                     1125 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}
 \bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。
                       ※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書
                       き戻す処理を入れている。
                     1126 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver
                     1127 \bxjs@postproc@layout
\bxjs@pre@geometry@hook 1.2 版より、geometry の 4.x 版の使用は非推奨とする。
                       ※将来サポートを廃止する予定。
                     1128 \@onlypreamble\bxjs@pre@geometry@hook
                     1129 \def\bxjs@pre@geometry@hook{%
                           \@ifpackageloaded{geometry}{%
                             1131
                     1132
                               \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                                {The 'geometry' package installed\MessageBreak
                     1133
                                 is too old (< v5.0)}%
                     1134
                               \if x\jsEngine \ifnum\mag=\@m\else
                     1135
                                 \def\bxjs@Gm@driver{pdftex}
                     1136
                     1137
                                 \ifx\pdfhorigin\@undefined \newdimen\pdfhorigin \fi
                                 \ifx\pdfvorigin\@undefined \newdimen\pdfvorigin \fi
                     1138
                     1139
                               \fi\fi
                     1140
                     1141
                             \ifjsWithpTeXng
                               \ifx\Gm@driver\@empty
                     1142
                                 \def\Gm@driver{pdftex}%
                     1143
                               \fi
                     1144
                             \fi
                     1145
```

ションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時

は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

1146 }{}}

\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。

- \setpagelayout{\langle text\rangle}: 現在の geometry の設定の一部を修正する。
- \setpagelayout*{(text)}: 用紙以外の設定をリセットして、改めて設定を行う。

どちらも設定の後で後処理 \bxjs@postproc@layout を実行する。

```
1147 \def\setpagelayout{\@ifstar
```

- 1148 {\bxjs@reset@layout}{\bxjs@modify@layout}}
- 1149 \def\bxjs@modify@layout#1{%
- 1150 \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{#1,truedimen}}%
- 1151 \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}
- 1152 \def\bxjs@reset@layout#1{%
- 1153 \edef\bxjs@nxt{\noexpand\geometry{reset,\bxjs@layout@paper,#1,truedimen}}%
- 1154 \bxjs@nxt\bxjs@postproc@layout}

geometry=class の場合の処理はここで終わり。

次に、geometry=userの場合の処理。

1155 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user

この場合はユーザが何らかの方法 (例えば geometry を読み込む) でページレイアウトを 設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen) のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

- 1156 \AtBeginDocument{\bxjs@check@page@layout}
- $1158 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc deck@page@layout}} \label{layout} % \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}} \label{layout} % \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc deck@page@layout}} \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}} \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}} \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\$
- 1159 \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
- 1160 \ClassError\bxjs@clsname
- 1161 {Page layout is not properly set}%
- 1162 {\@ehd}
- 1163 \fi}
- 1164 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
- 1165 \setlength{\textwidth}{6.5in}%
- 1166 \setlength{\textheight}{8in}}

\setpagelayout はとりあえず無効にしておく。

- 1167 \let\bxjs@geometry@driver\relax
- $1168 \verb|\def\setpagelayout{\@ifstar}|$
- 1169 {\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}
- 1170 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
- 1171 \ClassError\bxjs@clsname
- 1172 {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
- because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}

geometry=user の場合の処理はここで終わり。

1174 \fi\fi

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

<*isclasses>

■縦方向のスペース

\topskip

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので,2倍に増やしました。代わりに,版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

1175 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17)

1176 \if@slide

1177 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}

1178 \else

1179 \setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-06-26)

1180 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは, book で 0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍(最小 \baselineskip) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

1181 %<*article|kiyou>

1182 \if@slide

\setlength\footskip{0pt} 1183

1184 \else

\setlength\footskip{0.03367\paperheight} 1185

\ifdim\footskip<\baselineskip 1186

\setlength\footskip{\baselineskip}

1188 \fi

1189 \fi

1190 %</article|kiyou>

1191 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}

1192 %<*book>

1193 \if@report

1194 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}

```
\ifdim\footskip<\baselineskip
       1195
       1196
               \setlength\footskip{\baselineskip}
       1197
       1198 \else
             \setlength\footskip{0pt}
       1199
       1200 \fi
       1201 %</book>
       1202 %<*report>
       1203 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
       1204 \ifdim\footskip<\baselineskip
             \setlength\footskip{\baselineskip}
       1205
       1206 \fi
       1207 %</report>
\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
         れ以外で 25pt (約8.79mm) になっていました。ここでは article は \footskip - \topskip
         としました。
           [2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに
         \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。
       1208 %<*article>
       1209 \if@slide
             \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
       1211
             1212
             \dot{0} addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
       1213 \else
             \setlength\headsep{\footskip}
       1214
       1215
             \addtolength\headsep{-\topskip}
       1216 \fi
       1217 %</article>
       1218 %<*book>
       1219 \if@report
             \setlength\headsep{\footskip}
             \addtolength\headsep{-\topskip}
       1221
       1222 \else
             \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
       1223
             \dot{addtolength} \end{constraint} \ added (2016-10-08)
             \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
       1226 \fi
       1227 %</book>
       1228 %<*report>
       1229 \text{ } \text{length} \
       1230 \addtolength\headsep{-\topskip}
       1231 %</report>
       1232 %<*jspf>
       1233 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
       1234 \addtolength\headsep{-\topskip}
       1235 %</jspf>
```

1236 %<*kiyou>

```
1237 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
```

- 1238 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
- 1239 \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
- $1240 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\%% added (2016-10-08)$
- 1241 %</kiyou>
- \maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain TeX や LATeX 2.09 では 4pt に固定でした。LATeX2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。
 - 1242 \setlength\maxdepth{.5\topskip}

■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

1243 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍(二段組では全角幅の偶数倍)にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw(25 文字 $\times 2$ 段)+段間 8mm とします。

```
1244 %<*article>
```

1245 \if@slide

1246 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}

1247 \else

1248 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}

1249 \fi

1250 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi

 $1251 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima|| \\$

 $1252 \stlength\textwidth{fullwidth}$

1253 %</article>

1254 %<*book>

 $1255 \setminus if@report$

 $1256 \quad \texttt{\setlength\fullwidth\{0.76\paperwidth\}}$

1257 **\else**

1258 \setlength\fullwidth{\paperwidth}

1260 \fi

1261 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi

1262 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima

```
1263 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1264 \if@report \else
     \if@twocolumn \else
        \ifdim \fullwidth>40zw
1266
          \setlength\textwidth{40zw}
1267
1268
        \fi
     \fi
1269
1270 \fi
1271 %</book>
1272 %<*report>
1273 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1274 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1275 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1276 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1277 %</report>
1278 %<*jspf>
1279 \setlength\fullwidth{50zw}
1280 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1281 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1282 %</jspf>
1283 %<*kiyou>
1284 \stlength\fullwidth{48zw}
1285 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1286 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1287 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました $(2016-08-17\$ での修正漏れ)。

```
1288 %<*article|book|report>
1289 \if@slide
1290 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
1291 \else
1292 \setlength{\textheight}{0.83\paperheight}
1293 \fi
```

```
1294 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
                  \headheight (2003-06-26)
              1295 \addtolength{\text{textheight}}{-\headsep}
              1296 \addtolength{\text{textheight}}{-\footskip}
              1297 \addtolength{\textheight}{-\topskip}
              1298 \divide\textheight\baselineskip
              1299 \multiply\textheight\baselineskip
              1300 %</article|book|report>
              1301 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
              1302 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47\baselineskip}
              1303 \addtolength{\textheight}{\topskip}
              1304 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}
              1305 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}
  \flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に,
               \flushbottom にも余裕を持たせます。元の 	ext{IMF} X 2_{arepsilon} での完全な \flushbottom の定
               義は
                 \def\flushbottom{%
                   \let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}
               ですが,次のようにします。
              1306 \def\flushbottom{%
                   \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}%
              1308
                   \let\@texttop\relax}
 \marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込
\marginparpush みどうしの最小の間隔です。
              1309 \setlength\marginparsep{\columnsep}
              1310 \setlength\marginparpush{\baselineskip}
\oddsidemargin それぞれ奇数ページ, 偶数ページの左マージンから 1 インチ引いた値です。片面印刷では
\evensidemargin \oddsidemargin が使われます。T_EX は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トン
               ボ関係のオプションが指定されると pL\GammaTrX 2_{\varepsilon} (plcore.ltx) はトンボの内側に 1in のス
               ペース(1truein ではなく)を挿入するので、場合分けしています。
              1311 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
              1312 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}
              1313 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
              1314 \iftombow
              1315 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
              1316 \else
                   \addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
              1317
              1318 \fi
              1319 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
              1320 \if@mparswitch
                  \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
                   \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
              1322
```

1323 \fi

\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin + 1インチ) から1センチを引き, さらに \marginparsep (欄外の書き込みと本文のアキ) を 引いた値にしました。最後に1zwの整数倍に切り捨てます。

- 1324 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
- 1325 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
- 1326 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag in}
- $1327 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}$
- 1328 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
- $1329 \verb| \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}|$
- 1330 \@tempdima=1zw
- 1331 \divide\marginparwidth\@tempdima
- 1332 \multiply\marginparwidth\@tempdima

\topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じで あったので,変化はないはずです。

[2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが、\topmargin は従来の値か ら変わらないように調節しました。…のつもりでしたが、\textheight を増やし忘れてい たので変わってしまっていました(2016-08-26修正済み)。

- 1333 \setlength\topmargin{\paperheight}
- $1334 \addtolength topmargin{-\textheight}$
- 1335 \if@slide
- 1336 \addtolength\topmargin{-\headheight}
- 1337 \else
- \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -\headheight (2003-06-26)
- 1339 \fi
- $1340 \addtolength \topmargin {-\headsep}$
- $1341 \addtolength \topmargin{-\footskip}$
- 1342 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
- 1343 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
- 1344 \iftombow
- \addtolength\topmargin{-1in}
- 1346 \else
- 1347 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
- 1348 \fi

</jsclasses>

■脚注

\footnotesep 各脚注の頭に入る支柱(strut)の高さです。脚注間に余分のアキが入らないように, \footnotesize の支柱の高さ(行送りの0.7倍)に等しくします。

ここは元々は

{\footnotesize\global\setlength\footnotesep{\baselineskip}}

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1349 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが,和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

1350 \setlength{\skip\footins}{16\p0? \@plus 5\p0? \@minus 2\p0?}

■フロート関連 フロート (図,表) 関連のパラメータは Ipprox 1 pprox 2 ϵ 本体で定義されていますが,ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに,カウンタは内部では \co を名前に冠したマクロになっています。

1351 \setcounter{topnumber}{9}

\topfraction 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

1352 \renewcommand{\topfraction}{.85}

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。 $[2003-08-23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1353 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1354 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。 [2003-08-23] ちょっと増やしました。

1355 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

1356 \renewcommand{\textfraction}{.1}

\floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。 $1357 \text{cenewcommand{floatpagefraction}{.8}}$

\c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。 $[2003\text{-}08\text{-}23] \ \text{ちょっと増やしました}.$

1358 \setcounter{dbltopnumber}{9}

```
\dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7
                                                        を 0.8 に変えてあります。
                                                   1359 \renewcommand{\dbltopfraction}{.8}
\dblfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8
                                                       に変えてあります。
                                                   1360 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}
                            \floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・
                                                     下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本
                   \textfloatsep
                          \intextsep 文との距離です。
                                                   1361 \setlength\floatsep
                                                                                                                {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}
                                                   1362 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                                   1363 \setlength\intextsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}
                     \dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。
                                                                                                                          {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
            \dbltextfloatsep 1364 \setlength\dblfloatsep
                                                   1365 \setlength\dbltextfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                 \@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,
                                 \Ofpsep \Ofpsep はフロート間に入ります。
                                 \ensuremath{\tt Qfpbot}\ 1366 \ \ensuremath{\tt Mfptop{0p0? \ensuremath{\tt Qfplus}\ 1fil}
                                                   1367 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
                                                   1368 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
                          \@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
                          \verb|\dblfpsep| 1369 \end{tense} $$1369 \end{tense}
```

6 改ページ(日本語 TFX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage
\pltx@cleartoleftpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,同じ命令を追加しました。

\pltx@cleartooddpage

\pltx@cleartoevenpage

- 1. \pltx@cleartorightpage: 右ページになるまでページを繰る命令
- 2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令
- 3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令
- 4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

となっています。

\@dblfpbot 1370 \setlength\@dblfpsep{8\p@? \@plus 2fil}

1371 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}

1373 % \ifodd\c@page

1374 % \iftdir

1375 % \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage

1376 % \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi

```
1377 %
                                \fi
1378 % \else
1379 %
                               \ifydir
1380 %
                                        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1381 %
                                        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1382 %
                                \fi
1383 % \fi\fi}
1384 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1385 % \ifodd\c@page
                                \ifydir
1386 %
                                        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1387 %
                                        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1388 %
1389 %
                                \fi
1390 % \else
1391 %
                                \iftdir
1392 %
                                       \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1393 %
                                        \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1394 %
                                \fi
1395 % \fi\fi}
1396 \ensuremath{\mbox{\sc learpage\sc l
1397
                     \ifodd\c@page\else
                             \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1398
                             \verb|\if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi|
1399
1400
                    \fi\fi}
1401 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside
                     \ifodd\c@page
1402
                             \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1403
1404
                             \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
 1405
                     \fi\fi}
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

```
1406 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage
```

1407 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pLATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book \cleardoublepage クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

```
1408 %<*book|report>
1409 \if@openleft
1411 \else\if@openright
1412 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
1413 \fi\fi
```

1414 %</book|report>

7 ページスタイル

ページスタイルとして, $ext{IAT}_{ ext{EX}} 2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty,plain,headings,myheadings があります。このうち empty,plain スタイルは $ext{IAT}_{ ext{EX}} 2_{\varepsilon}$ 本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

\@evenhead \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

\Coddhead フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

\@oddfoot 柱の内容は、\chapter が呼び出す \chaptermark{何々}、\section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右} 右の柱を設定します。

\leftmark 左の柱を出力します。

\rightmark 右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。IFTEX 本体で定義されているものをコメントアウトした 形で載せておきます。

 $1415\,\%\ \text{def\ps@empty}\{\%\$

1416 % \let\@mkboth\@gobbletwo

1417 % \let\@oddhead\@empty

1418 % \let\@oddfoot\@empty

1419 % \let\@evenhead\@empty

1420 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

1421 \def\ps@plainfoot{%

1423 \let\@oddhead\@empty

 $1424 $$ \def\@oddfoot{\operatorname{\underline{\lambda}hfil}\thetaepage\hfil}%$

1425 \let\@evenhead\@empty

```
1426
                                          \let\@evenfoot\@oddfoot}
                            1427 \def\ps@plainhead{%
                                          \let\@mkboth\@gobbletwo
                                          \let\@oddfoot\@empty
                            1429
                                          \let\@evenfoot\@empty
                            1430
                                         \def\@evenhead{%
                            1431
                                               \if@mparswitch \hss \fi
                            1432
                            1433
                                               \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
                                               \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                            1434
                                          \def\@oddhead{%
                            1435
                                               \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
                            1438 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン
                                ダーラインを引くようにしてみました。
                                      まず article の場合です。
                            1439 %<*article|slide>
                            1440 \ \text{if@twoside}
                                         \def\ps@headings{%
                            1441
                                               \let\@oddfoot\@empty
                            1443
                                               \let\@evenfoot\@empty
                                               \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
                            1444
                            1445
                                                   \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
                                                   \if@mparswitch\else \hss \fi}%
                            1446
                            1447
                                               \def\@oddhead{%
                            1448
                                                   \underline{%
                                                         \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
                            1449
                                               \let\@mkboth\markboth
                            1450
                                               \def\sectionmark##1{\markboth{%
                            1451
                                                      \ \colored{ \colored} \colored{ \colored} $$ \colored{ \colored} \colored{ \colored} $$ \
                            1452
                            1453
                            1454
                                               \def\subsectionmark##1{\markright{%
                                                      \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \thesubsection \hskip1\jsZw\fi
                                                      ##1}}%
                            1456
                            1457
                            1458 \else % if not twoside
                                          \def\ps@headings{%
                            1459
                                               \let\@oddfoot\@empty
                            1460
                                               \def\@oddhead{%
                             1461
                                                   \underline{%
                            1462
                                                         \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
                            1463
                                               \let\@mkboth\markboth
                            1464
                            1465
                                               \def\sectionmark##1{\markright{%
                            1466
                                                        \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \thesection \hskip1\jsZw\fi
                            1467
                                                        ##1}}}
                            1468 \fi
                            1469 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1470 %<*book|report>
1471 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
                \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1473 \neq 1473 
1474 \def\ps@headings{%
                \let\@oddfoot\@empty
                \let\@evenfoot\@empty
1476
                \def\@evenhead{%
1477
1478
                      \if@mparswitch \hss \fi
                      \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
1479
1480
                                   \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
                      \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1481
                 \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
1482
1483
                                   {\cluster {\tt lse\leftmark\fi}\hfil\textbf{\tt thepage}}}\hss{\tt lse\leftmark\fi}\hfil\textbf{\tt thepage}}}\hss{\tt lse\leftmark\fi}\hss{\tt lse\leftmark\fi}}
                 \let\@mkboth\markboth
1484
                 \def\chaptermark##1{\markboth{%
                      \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1486
                            \if@mainmatter
1487
1488
                                  \if@omit@number\else
                                        \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
1489
                            \fi
1491
                      \fi
1492
1493
                      ##1}{}}%
                \def\sectionmark##1{\markright{%
1494
                      \ \colored{line} \c
                      ##1}}}%
1496
1497 %</book|report>
          最後は学会誌の場合です。
1498 %<*jspf>
1499 \def\ps@headings{%
                \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                 \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
                 \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
1502
                \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
1504 %</jspf>
```

\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するため, ここでの定義は非常に簡単です。

[2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。

```
1505 \def\ps@myheadings{%
1506
     \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
1507
     \def\@evenhead{%
        \if@mparswitch \hss \fi%
1508
        \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
1509
       \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1510
1511 \def\@oddhead{%
1512
        \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
1513 \let\@mkboth\@gobbletwo
1514 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
     \let\sectionmark\@gobble
1516 %<!book&!report> \let\subsectionmark\@gobble
1517 }
```

8 文書のマークアップ

8.1 表題

\title これらは \LaTeX 本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

```
\label{label} $$ \theta^{1518 \% \emorphism} $$ 1519 \% \emorphisms $$ 1519 \% \emorphisms $$ 1520 \% \emorphisms $$ 1520 \% \emorphisms $$ 1521 \% \emorphisms $$
```

\subtitle 副題を設定する。

\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
1522 \verb|\newcommand*{\jsSubtitle}[1]{\gdef\bxjs@subtitle{#1}}
```

1523 $\$ let\bxjs@subtitle\@undefined

\title にフックを入れる。

```
1524 \ensuremath{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
```

1525 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}

 $1526 \ensuremath{\mbox{\sc l}}\ensuremath{\mbox{\sc l}}\ensuremath{\m$

1527 \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax

1528 \ifx\subtitle\@undefined

1529 \global\let\subtitle\jsSubtitle

1530 \fi}

\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。

※独自の \subtitle が使われている場合は無効化しない。

1531 \def\bxjs@annihilate@subtitle{%

```
1532 \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi
```

1533 \global\let\jsSubtitle\relax}

1540 %</jspf>

\etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル、英語の著者名、キーワード、メールアドレスです。
\eauthor 1534 %<*jspf>
\keywords 1535 \newcommand*{\etitle}[1]{\gdef\@etitle{#1}}

1536 \newcommand*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}}

1537 \newcommand*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}}

1538 \newcommand*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}

1539 \newcommand*{\AuthorsEmail}[1]{\gdef\authors@mail{author's e-mail:\ #1}}

\plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにします。

```
1541 \def\plainifnotempty{%
     \ifx \@oddhead \@empty
        \ifx \@oddfoot \@empty
1543
        \else
1544
          \thispagestyle{plainfoot}%
1545
        \fi
1546
      \else
1547
1548
        \thispagestyle{plainhead}%
1549
      \fi}
```

\maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large、和文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。

[2016-11-16] 新設された nomag および nomag* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。

```
1550 %<*article|book|report|slide>
1551 \if@titlepage
      \newcommand{\maketitle}{%
1552
        \begin{titlepage}%
          \let\footnotesize\small
1554
1555
          \let\footnoterule\relax
          \let\footnote\thanks
1556
          \null\vfil
1557
          \if@slide
1558
             {\footnotesize \@date}%
1559
             \begin{center}
1560
1561
               \mbox{} \ \[1\jsZw]
               \large
1562
```

```
{\maybeblue\hrule height0\p0? depth2\p0?\relax}\par
1563
1564
                                         \jsc@smallskip
1565
                                         \@title
                                         \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1566
                                               \par\vskip\z@
1567
                                              {\small \bxjs@subtitle\par}
1568
                                         \fi
1569
                                         \jsc@smallskip
1570
                                         {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1571
1572
                                         {\small \@author}%
1573
                                   \end{center}
1574
                             \else
1575
                             \wedge 60\p0?
1576
1577
                             \begin{center}%
                                   {\LARGE \@title \par}%
1578
                                   \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1579
                                         \space{1mm} \spa
1580
1581
                                         {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                                   \fi
1582
1583
                                   \vskip 3em%
                                   {\large
1584
1585
                                         \lineskip .75em
                                         \begin{tabular}[t]{c}%
1586
                                               \@author
1587
                                         \end{tabular}\par}%
1588
                                   \vskip 1.5em
1589
1590
                                    {\large \@date \par}%
1591
                             \end{center}%
                             \fi
1592
                             \par
1593
1594
                             \@thanks\vfil\null
                       \end{titlepage}%
1595
1596
                       \setcounter{footnote}{0}%
                       \global\let\thanks\relax
1597
1598
                       \global\let\maketitle\relax
                       \global\let\@thanks\@empty
1599
                       \global\let\@author\@empty
1600
1601
                       \global\let\@date\@empty
                       \global\let\@title\@empty
1602
1603
                       \global\let\title\relax
1604
                       \global\let\author\relax
1605
                       \global\let\date\relax
                       \global\let\and\relax
1606
1607
                       \bxjs@annihilate@subtitle
1608
                }%
1609 \else
                 \newcommand{\maketitle}{\par
1610
1611
                       \begingroup
```

```
1613
                                                          \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
                              1614
                                                          \label{longdef} $$  \omega = 1_{\advance} 3\jsZw $$
                              1615
                                                                \parindent 1\jsZw\noindent
                                                                \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
                              1616
                                                          \if@twocolumn
                              1617
                                                               \ifnum \col@number=\@ne
                              1618
                              1619
                                                                     \@maketitle
                                                               \else
                              1620
                                                                    \twocolumn[\@maketitle]%
                              1621
                                                               \fi
                              1622
                                                          \else
                              1623
                              1624
                                                               \newpage
                                                               \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
                              1625
                              1626
                                                                \@maketitle
                              1627
                                                          \fi
                                                          \plainifnotempty
                              1628
                                                          \@thanks
                              1629
                              1630
                                                    \endgroup
                                                    \setcounter{footnote}{0}%
                              1631
                              1632
                                                    \global\let\thanks\relax
                                                    \global\let\maketitle\relax
                              1633
                              1634
                                                    \global\let\@thanks\@empty
                              1635
                                                    \global\let\@author\@empty
                                                    \global\let\@date\@empty
                              1636
                              1637
                                                    \global\let\@title\@empty
                                                    \global\let\title\relax
                              1638
                              1639
                                                    \global\let\author\relax
                               1640
                                                    \global\let\date\relax
                              1641
                                                    \global\let\and\relax
                              1642
                                                    \bxjs@annihilate@subtitle
                              1643
                                            }
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                              \def\@maketitle{%
                              1644
                              1645
                                                    \newpage\null
                                                    \vskip 2em
                              1646
                                                    \begin{center}%
                              1647
                              1648
                                                          \let\footnote\thanks
                                                          {\LARGE \@title \par}%
                              1649
                                                          \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                              1650
                              1651
                                                               \space{2.5cm} 
                                                               {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                              1652
                                                          \fi
                              1653
                              1654
                                                          \vskip 1.5em
                                                          {\large
                              1655
                                                                \lineskip .5em
                                                                \begin{tabular}[t]{c}%
                              1657
                                                                    \@author
                              1658
```

\renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%

1612

```
\end{tabular}\par}%
1659
1660
                       \vskip 1em
1661
                       {\large \@date}%
1662
                   \end{center}%
                   \par\vskip 1.5em
1663
1664 %<article|slide>
                                                        \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
1665
1666 \fi
1667 %</article|book|report|slide>
1668 %<*jspf>
1669 \newcommand{\maketitle}{\par
             \begingroup
1670
                   \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1671
                   \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
1672
1673
                   \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1674
                       \parindent 1\jsZw\noindent
                       1675
1676
                       \twocolumn[\@maketitle]%
1677
                   \plainifnotempty
                  \@thanks
1678
1679
              \endgroup
              \setcounter{footnote}{0}%
1680
1681
              \global\let\thanks\relax
1682
              \global\let\maketitle\relax
              \global\let\@thanks\@empty
1683
              \global\let\@author\@empty
1684
              \global\let\@date\@empty
1685
1686 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
              \global\let\title\relax
1688
              \global\let\author\relax
              \global\let\date\relax
1689
1690
              \global\let\and\relax
              \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
1691
                  \def\@makefntext{\advance\leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}%
                  \label{lem:condition} $$\footnotetext[0]{\titshape\authors@mail}%$
1693
1694
1695
              \global\let\authors@mail\@undefined}
1696 \def\@maketitle{%
              \newpage\null
              \vskip 6em % used to be 2em
1698
1699
              \begin{center}
1700
                  \let\footnote\thanks
1701
                  \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
1702
                  \lineskip .5em
1703
                  \ifx\@author\@undefined\else
                       \vskip 1em
1704
1705
                       \begin{tabular}[t]{c}%
                             \@author
1706
1707
                       \end{tabular}\par
```

```
\fi
1708
1709
        \ifx\@etitle\@undefined\else
1710
          \vskip 1em
          {\large \@etitle \par}%
1711
1712
        \ifx\@eauthor\@undefined\else
1713
          \vskip 1em
1714
1715
          \begin{tabular}[t]{c}%
            \@eauthor
1716
          \end{tabular}\par
1717
1718
        \fi
1719
       \vskip 1em
        \@date
1721 \end{center}
1722
     \vskip 1.5em
     \centerline{\box\@abstractbox}
     \ifx\@keywords\@undefined\else
1724
1725
        \vskip 1.5em
        \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \small\@keywords}}
1726
1727 \fi
1728
     \vskip 1.5em}
1729 %</jspf>
```

8.2 章・節

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして * と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} * [別見出し] **{**見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です (例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

前アキ この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

後アキ 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

* この * 印がないと,見出し番号を付け,見出し番号のカウンタに1を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は \@startsection の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが \baselineskip の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

```
1730 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
     \if@noskipsec \leavevmode \fi
1732
     \par
1733 % 見出し上の空きを \@tempskipa にセットする
1734 \@tempskipa #4\relax
1735 % \Qafterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
    \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
1737 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
     \ifdim \@tempskipa <\z@
1738
1739
       \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
1740
1741
     \if@nobreak
       \everypar{\everyparhook}% これは間違い
1742 %
1743
       \everypar{}%
1744
    \else
       \addpenalty\@secpenalty
1745
1746%次の行は削除
       \addvspace\@tempskipa
1747 %
1748% 次の \noindent まで追加
       \ifdim \@tempskipa >\z@
         \if@slide\else
1750
          \null
1751
1752
           \vspace*{-\baselineskip}%
1753
         \vskip\@tempskipa
1754
       \fi
1755
     \fi
1756
     \noindent
1757
1758% 追加終わり
1759
    \@ifstar
       1760
       1761
   \@sect と \@xsect は,前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように,多少変え
 てあります。\everyparhook も挿入しています。
1762 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{@sect$\#1$\#2$\#3$\#4$\#5$\#6$[$\#7]$\#8{\%}}
     \ifnum #2>\c@secnumdepth
1763
       \let\@svsec\@empty
1764
1765
     \else
       \refstepcounter{#1}%
1766
       \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1767
1768
1769 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
1770 \@tempskipa #5\relax
```

```
1771% 条件判断の順序を入れ換えました
1772
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1773
       \def\@svsechd{%
         #6{\hskip #3\relax
1774
         \@svsec #8}%
1775
         \csname #1mark\endcsname{#7}%
1776
         \addcontentsline{toc}{#1}{%
1777
1778
           \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
             \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1779
1780
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1781
1782
     \else
       \begingroup
1783
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
1784
1785
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1786
1787 %
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
           #8\@@par}%
1788
1789
       \endgroup
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
1790
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1792
           \protect\numberline{\csname the#1\endcsname}%
1793
1794
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1795
1796
     \fi
     \0xsect{#5}
1797
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1798 \def\0xsect#1{%
1799 % 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1801 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1802
       \@nobreakfalse
1803
       \global\@noskipsectrue
1804
       \everypar{%
1805
         \if@noskipsec
1806
1807
           \global\@noskipsecfalse
1808
          {\setbox\z@\lastbox}%
1809
           \clubpenalty\@M
           \begingroup \@svsechd \endgroup
1810
1811
           \unskip
           \@tempskipa #1\relax
1812
           \hskip -\@tempskipa
1813
```

```
1814
            \bxjs@ltj@inhibitglue
1815
1816
            \clubpenalty \@clubpenalty
            \everypar{\everyparhook}%
1817
          \fi\everyparhook}%
1818
1819
      \else
        \par \nobreak
1820
1821
        \vskip \@tempskipa
        \@afterheading
1822
1823
      \if@slide
1824
        {\tt \{vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi}
1825
         \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
1826
         \vskip\if@twocolumn 4\jsc@mpt\else 7\jsc@mpt\fi\relax}%
1827
1828
1829
      \par % 2000-12-18
      \ignorespaces}
1830
1831 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
1832
      \ifdim \@tempskipa<\z@
1833
1834
        \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
      \else
1835
1836
        \begingroup
          #4{%
1837
             \@hangfrom{\hskip #1}%
1838
              \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
1839
1840
        \endgroup
1841
      \fi
1842
      \c \xspace (#3)
```

上記の定義中の \bxjs@ltj@inhibitglue は LuaT_EX-ja で用いられるフック。 1843 \let\bxjs@ltj@inhibitglue\@empty

■柱関係の命令

\chaptermark \...mark の形の命令を初期化します(第7節参照)。\chaptermark 以外は IFTEX 本体で \sectionmark 定義済みです。

■カウンタの定義

```
\c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                                1850 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                                1851 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
            \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
            \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
       \c@subsection 1852 \newcounter{part}
 \c@subsubsection 1853 %<book|report>\newcounter{chapter} \ 1854 %<book|report>\newcounter{section}[chapter]
         \verb|\c@paragraph|_{1855} %<!book&!report>\\newcounter\{section\}|
   \c@subparagraph 1856 \newcounter{subsection}[section]
                                1857 \newcounter{subsubsection} [subsection]
                                1858 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                                1859 \newcounter{subparagraph}[paragraph]
                \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
                                       カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。
           \thechapter
           \thesection
                                                                                     1, 2, 3, ...
                                              \arabic{COUNTER}
     \thesubsection
                                                                                     i, ii, iii, ...
                                              \roman{COUNTER}
\thesubsubsection
                                                                                     I, II, III, ...
                                              \Roman{COUNTER}
       \theparagraph
                                                                                      a, b, c, ...
                                              \alph{COUNTER}
 \thesubparagraph
                                                                                      A, B, C, ...
                                              \Alph{COUNTER}
                                                                                    一, 二, 三, ....
                                              \kansuji{COUNTER}
                                       以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
                                1860 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
                                1861 %<!book&!report>% \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
                                1862 % ! report \ renewcommand {\ the section } {\ presection name \ Carabic \ c@section \ postsection name \ }
                                1863 \ensuremath{\lower1863 \ensuremath{\lo
                                1864 %<*book|report>
                                1865 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
                                1866 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
                                1867 \renewcommand{\thesubsection}{\thesection.\@arabic\c@subsection}
                                1868 %</book|report>
                                1869 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                                             \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
                                1871 \renewcommand{\theparagraph}{%
                                             \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
                                1873 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                                             \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
                                 \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
              \@chapapp
                                       \Ochappos の初期値は \postchaptername(章)です。
              \@chappos
                                       \appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。
                                      [2003-03-02] \@secapp は外しました。
                                1875 % <book | report > \newcommand { \Qchapapp} { \prechaptername}
```

■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。

\frontmatter

ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした後で \pagenumbering{...} でノンブルを 1 にリセットします。長い間 \frontmatter は openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように修正することで、問題を解消しました。実は、IATEX の標準クラスでは 1998 年に修正されていた問題です(コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/03/05 も参照)。

1877 %<*book|report>

1878 \newcommand\frontmatter{%

1879 \pltx@cleartooddpage

1880 \@mainmatterfalse

1881 \pagenumbering{roman}}

\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

1882 \newcommand\mainmatter{%

1883 \pltx@cleartooddpage

1884 \@mainmattertrue

1885 \pagenumbering{arabic}}

\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

1886 \newcommand\backmatter{\%}

1887 \if@openleft

1888 \cleardoublepage

1889 \else\if@openright

1890 \cleardoublepage

1891 **\else**

1892 \clearpage

1893 \fi\fi

1894 \@mainmatterfalse}

1895 %</book|report>

■部

\part 新しい部を始めます。

\secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

\secdef{星なし}{星あり}

星なし * のない形の定義です。

星あり * のある形の定義です。

\secdef は次のようにして使います。

```
\def\CMDA
                       [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義
          \def\CMDB
                       #1{....}
                                   % \chapter*{...} の定義
          まず book と report のクラス以外です。
      1896 %<*!book&!report>
      1897 \newcommand\part{%
           \if@noskipsec \leavevmode \fi
      1898
      1899
           \par
      1900
           \addvspace{4ex}%
           \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
      1901
           \secdef\@part\@spart}
      1903 %</!book&!report>
         book および report クラスの場合は、少し複雑です。
      1904 %<*book|report>
      1905 \newcommand\part{%
      1906
           \if@openleft
      1907
             \cleardoublepage
           \else\if@openright
      1908
             \cleardoublepage
      1909
      1910
           \else
             \clearpage
      1911
      1912
           \fi\fi
           \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
      1913
           \if@twocolumn
      1914
             \onecolumn
      1915
             \@restonecoltrue
      1916
      1917
           \else
             \@restonecolfalse
      1918
      1919
      1920
           \null\vfil
           \secdef\@part\@spart}
      1921
      1922 %</book|report>
\Opart 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
         book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
        ます。
      1923 %<*!book&!report>
      1924 \def\@part[#1]#2{%
           \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      1925
             \refstepcounter{part}%
      1926
      1927
             \addcontentsline{toc}{part}{%
               \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
      1928
      1929
             \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
      1930
      1931
           \markboth{}{}%
      1932
      1933
           {\parindent\z@
```

\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }

```
1934
              \raggedright
       1935
               \interlinepenalty \@M
       1936
               \normalfont
       1937
               \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
       1938
                \par\nobreak
       1939
               \fi
       1940
               \huge \headfont #2%
       1941
              \markboth{}{}\par}%
       1942
             \nobreak
       1943
             \vskip 3ex
       1944
             \@afterheading}
       1945
       1946 %</!book&!report>
          book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
       1947 %<*book|report>
       1948 \def\@part[#1]#2{%
            \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       1949
       1950
               \refstepcounter{part}%
       1951
               \addcontentsline{toc}{part}{%
                1952
       1953
            \else
              \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
       1954
       1955
             \markboth{}{}%
       1956
             {\centering
       1957
              \interlinepenalty \@M
       1958
       1959
              \normalfont
               \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
       1960
       1961
                \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
                \par\vskip20\p@?
       1962
       1963
               \fi
               \Huge \headfont #2\par}%
             \@endpart}
       1966 %</book|report>
\@spart 番号を付けない部です。
       1967 %<*!book&!report>
       1968 \def\@spart#1{{%
              \parindent \z@ \raggedright
       1969
       1970
              \interlinepenalty \@M
       1971
              \normalfont
               \huge \headfont #1\par}%
            \nobreak
       1973
       1974
             \vskip 3ex
             \@afterheading}
       1976 %</!book&!report>
       1977 %<*book|report>
       1978 \def\@spart#1{{%
```

```
1979 \centering
1980 \interlinepenalty \@M
1981 \normalfont
1982 \Huge \headfont #1\par}%
1983 \@endpart}
1984 %</book|report>
```

\@endpart \@part と **\@spart** の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加しま す。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは \LaTeX では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されています。

```
1985 %<*book|report>
1986 \def\@endpart{\vfil\newpage
      \if@twoside
1987
       \if@openleft %% added (2017/02/24)
1988
        \null\thispagestyle{empty}\newpage
1989
       \else\if@openright %% added (2016/12/13)
1990
       \null\thispagestyle{empty}\newpage
       fi\fi %% added (2016/12/13, 2017/02/24)
1992
1993
1994
      \if@restonecol
1995
        \twocolumn
      \fi}
1997 %</book|report>
```

■章

\chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。

```
1998 %<*book|report>
1999 \newcommand{\chapter}{%
      \if@openleft\cleardoublepage\else
2000
      \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
2001
      \verb|\plainifnotempty| % \vec{\pi} \colon \verb|\thispagestyle{plain}|
2002
2003
      \global\@topnum\z@
      \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
2005
      \secdef
        {\@omit@numberfalse\@chapter}%
2006
        {\@omit@numbertrue\@schapter}}
```

\@chapter 章見出しを出力します。**secnumdepth** が 0 以上かつ **\@mainmatter** が真のとき章番号を出力します。

```
2008 \def\@chapter[#1]#2{%

2009 \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne

2010 \if@mainmatter

2011 \refstepcounter{chapter}%
```

```
\typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                                                                    \addcontentsline{toc}{chapter}%
                                            2013
                                            2014
                                                                          {\protect\numberline
                                            2015 %
                                                                         {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
                                            2016
                                                                         #1}%
                                            2017
                                                                \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
                                            2018
                                            2019
                                                               \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
                                            2020
                                            2021
                                            2022
                                                           \chaptermark{#1}%
                                                           \addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                                            2023
                                                           \addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                                            2024
                                                          \if@twocolumn
                                            2025
                                            2026
                                                               \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                                            2027
                                                                \@makechapterhead{#2}%
                                            2028
                                                                \@afterheading
                                            2029
                                                          fi
                                            2030
  \@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                                            2031 \def\@makechapterhead#1{%
                                                           \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                                            2032
                                                          {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                                            2033
                                                               \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                                            2034
                                            2035
                                                                    \if@mainmatter
                                                                          \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                                            2036
                                            2037
                                                                          \par\nobreak
                                            2038
                                                                         \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                                                                    \fi
                                            2039
                                                                \fi
                                            2040
                                            2041
                                                               \interlinepenalty\@M
                                                                \Huge \headfont #1\par\nobreak
                                            2042
                                            2043
                                                                \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                   \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                                            2044 \ensuremath{\def\@schapter#1}%
                                                          \chaptermark{#1}%
                                            2045
                                            2046
                                                          \if@twocolumn
                                                               \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                                            2047
                                            2048
                                            2049
                                                               \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                                            2050
                                                          \fi}
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                                            2051 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$}\mbox{$\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mbox{$}\mb
                                                          \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                                                          {\parindent \z@ \raggedright
                                            2053
                                            2054
                                                               \normalfont
```

2012

```
\interlinepenalty\@M
            2055
            2056
                   \Huge \headfont #1\par\nobreak
            2057
                   \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
            2058 %</book|report>
              ■下位レベルの見出し
     \section 欧文版では \@startsection の第4引数を負にして最初の段落の字下げを禁止しています
              が、和文版では正にして字下げするようにしています。
               段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。
            2059 \if@twocolumn
            2060 \newcommand{\section}{%
            2061 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                   \verb|\color=| \{1\}{\z0}|
            2063 %<!kiyou>
                           \{0.6\Cvs\}\{0.4\Cvs\}\%
            2064 %<kiyou>
                          {\Cvs}{0.5\Cvs}%
            2065 %
                   {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
                   {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
            2067 \else
                \newcommand{\section}{%
            2068
                   \if@slide\clearpage\fi
            2069
                   \@startsection{section}{1}{\z@}%
            2070
                   {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
            2071
            2072
                   {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
            2073 %
                   {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
            2074
                   {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
            2075 \fi
  \subsection 同上です。
            2076 \if@twocolumn
                 \newcommand{\subsection}{\Qstartsection{subsection}{2}{\z0}%
                   {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else \z@ \fi}%
            2078
                   {\normalfont\normalsize\headfont}}
            2079
            2080 \else
            2081
                 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
            2082
                   {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
            2083
                   {\normalfont\large\headfont}}
            2084
            2085 \fi
\subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に
              対処しました (forum:1982)。
            2086 \if@twocolumn
            2087
                 {\z0}{\left(x_0\right)_{\columnwidth}} \ .4\cvs \le \z0 \fi}%
            2088
```

{\normalfont\normalsize\headfont}}

2089 { 2090 \else

```
2092 {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}%
2093 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else \z@ \fij%
2094 {\normalfont\normalsize\headfont}}
2095 \fi
```

\paragraph 見出しの後ろで改行されません。

[2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが、このマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これで、たとえば

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラスでは従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク (\blacksquare) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
2096 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
2097 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
2098 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
2099 \let\jsParagraphMark\@empty
\verb|long| edef \jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}| 
2102 \fi\fi
2103 \let\jsJaChar\@empty
2104 \if@twocolumn
    {\z@}{\if@slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
2106
            {\normalfont\normalsize\headfont}}
2107 %<jspf>
2108 %<!jspf>
             {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
2109 \else
    {0.5\Cvs \qplus.5\Cdp \qminus.2\Cdp}%
2111
      {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
2112
2113 %<jspf>
            {\normalfont\normalsize\headfont}}
2114 %<!jspf>
            {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
2115 \fi
```

\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。 2116 \if@twocolumn

```
% \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}% \z@}{\if@slide .4\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
```

2119 {\normalfont\normalsize\headfont}}

 $2120 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}$

```
2121 \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
2122 {\z@}{\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
2123 {\normalfont\normalsize\headfont}}
2124 \fi
```

8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが $\$ (k = i, ii, iii, iv)。 $\$ は $\$ は $\$ に設定します。

\leftmargini 二段組であるかないかに応じてそれぞれ 2em, 2.5em でしたが、ここでは全角幅の 2 倍にしました。

```
ました。
[2002-05-11] 3zw に変更しました。
```

[2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。

2125 \if@slide

2126 \setlength\leftmargini $\{1\jsZw\}$

2127 \else

2128 \if@twocolumn

2129 \setlength\leftmargini{2\jsZw}

2130 \else

2131 \setlength\leftmargini{3\jsZw}

2132 \fi

2133 **\fi**

2146 **\fi**

\leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること \leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。

```
\verb|\label{leftmarginiv}| 2134 \verb|\label{leftm
```

```
\label{eq:local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_
```

\labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分 \labelwidth に変えました。

```
2147 \setlength \labelsep \{0.5\jsZw\} % .5em 2148 \setlength \labelwidth{\leftmargini} 2149 \addtolength\labelwidth{-\labelsep}
```

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合, \parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ

縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

2150 \setlength\partopsep{\z@} % {2\p@ \@plus 1\p@ \@minus 1\p@}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。

```
\label{eq:condparpenalty} $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ -\end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ -\end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ -\end{argman}$ $$ \end{argman}$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ $$ \end{argman}$ \end{arg
```

\@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せるように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここでは簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてあります。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize、enumerate 環境でだけ最初と最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

[2004-09-27] \topsep のグルー $_{-0.1}^{+0.2}$ \baselineskip を思い切って外しました。

2154 \def\@listi{\leftmargin\leftmargini

2155 \parsep \z@

2156 \topsep 0.5\baselineskip

2157 \itemsep \z@ \relax}

2158 \let\@listI\@listi

念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。

2159 **\@listi**

\@listii 第 $2\sim6$ レベルのリスト環境のパラメータの設定です。

```
\@listiii 2160 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii
```

\Clistiv 2161 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep

2162 \topsep \z@

 $\verb|\clistv|_{2163} \quad \verb|\clistv|_{2163} \\$

\@listvi 2164 \itemsep\parsep}

 $2165 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc def}\mbox{\sc listif}\mbox{\sc leftmargin}\mbox{\sc listif}\mbox{\sc leftmargin}\mbox{\sc listif}\mbox{\sc leftmargin}\mbox{\sc leftma$

2166 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep

2167 \topsep \z@

2168 \parsep \z@

2169 \itemsep\parsep}

2170 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv

2171 \labelwidth\leftmarginiv

2172 \advance\labelwidth-\labelsep}

2173 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv

2174 \labelwidth\leftmarginv

2175 \advance\labelwidth-\labelsep}

2176 \def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi 2177 \labelwidth\leftmarginvi

2178 \advance\labelwidth-\labelsep}

 \blacksquare enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumii, enumiv を使います。n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは IATEX 本体(ltlists.dtx 参照) で定義済み \theenumii ですが,ここでは表し方を変えています。\@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれぞ

\theenumii ですが,ここでは表し方を変えています。\@arabic,\@alph,\@roman,\@Alph はそれぞ\theenumiii れ算用数字,小文字アルファベット,小文字ローマ数字,大文字アルファベットで番号を出\theenumiv 力する命令です。

2179 \renewcommand{\theenumi}{\@arabic\c@enumi}

2180 \renewcommand{\theenumii}{\Calph\cCenumii}

2181 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}

2182 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 \labelenumii きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に \labelenumiii 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiv

和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用いている。

※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

```
{\tt 2183 \def\bxjs@dust{\vrule\@width\z@\@height\z@\@depth\z@}}
```

2184 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%

2185 \bxjs@dust\jsInhibitGlue (\theenumii) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}

2186 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}

2187 \newcommand{\labelenumii}{\jsInJaParen{ (\theenumii) }}

2188 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}

2189 $\mbox{\lower.}$

\p@enumii \p@enumn は\ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書 \p@enumiii 式です。これも第 2 レベルは和文用かっこにしました。

\p@enumiv 2190 \renewcommand{\p@enumii}{\theenumi}

2191 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii) }

2192 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}

■itemize 環境

\labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。

\labelitemii 2193 \newcommand\labelitemi{\textbullet}

 $\verb|\labelitemiii|| 2194 \verb|\newcommand|| abelitemiii{ | normalfont|| bfseries | textendash||}$

2195 \newcommand\labelitemiii{\textasteriskcentered}

 $\verb|\labelitemiv|_{2196} \verb|\newcommand|| labelitemiv{\textperiodcentered}|$

■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

2197 \newenvironment{description}{%

2198 \list{}{%

2199 \labelwidth=\leftmargin

2200 \labelsep=1\jsZw

2201 \advance \labelwidth by -\labelsep

2202 \let \makelabel=\descriptionlabel\}\{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

 $2203 \verb|\newcommand*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont $\#1\hfil}|$

■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは, 独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが, quotation 環境の右マージンをゼロにしたので, list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。 つまり jsbook と同じに なる。
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境(「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

2204 %<*book|report>

2205 \newenvironment{chapterabstract}{\%}

2206 \begin{list}{}{%

2207 \listparindent=1\jsZw

2208 \itemindent=\listparindent

2209 \rightmargin=\z@

 $\label{list} $$ 2210 \qquad \left[\right] {\left[\right]} {\left[\right]} $$ item[]} $$$

2211 %</book|report>

"普通の" abstract 環境の定義。

2212 %*article|report|slide>

2213 \newbox\@abstractbox

2214 \if@titlepage

2215 \newenvironment{abstract}{%

2216 \titlepage

2217 \null\vfil

```
\@beginparpenalty\@lowpenalty
2218
2219
       \begin{center}%
2220
         \headfont \abstractname
2221
         \@endparpenalty\@M
       \end{center}%
 BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。
2223
       \par}%
     {\par\vfil\null\endtitlepage}
2224
2225 \else
2226
     \newenvironment{abstract}{%
2227
       \if@twocolumn
         \ifx\maketitle\relax
2228
           \section*{\abstractname}%
2229
2230
         \else
           \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2231
2232
           \begin{minipage}[b]{\textwidth}
             \small\parindent1\jsZw
2233
2234
             \begin{center}%
               2235
             \end{center}%
2236
             \left\{ \right\} 
2237
               \listparindent\parindent
2238
               \itemindent \listparindent
2239
2240
               \rightmargin \leftmargin}%
             \item\relax
2241
         \fi
2242
2243
       \else
         \small
2244
2245
         \begin{center}%
           2246
         \end{center}%
2247
2248
         \left\{ \right\} 
           \listparindent\parindent
2249
           \itemindent \listparindent
2250
           \rightmargin \leftmargin}%
2251
2252
         \item\relax
2253
       \fi}{\if@twocolumn
         \ifx\maketitle\relax
2254
2255
2256
           \endlist\end{minipage}\egroup
2257
         \fi
2258
       \else
         \endlist
2259
       \fi}
2260
2261 \fi
2262 %</article|report|slide>
2263 %<*jspf>
2264 \newbox\@abstractbox
```

```
2265 \newenvironment{abstract}{%
      \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2266
      \begin{minipage}[b]{157\jsc@mmm}{\sffamily Abstract}\par
2268
       \if@english \parindent6\jsc@mmm \else \parindent1\jsZw \fi}%
2269
     {\end{minipage}\egroup}
2270
2271 %</jspf>
   bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
 等価にする。
2272 %<*book|report>
2273 \ifbxjs@force@chapterabstract
    \let\abstract\chapterabstract
2275
     \let\endabstract\endchapterabstract
2276 \fi
2277 %</book|report>
```

■キーワード

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

```
2278 %<*jspf>
2279 %\newbox\@keywordsbox
2280 %\newenvironment{keywords}{%
2281 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
2282 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
2283 % \small\parindent0\jsZw}%
2284 % {\end{minipage}\egroup}
2285 %</jspf>
```

■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

```
2286 \newenvironment{verse}{%
     \let \\=\@centercr
2287
     \left\{ \right\} 
2288
        \itemsep \z@
2289
        \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
2290
2291
        \listparindent\itemindent
2292
        \rightmargin \z0
        \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
2293
     \item\relax}{\endlist}
```

■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を $1.5 \mathrm{em}$ から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

```
2295 \newenvironment{quotation}{%
2296 \list{}{%
2297 \listparindent\parindent
2298 \itemindent\listparindent
2299 \rightmargin \z@}%
2300 \item\relax}{\endlist}
```

■quote 環境

quote quote 環境は,段落がインデントされないことを除き, quotation 環境と同じです。 2301 \newenvironment{quote}%

2302 {\list{}{\rightmargin\z@}\item\relax}{\endlist}

■定理など 1tthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

```
\newtheorem{definition}{定義}
\newtheorem{axiom}{公理}
\newtheorem{theorem}{定理}
```

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1 zw にし、括弧を全角にしました。

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

```
2307 \newenvironment{titlepage}{%
2308 %<book>
               \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24
2309
        \if@twocolumn
2310
          \@restonecoltrue\onecolumn
        \else
2311
          \@restonecolfalse\newpage
2312
2313
2314
        \thispagestyle{empty}%
        \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
2316 }%
```

```
{\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
2317
2318
```

\if@twoside\else

2319 \setcounter{page}\@ne

\fi} 2320

■付録

\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

2321 %<*!book&!report>

 $2322 \mbox{ newcommand{\appendix}{\par}}$

\setcounter{section}{0}% 2323

2324 \setcounter{subsection}{0}%

\gdef\presectionname{\appendixname}% 2325

\gdef\postsectionname{}% 2326

2327 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]

\gdef\thesection{\presectionname\@Alph\c@section\postsectionname}% 2328

\gdef\thesubsection{\@Alph\c@section.\@arabic\c@subsection}}

2330 %</!book&!report>

2331 %<*book|report>

2332 \newcommand{\appendix}{\par

2333 \setcounter{chapter}{0}%

2334 \setcounter{section}{0}%

2335 \gdef\@chapapp{\appendixname}%

\gdef\@chappos{}% 2336

2337 \gdef\thechapter{\@Alph\c@chapter}}

2338 %</book|report>

8.4 パラメータの設定

■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2339 \setlength\arraycolsep{5\p0?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 $2340 \verb|\setlength\tabcolsep{6\p@?}|$

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2341 \setlength\arrayrulewidth{.4\p0}

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 $2342 \text{length}\doublerulesep{2\\p@}$

■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2343 \setlength \tabbingsep{\labelsep}$

■minipage 環境

| Compfootins minipage 環境の脚注の \skip\Compfootins は通常のページの \skip\footins と同じ働きをします

 $2344 \skip\0mpfootins = \skip\footins$

■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2345 \setlength\fboxsep{3\p0?}

2346 \setlength\fboxrule{.4\p0}

■equation と eqnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2347 %<!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}

2348 %<*book|report>

2349 \@addtoreset{equation}{chapter}

 $2350 \mbox{ \lower}$

2351 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2352 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2353 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue(\theequation)\jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも可能です。

2354 % \def\@eqnnum{(\theequation)}

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2355 % \def\tagform@#1{\maketag0@00{ (\ignorespaces#1\unskip\0@italiccorr) }}

8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

 $\footnote{oftype@TYPE}$ フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...)でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$ キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$ は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$ はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

■figure 環境

```
\c@figure 図番号のカウンタです。
   \thefigure 図番号を出力するコマンドです。
             2356 %<*!book&!report>
             2357 \newcounter{figure}
             2358 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}
             2359 %</!book&!report>
             2360 %<*book|report>
             2361 \newcounter{figure}[chapter]
             2362 \renewcommand \thefigure
                       {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}
             2364 %</book|report>
  \fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが, ここでは外し
\ftype@figure ました。
  \ext@figure 2365 \def\fps@figure{tbp}
\label{lem:condition} $$ \int_{2366 \left(\frac{1}{\text{ftype@figure}\{1\}}\right)^2} 2367 \det \text{condition} $$
             2368 \def\fnum@figure{\figurename\nobreak\thefigure}
       figure *形式は段抜きのフロートです。
```

figure * 2369 \newenvironment{figure}%

2370 {\@float{figure}}%

2371 {\end@float}

2372 \newenvironment{figure*}%

2373 {\@dblfloat{figure}}%

2374 {\end@dblfloat}

■table 環境

\c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が \thetable \thechapter{}・になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。

```
2375 %<*!book&!report>
```

2376 \newcounter{table}

2377 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}

2378 %</!book&!report>

2379 %<*book|report>

2380 \newcounter{table}[chapter]

2381 renewcommand thetable

2382 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}

2383 %</book|report>

```
\fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外しま
\ftype@table した。
```

 $\verb|\ext@table| 2384 \\ def\fps@table{tbp}|$

\fnum@table 2385 \def\ftype@table{2}

2386 \def\ext@table{lot}

2387 \def\fnum@table{\tablename\nobreak\thetable}

table * は段抜きのフロートです。

table * 2388 \newenvironment{table}%

2389 {\@float{table}}%

2390 {\end@float}

2391 \newenvironment{table*}%

{\@dblfloat{table}}% 2392

{\end@dblfloat} 2393

8.6 キャプション

\@makecaption \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第2引数はテキストです。

それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が 0 になっ \abovecaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしま \belowcaptionskip うのを直しました。

2394 \newlength\abovecaptionskip

2395 \newlength\belowcaptionskip

2396 \setlength\abovecaptionskip{5\p@?} % 元: 10\p@

2397 \setlength\belowcaptionskip{5\p0?} % $\vec{\pi}$: 0\p0

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャ プションの幅を2cm狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

2398 %<*!jspf>

2399 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small

2400 % \advance\leftskip 10\jsc@mmm

2401 % \advance\rightskip 10\jsc@mmm

2402 % \vskip\abovecaptionskip

2403 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%

\ifdim \wd\@tempboxa >\hsize 2404 %

2405 % $#1\hskip1\jsZw\relax #2\par$

2406 % \else

2407 % \global \@minipagefalse

2408 % \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%

2409 % \fi

2410 % \vskip\belowcaptionskip}}

2412 \advance\leftskip .0628\linewidth

```
\advance\rightskip .0628\linewidth
2413
2414
     \vskip\abovecaptionskip
2415
     \sbox\@tempboxa{#1\zwspace#2}%
     \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi</pre>
2416
     #1\zwspace#2\par
2417
     \vskip\belowcaptionskip}}
2418
2419 %</!jspf>
2420 %<*jspf>
2421 \long\def\@makecaption#1#2{%
     \vskip\abovecaptionskip
     \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
2424
     \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
       {\small\sffamily
2425
          \left\{ 1\right\} 
2426
2427
            \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2428
            \itemsep
                        \z0
            \itemindent \z@
2429
2430
            \labelsep
                        \z0
2431
            \labelwidth 11\jsc@mmm
            \listparindent\z@
2432
2433
            \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
     \else
2434
2435
        \global \@minipagefalse
        2436
2437
     \vskip\belowcaptionskip}
2439 %</jspf>
```

9 フォントコマンド

ここでは IATEX 2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text...と \math...を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

\if@jsc@warnoldfontcmd
f@jsc@warnoldfontcmdexception

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態を表す。

2440 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd

 $2441 \ensuremath{\mbox{\sc 0}}$ warnoldfontcmdtrue

```
\jsc@DeclareOldFontCommand
                                                                  2444 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
                                                                                 \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
                                                                                 \DeclareOldFontCommand{#1}{%
                                                                  2446
                                                                  2447
                                                                                      \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
                                                                  2448
                                                                                      \bxjs@oldfontcmd{#1}#3%
                                                                  2449
                                                                                }%
                                                                  2450
                                                                  2451 }
                                                                  2452 \DeclareRobustCommand*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{\line 2452 \declareRobustCommand}
                                                                                \ClassInfo\bxjs@clsname
                                                                  2453
                                                                  2454
                                                                                    {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
                                                                  2455
                                                                                      The first occurrence is}%
                                                                  2456 }
                                                                       "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。
            \allowoldfontcommands
                                                                      "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
     \disallowoldfontcommands
                                                                  2457 \mbox{ } \mbox
                                                                               \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                                                                  2459 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                                                                                \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
                                                                       ※ 1.x 版では Warning ではなく Info に留めておく。
                                                                  2461 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
                                                                  2462 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
                                                                                 \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
                                                                  2464 \ensuremath{\mbox \mbox{def}\mbox{bxjs@oldfontcmd@a#1#2}}\
                                                                                \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
                                                                  2465
                                                                  2466
                                                                                      \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
                                                                                      \int x#1\relax
                                                                  2467
                                                                                           \left| \frac{1}{t} \right|
                                                                  2468
                                                                                           \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
                                                                  2469
                                                                                      \fi
                                                                  2470
                                                                                 \fi}
                                                                  2472 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
                                                                                 \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                                                                  2474
                                                                  2475
                                                                                 \let\@tempa\@empty
                                                                  2476
                                                                                 \def\do##1{%
                                                                  2477
                                                                                       \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
                                                                  2478
                                                                                           \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
                                                                                 \bxjs@oldfontcmd@list
                                                                  2479
                                                                                 \ifx\@tempa\@empty\else
```

2480

 $2442 \verb|\newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception|$ 2443 \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse

```
2481
                                                        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                   2482
                                                            {Some old font commands were used in text\MessageBreak
                                                                 (see the log file for detail)}%
                   2483
                                                        \ClassInfo\bxjs@clsname
                   2484
                   2485
                                                            {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
                   2486
                                                                \space\@tempa\MessageBreak
                                                                You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
                   2487
                   2488
                                                                new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
                                                               new, combinable font commands. The
                   2489
                   2490
                                                               class provides\MessageBreak
                   2491
                                                                the old font commands
                   2492
                                                                only for compatibility%
                                                                \@gobble}%
                   2493
                                             fi
                   2494
                            単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場
                            合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される
                           ため捕捉できない。これに対処するため、\end{document} 中に実行される \clearpage の
                          処理の直後に \bxjs....final が呼ばれるようにする。
                   2495 \def\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%
                                              \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}
                   2497 \AtEndDocument{\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}
     \mc フォントファミリを変更します。
     \gt 2498 \jsc@DeclareOldFontCommand{\mc}{\normalfont\mcfamily}{\mathmc}
     \label{lem:command} $$ \^{2499 \clareOldFontCommand{\gt}_{normalfont\gtfamily}_{normal} $$
                    2500 \jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}
     \label{lem:sf2501} $$ \sum_{2501 \leq 2501} \c \Command{\sf}_{normalfont\sffamily}{\mathbf{hathsf}} $$
    \label{lem:local_command} $$ \tt2502 \jsc@DeclareOldFontCommand{\tt}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamily}_{\normalfont\ttfamil
    \bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries
                            です。
                   2503 \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox{\mbox{$\backslash$}}} 
    \it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま
     \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape
     \sc です。
                   2504 \jsc@DeclareOldFontCommand{\it}{\normalfont\itshape}{\mbox{\tt mathit}}
                   2505 \ \texttt{\local{local}} \\ \texttt{\local} \\ \texttt{
                   2506 \jc@DeclareOldFontCommand \{\sc\} \{\normalfont\scshape\} \{\cline{Command Sc}\} \} \label{locality}
\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。
\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\box{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\m
```

 $2508 \end{area} $$ \end{area} \end{area} $$

10 相互参照

10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合、上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。 table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので, あらかじめ \lochapter, \location, \location などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \cdottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\@pnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\Otocrmarg 右マージンです。\Otocrmarg \geq \Opnumwidth とします。

\@dotsep 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが、ここでは一つずつ減らしています。

2509 $\mbox{newcommand}\mbox{Qpnumwidth}\{1.55\mbox{em}\}$

2510 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2511 \newcommand\@dotsep{4.5}

2512 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2513 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1 }

■目次

```
\tableofcontents 目次を生成します。
\jsc@tocl@width [2013-12-30]\prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)
                2514 \newdimen\jsc@tocl@width
                2515 \mbox{ }\mbox{\command{\tableof} contents}{\%}
                2516 %<*book|report>
                2517
                      \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}%
                2518
                      \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                      \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima \setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
                2519
                2520
                      \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
                      \if@twocolumn
                2521
                        \@restonecoltrue\onecolumn
                2522
                     \else
                2523
                2524
                        \@restonecolfalse
                2525
                      \chapter*{\contentsname}%
                2526
                      \@mkboth{\contentsname}{}%
                2527
                2528 %</book|report>
                2529 %<*!book&!report>
                      \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
                2530
                2531
                      \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
                      \ifdim\jsc@tocl@width\\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
                2532
                2533
                      \ifdim\jsc@tocl@width<2\jsZw \divide\jsc@tocl@width by 2 \advance\jsc@tocl@width 1\jsZw\fi
                      \section*{\contentsname}%
                2535 \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
                2536 %</!book&!report>
                2537 \@starttoc{toc}%
                2538 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                2539 }
         \1@part 部の目次です。
                2540 \newcommand*{\l@part}[2]{%
                     \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
                2542 %<!book&!report>
                                         \addpenalty\@secpenalty
                2543 %<book|report>
                                      \addpenalty{-\@highpenalty}%
                2544
                        \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
                2545
                        \begingroup
                2546
                          \parindent \z@
                          \@pnumwidth should be \@tocrmarg
                2547 %
                          \rightskip \@pnumwidth
                2548 %
                2549
                          \rightskip \@tocrmarg
                2550
                          \parfillskip -\rightskip
                2551
                          {\leavevmode
                            \large \headfont
                2552
                2553
                            \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
                            #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
                2554
                          \nobreak
                2556 % < book | report >
                                       \global\@nobreaktrue
```

\everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%

2557 % < book | report >

```
2558
                 \endgroup
          2559
                \fi}
\lambda l@chapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
          2560 %<*book|report>
          2561 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
          2562
                \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
          2563
                  \addpenalty{-\@highpenalty}%
                  \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
          2564
          2565 %
                  \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
          2566
                 \begingroup
                   \parindent\z@
          2567
                   \rightskip\@pnumwidth
          2568 %
          2569
                   \rightskip\@tocrmarg
          2570
                   \parfillskip-\rightskip
          2571
                   \leavevmode\headfont
          2572 %
                   \% \if@english\setlength\@lnumwidth{5.5em}\else\setlength\@lnumwidth{4.683\jsZw}\fi
          2573
                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2.683\jsZw
          2574
                   \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                   #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
          2575
          2576
                   \penalty\@highpenalty
                  \endgroup
          2577
          2578
                \fi}
          2579 %</book|report>
\l0section 節の目次です。
          2580 %<*!book&!report>
          2581 \newcommand*{\l@section}[2]{%
                \ifnum \c@tocdepth >\z@
          2582
                  \addpenalty{\@secpenalty}%
          2583
          2584
                  \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
          2585
                  \begingroup
          2586
                   \parindent\z@
          2587 %
                   \rightskip\@pnumwidth
                   \rightskip\@tocrmarg
          2588
                   \parfillskip-\rightskip
          2589
                   \leavevmode\headfont
          2590
                   % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
          2591 %
          2592
                   \setlength\@lnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth 2\jsZw
                   \verb|\advance| leftskip| @lnumwidth \hskip-\leftskip|
          2593
          2594
                   1\ to 0\ to 0\
          2595
                  \endgroup
          2596
               \fi}
          2597 %</!book&!report>
             インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
```

 $2598 \% \verb|cbook|| report> \% \texttt{\l@section}{\localine{1}{1}insZw}{3.683}isZw}|$

```
[2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                         さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
                          しれません。
\1@subsubsection
                             [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
     \1@paragraph
 \verb|\lower| 1@subparagraph| 2599 %<*!book&!report>|
                       2600 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                             {\dotedtocline{2}{1.5em}{2.3em}}
                       2601 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                       2602 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                             {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                       2603 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                       2604 %
                       2605 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                            {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
                       2607 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                             {\@dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
                       2608 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
                       2609 %
                       2610 \newcommand*{\l@subsection}{%
                       2611
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                       2612
                                            \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3\jsZw}}
                       2613 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
                       2614
                       2615
                                            \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
                       2616 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                       2617
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
                                            \cline{4}{\cline{5\jsZw}}
                       2618
                       2619 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
                       2620
                       2621
                                            \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
                       2622 %</!book&!report>
                       2623 %<*book|report>
                       2624 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                            {\cline{2}{3.8em}{3.2em}}
                       2625 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
                       2626 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                             {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                       2627 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                       2628 \newcommand*{\l@section}{%
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                       2629
                                            \cline{1}{\cline{3.683\jsZw}}
                       2630
                       2631 \newcommand*{\l@subsection}{%
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                       2632
                                            \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3.5\jsZw}}
                       2633
                       2634 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                                            \cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{4.5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}{\cline{5}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}
                       2636
                       2637 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                       2638
                                            \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
                       2639
                                            \cline{4}{\cline{4}{5.5\jsZw}}
```

\@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw

2640 \newcommand*{\l@subparagraph}{%

2641

```
2643 %</book|report>
        \numberline 欧文版 LATEX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
        \@lnumwidth すが,アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
                                   に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                                    入れておきました。
                                2644 \newdimen\0lnumwidth
                                2645 \end{area} $$ \end{area
\@dottedtocline IATEX 本体(ltsect.dtx 参照)での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
                                   変えています。
                                2646 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                            \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                            {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                                \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                2649
                                2650
                                              \interlinepenalty\@M
                                2651
                                               \leavevmode
                                               \@lnumwidth #3\relax
                                2652
                                              \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                2653
                                                 {#4}\nobreak
                                2654
                                                 \leaders\hbox{$\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep
                                2655
                                                       mu$}\hfill \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                2657
                                                            \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                                    ■図目次と表目次
 \listoffigures 図目次を出力します。
                                2658 \newcommand{\listoffigures}{%
                                2659 %<*book|report>
                                          \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                2661
                                           \else\@restonecolfalse\fi
                                2662 \chapter*{\listfigurename}%
                                2663 \@mkboth{\listfigurename}{}%
                                2664 %</book|report>
                                2665 %<*!book&!report>
                                           \section*{\listfigurename}%
                                            \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                2668 %</!book&!report>
                                2669 \@starttoc{lof}%
                                2670 % book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                2671 }
            \l@figure 図目次の項目を出力します。
                                2672 \end{thm} $\{\0 + 1\}_{1 \le Zw}_{3.683 \le Zw} \}
    \listoftables 表目次を出力します。
                                2673 \newcommand{\listoftables}{%
```

2642

```
2674 %<*book|report>
        2675
              \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
        2676
              \else\@restonecolfalse\fi
              \chapter*{\listtablename}%
        2677
              \@mkboth{\listtablename}{}%
        2679 %</book|report>
        2680 %<*!book&!report>
        2681 \section*{\listtablename}%
        2682 \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
        2683 %</!book&!report>
        2684 \@starttoc{lot}%
        2685 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
        2686 }
\lotable 表目次は図目次と同じです。
```

10.2 参考文献

2687 \let\l@table\l@figure

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

2688 \newdimen\bibindent

 $2689 \text{length}\$

thebibliography 参考文献リストを出力します。

[2016-07-16] L Δ TeX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を,文献スタイル (.bst) ではよく \bf がいまだに用いられることが多いため,thebibliography 環境内では例外的 に出さないようにしました。

```
2690 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
                    \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
2691
2692
                     \global\let\presectionname\relax
2693 \global\let\postsectionname\relax
2694 %<article|slide> \section*{\refname}\@mkboth{\refname}{\refname} % article|slide> \section * (\refname) \frac{1}{\refname} \frac{1}{\refname
2695 %<*kiyou>
2696
                 \vspace{1.5\baselineskip}
                     \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}\%
                    \vspace{0.5\baselineskip}
2698
2699 %</kiyou>
2700 % <book | report > \chapter * {\bibname} \@mkboth {\bibname} {}%
\list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
2702
                                           {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
2703
                                              \leftmargin\labelwidth
2704
2705
                                              \advance\leftmargin\labelsep
                                              \@openbib@code
2706
2707
                                              \usecounter{enumiv}%
2708
                                              \let\p@enumiv\@empty
                                              \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
2709
```

```
2710 %<kiyou>
                        \small
            2711
                  \sloppy
            2712
                  \clubpenalty4000
                  \@clubpenalty\clubpenalty
            2713
            2714
                 \widowpenalty4000%
                 \sfcode`\.\@m}
            2715
            2716 {\def\@noitemerr
            2717
                  {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
                  \endlist}
            2718
    \newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。
            2719 \end{\newblock} {\hskip .11em\Qplus.33em\Qminus.07em}
\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによっ
             て変更されます。
            2720 \let\@openbib@code\@empty
   \@biblabel \bibitem[...] のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角 [] を全角 [] に変え,余
             分なスペースが入らないように \jsInhibitGlue ではさみました。とりあえずコメントア
             ウトしておきますので,必要に応じて生かしてください。
            2721 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}
       \cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが、コンマとかっこを和文
      \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので,必
      \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取ってい
             ますので,オリジナル同様, Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。
            2722 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
            2723 % \let\@citea\@empty
            2724 \% \end{0} \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
            2725 %
                    {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
            2726 %
                     \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
                     \if@filesw\immediate\write\@auxout{\string\citation{\@citeb}}\fi
            2727 %
                     \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
            2728 %
            2729 %
                       \G@refundefinedtrue
            2730 %
                       \@latex@warning
                        {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
            2731 %
                       {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}}{#1}}
            2732 %
            2733 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}
               引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に
             \unskip を付けて先行のスペース(~も)を帳消しにしています。
            2734 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
                  \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
            2736 % \def\@cite#1#2{\hat{\n}}\hbox{\scriptsize{#1\if@tempswa}
```

2737 % , \jsInhibitGlue\ #2\fi}) }}\$}

10.3 索引

theindex $2\sim3$ 段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

```
2738 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境
2739
        \if@twocolumn
2740
          \onecolumn\@restonecolfalse
2741
        \else
2742
          \clearpage\@restonecoltrue
        \fi
2743
2744
        \columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw
2745
        \ifx\multicols\@undefined
2746 % <book | report >
                         \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
2747 %<book|report>
                         \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2748 %<!book&!report>
                           \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2749 %<!book&!report>
                           \twocolumn[\section*{\indexname}]%
2750
        \else
2751
          \ifdim\textwidth<\fullwidth
2752
            \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
2753
            \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
2754
            \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
2755 % < book | report >
                           \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2756 %<book|report>
2757 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}\%
2758 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
2759
          \else
2760 %<book|report>
                           \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
2761 %<book|report>
                           \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
2762 %<!book&!report>
                             \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
2763 %<!book&!report>
                             \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
2764
          \fi
        \fi
2765
2766 %<book|report>
                       \@mkboth{\indexname}{}%
2767 %<!book&!report>
                         \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
        \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
2768
        \parindent\z@
2769
2770
        \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
2771
        \let\item\@idxitem
        \raggedright
2772
        \footnotesize\narrowbaselines
2773
2774
2775
        \ifx\multicols\@undefined
2776
          \if@restonecol\onecolumn\fi
2777
        \else
          \end{multicols}
2778
2779
        \fi
        \clearpage
2780
```

2781 }

\@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。

\subitem 2782 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt

\subsubitem 2783 \newcommand{\subitem}{\@idxitem \hspace*{2\jsZw}} % $\overrightarrow{\pi}$ 20pt 2784 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % $\overrightarrow{\pi}$ 30pt

\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。

\seename 索引の\see,\seealsoコマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also \alsoname という英語ですが,ここではとりあえず両方とも「 \rightarrow 」に変えました。 \Rightarrow (\$\Rightarrow\$) などでもいいでしょう。

2786 \newcommand\seename{\if@english see\else \rightarrow \fi} 2787 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else \rightarrow \fi}

10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため、 \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pIATEX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わりに \jsInhibitGlue を使う。

2788 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined

2789 \let\footnotes@ve=\footnote

2790 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}

2791 \let\footnotemarks@ve=\footnotemark

2792 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}

2793 \fi

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 * を付けています。「注 1」の形式にするには \textasteriskcentered を 注\kernO.1em にしてください。\@xfootnotenextと合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pT_{EX} では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐため、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました (Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pIFTEX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pIFTEX の日付が 2016/04/17 より新しい場合は,このパッチが不要なのであてません。

pTFX 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは*印も脚注番号も付きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しました。

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってしまいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので、気になる場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287)。

2794 \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@\leavevmode\lower.5ex\hbox{*}\@arabic\c@footnote\fi} 「注 1」の形式にするには次のようにしてください。

2795 % \def\thefootnote\\ifnum\c@footnote\\z@\\ifnum\c@footnote\fi}

\footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。

2796 \renewcommand{\footnoterule}{%

2797 \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@

2798 \hrule width .4\columnwidth

2799 \kern 2.6\p@?}

\c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。

2800 %<book|report>\@addtoreset{footnote}{chapter}

\@footnotetext 脚注で **\verb** が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, *T_EX and TUG NEWS*, Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)

[2016-08-25] コミュニティ版 pLFTEX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。

[2016-09-08] コミュニティ版 pLAT_FX のバグ修正に追随しました。

[2016-11-29] 古い pIAT_FX で使用された場合を考慮してコードを改良。

2801 \long\def\@footnotetext{%

2802 \insert\footins\bgroup

2803 \normalfont\footnotesize

2804 \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty

2805 \splittopskip\footnotesep

2806 \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM

 ${\tt 2807} \qquad {\tt \hsize} {\tt \columnwidth} \ {\tt \columnwidth}$

2808 \protected@edef\@currentlabel{%

2809 \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark

2810 }%

2811 \color@begingroup

2812 \@makefntext{%

2814 \futurelet\next\fo@t}

2815 \def\fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\next \let\next\f@@t

2816 \else \let\next\f@t\fi \next}

2817 \def\f@@t{\bgroup\aftergroup\@foot\let\next}

 $2818 \texttt{\def\f@t#1{#1\@foot}}$

```
2819 \def\@foot{\@finalstrut\strutbox\color@endgroup\egroup
2820 \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
2821 \ifhmode\null\fi
2822 \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
2823 \penalty\pltx@foot@penalty
2824 \pltx@foot@penalty\z@
2825 \fi
2826 \fi}
```

\@makefntext 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

```
2827 \newcommand\@makefntext[1]{%
2828 \advance\leftskip 3\jsZw
2829 \parindent 1\jsZw
2830 \noindent
2831 \llap{\@makefnmark\hskip0.3\jsZw}#1}
```

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext [0] {...} とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
2832 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
2833 %
       \begingroup
2834 %
           2835 %
             \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%
2836 %
2837 %
          \else
2838 %
             \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%
2839 %
           \fi
2840 %
       \endgroup
2841 %
        \@footnotetext}
```

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

2842 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

> $2843 \verb|\def|| everyparhook{\jsInhibitGlueAtParTop}|$ 2844 \AtBeginDocument{\everypar{\everyparhook}}

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているも のすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で \@tempa を使っていたのがよくなかったので、プレフィッ クスを付けて \jsc@tempa にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」で ある必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので,専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

\Cinhibitglue JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装。(これは (u)pTFX 専用である。)

```
2845 \def\@inhibitglue{%
2846 \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}
2847 \begingroup
2848 \let\GDEF=\gdef
2849 \text{CATCODE}=\text{catcode}
2850 \let\ENDGROUP=\endgroup
2851 \CATCODE`k=12
2852 \CATCODE`a=12
2853 \CATCODE n=12
2854 \CATCODE`j=12
2855 \CATCODE`i=12
2856 \CATCODE`c=12
2857 \CATCODE h=12
2858 \CATCODE`r=12
2859 \CATCODE`t=12
2860 \CATCODE`e=12
2861 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
2862 \ENDGROUP
2863 \def\@@inhibitglue{%
     \expandafter\expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@to
2865 \expandafter\def\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter#\expandafter1\KANJI@CHARACTER#2#3\jsc
     \def\jsc@ig@temp{#1}%
2866
     \ifx\jsc@ig@temp\@empty
2867
2868
        2869
          \inhibitglue
       \fi
2870
```

\fi}

2871

これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され ていました。

```
まず,環境の直後の段落です。
           [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
     を追加しました。
2872 \def\@doendpe{\%}
                 \@endpetrue
2873
2874
                 \def\par{%
                       \label{lem:clubpenalty} $$ \operatorname{\clubpenalty}\everypar{\everyparhook}\par\end{\clubpenalty} $$ \everyparhook} $$ \everyparhook  $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook  $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook  $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook  $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ \everyparhook  $$ 
2875
                 \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\@endpefalse\everyparhook}}
2876
           [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
2877 \def\@setminipage{%
                 \@minipagetrue
                 \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
2879
2880 }
           \item 命令の直後です。
\if@noparitem
2882
2883
                       \@donoparitem
2884
                 \else
2885
                       \if@inlabel
                             \indent \par
2886
                       \fi
2887
                       \ifhmode
2888
                             \unskip\unskip \par
2889
                       \fi
2890
                       \if@newlist
2891
                             \if@nobreak
2892
2893
                                  \@nbitem
2894
                             \else
                                   \addpenalty\@beginparpenalty
2895
2896
                                  \addvspace\@topsep
2897
                                  \addvspace{-\parskip}%
2898
                             \fi
                       \else
2899
                             \addpenalty\@itempenalty
2900
2901
                             \addvspace\itemsep
2902
                       \global\@inlabeltrue
2903
                 \fi
2904
2905
                 \everypar{%
2906
                       \@minipagefalse
                       \global\@newlistfalse
2907
                       \if@inlabel
2908
2909
                             \global\@inlabelfalse
                             2910
2911
                               \ifvoid\z@
                                     \kern-\itemindent
2912
```

 $fi}%$

2913

```
\box\@labels
2914
2915
           \left| \right| z@
2916
2917
        \if@nobreak
           \@nobreakfalse
2918
           \clubpenalty \@M
2919
         \else
2920
           \clubpenalty \@clubpenalty
2921
           \everypar{\everyparhook}%
2922
2923
         \bxjs@ltj@inhibitglue
2924
        \everyparhook}%
2925
2926
      \if@noitemarg
         \@noitemargfalse
2927
2928
         \if@nmbrlist
2929
           \refstepcounter\@listctr
        \fi
2930
      \fi
2931
2932
      \label{makelabel} $$\ \sigma^{0tempboxa{\mathbb{Z}}}_{makelabel{\#1}}%$
      \global\setbox\@labels\hbox{%
2933
2934
         \unhbox\@labels
        \hskip \itemindent
2935
        \hskip -\labelwidth
2936
         \hskip -\labelsep
2937
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
2938
2939
           \box\@tempboxa
        \else
2940
2941
           \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
2942
        \fi
         \hskip \labelsep}%
2943
      \ignorespaces}
    二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回,前者が 3回目以
 降に実行されます。
2945 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{@afterheading}{\%}}
      \verb|\@nobreaktrue|
2946
      \everypar{%
2947
2948
        \if@nobreak
2949
           \@nobreakfalse
           \clubpenalty \@M
2950
2951
           \if@afterindent \else
2952
             {\setbox\z@\lastbox}%
2953
         \else
2954
           \clubpenalty \@clubpenalty
2955
2956
           \everypar{\everyparhook}%
2957
        \fi\everyparhook}}
```

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIFT $_{
m E}$ X $2_{arepsilon}$ は段落の頭にグ

ルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず、不統一でした。 そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし、こ こでは逆にグルーを入れない方で統一したいので、また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

```
2958 \def\@gnewline #1{%
     \ifvmode
2959
        \@nolnerr
2960
2961
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
2962
2963
        \jsInhibitGlue \ignorespaces
2964 \fi}
```

いろいろなロゴ 12

LATeX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため, jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されて いる場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むように した。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、 \上小 の制御綴は定義しない。

```
2965 \if@jslogo
     \IfFileExists{jslogo.sty}{%
        \RequirePackage{jslogo}%
2967
2968
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
2969
2970
         {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
2971
          It is included in the recent release of \MessageBreak
          the 'jsclasses' bundle}
2972
2973
2974 \fi
```

amsmath との衝突の回避 13

\ProvidesFile

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが, これが IATFX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。 これを避けるための tDB さ んのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

> この現象については私の TeX 掲示板 $4273\sim$, $16058\sim$ で議論がありました。なお、AMS関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

[2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウト

```
しました。
2975 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
2976 %\def\ProvidesFile#1{%
2977 % \begingroup
2978 %
         \catcode`\ 10 %
         \ifnum \endlinechar<256 %
2979 %
2980 %
           \ifnum \endlinechar>\m@ne
2981 %
             \catcode\endlinechar 10 %
           \fi
2982 %
         \fi
2983 %
2984 %
        \@makeother\/%
2985 %
         \@makeother\&%
2986 %
         \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}
```

14 初期設定

■いろいろな語

```
\prepartname
   \postpartname 2987 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
\prechaptername ^{2988} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
                \postchaptername _{2990} %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
 \presectionname 2991 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{2992} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
   \contentsname
 \listfigurename 2993 \newcommand{\contentsname}{\if@english Contents\else 目次\fi}
 \listtablename ^{2994} \newcommand{\listfigurename}{\\ if@english List of Figures\\ else 図目次\\ fi}
                2995 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
        \refname
        \bibname 2996 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
     \indexname 2997 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
                2998 \mbox{ newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}}
     \figurename
     \tablename 2999 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
                3000 %<jspf>\newcommand{\figurename}{Fig.~}
                3001 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
                3002 \% \text{jspf} \rightarrow \text{mewcommand} \text{Table}^{}
   \appendixname
   \abstractname 3003 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
                3004 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
                3005 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}
```

■今日の日付 I♣TEX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦 にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE_DATE_EPOCH_TEX_PRIMITIVES が設定されている場合は"今日"が過去の日付になる可能性があるが、その場合、和暦表記は平成 2 年(1990 年)以降でのみサポートする。

※"新元号"への対応?

\today

```
3006 \@tempswafalse
3007 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
3008 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
3009 \if@tempswa \expandafter\@firstoftwo
                \expandafter\@secondoftwo
3010 \else
3011 \fi
3012 {%
3013 % 欧文 8bitTeX の場合
3014 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
3015 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
3016
      \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
3017
      \def\和暦{\jsSeirekifalse}}
3018 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
3019 \def\Wareki{\jsSeirekifalse}
3020 \def\bxjs@if@use@seireki{%
     \ifjsSeireki \expandafter\@firstoftwo
3021
     \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
3023 }{%
3024 \newif\if 西暦 \西暦 true
3025 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
     \def\西暦{\西暦 true}%
3026
      \def\和暦{\西暦 false}}
3028 \def\Seireki{\西暦 true}
3029 \def\Wareki{\西暦 false}
3030 \def\bxjs@if@use@seireki{%
     \if 西暦 \expandafter\@firstoftwo
3031
      \else \expandafter\@secondoftwo \fi}
3032
3033 }
3034 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3035 % \bxjs@unxp
3036 \let\bxjs@unxp\@firstofone
3037 \bxjs@test@engine\unexpanded{\let\bxjs@unxp\unexpanded}
3038 % \bxjs@iai
3039 \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
3040 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
3041 \else \def\bxjs@iai{}
3042 \fi
```

```
3043 % \heisei
3044 \newcount\heisei \heisei\year \advance\heisei-1988\relax
3045 % \today
3046 \edef\bxjs@today{%}
3047
      \if@english
        \ifcase\month\or
3048
          January\or February\or March\or April\or May\or June\or
3049
3050
          July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
          \space\number\day, \number\year
3051
3052
      \else
3053
        \ifnum\heisei>\@ne
          \verb|\expandafter\\| no expand \verb|\expandafter\\| bxjs@if@use@seireki|
3054
        \else \expandafter\@firstoftwo
3055
        \fi {%
3056
3057
          \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
3058
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
3059
3060
        }{%
          \bxjs@unxp{{平成}\bxjs@iai\number\heisei\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%}
3061
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
3062
3063
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
        }%
3064
3065
      \fi}
3066 \ \text{let} \ \text{bxjs@today}
  を受けないようにする。
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響

```
3067 \AtBeginDocument{%
      \ifx\bbl@jpn@Seirekitrue\@undefined\else
3068
3069
        \bxjs@decl@Seireki@cmds
3070
        \g@addto@macro\datejapanese{%
3071
          \let\today\bxjs@today}%
      \fi}
3072
```

■ ハイフネーション 例外 T_FX のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

3073 \hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-uscript}

■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
3074 %<slide>\pagestyle{empty}%
3075 %<article|report>\pagestyle{plain}%
3076 %<book>\pagestyle{headings}%
3077 \pagenumbering{arabic}
3078 \if@twocolumn
```

```
\twocolumn
3079
3080
      \sloppy
      \flushbottom
3081
3082 \ensuremath{\setminus} \mathtt{else}
3083
      \onecolumn
      \raggedbottom
3084
3085 \fi
3086 %<*slide>
3087 \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
3088 \raggedright
3089 %</slide>
```

■BXJS 独自の追加処理 彎

和文ドライバのファイルを読み込む。

3090 \catcode`\?=12

3091 \ifx\bxjs@jadriver\relax\else

 $3092 \verb|\input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}|$

3093 \fi

最後に日本語文字のカテゴリコードを元に戻す。

3094 \bxjs@restore@jltrcc

3095 %</cls>

以上です。

付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
 - p pdfT_FX (DVI モードも含む)
 - 1 $\text{LuaT}_{FX}(")$
 - x X7TFX
 - j pT_FX または upT_FX
 - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが ε -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT_EX・LuaT_EX の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用 でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ]★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale \times (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3096 %<*drv>

付録 B 和文ドライバ: minimal 湾

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$ エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

B.1 補助マクロ

3097 %<*minimal>

3098 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

 ${\tt 3099 \setminus def \setminus Declare JaTextFontCommand \#1 \#2 \{\% \}}$

3100 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3101 \relax

3102 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3103 {#2##1}}%

3104 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

3105 \def\DeclareJaMathFontCommand#1#2{\%

 ${\tt 3106} \quad \texttt{\ \ } \texttt{DeclareRobustCommand\#1[1]\{\%\}}$

3107 \relax

3108 \ifmmode\else \non@alpherr{#1\space}\fi

3109 \nfss@text{\fontfamily\familydefault

3110 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3111 #2##1}%

```
3113 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3114 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3115 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3116 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \AtBeginDocument{%
                 3118
                         \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3119
                 3120 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                   ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3121 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3122 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                   字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                   ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                   ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                   ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                   バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                   コードが保持される。
                 3123 \ensuremath{\mbox{def\jsLetHeadChar#1#2}}\%
                 3124 \begingroup
                 3125
                         \escapechar=`\\ %
                         \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3126
                         \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3127
                 3128
                      \endgroup
                 3129
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3130 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3132 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3133
                 3134
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                      }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3136
                      }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3137
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3138
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3139
                 3140 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                       \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3142 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@let@hchar@exp@c#1#2}\ensuremath{\mbox{mil}{\%}}
                 3143 %\message{<#1#2>}%
```

3112 }%

3144 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3145
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3146
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3147
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3148
3150
     }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3151
3152
3153 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3155 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3158 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3159 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3160 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3161 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3162 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
{\tt 3163 \ let\ bxjs@let@hchar@chr@ue@a\ bxjs@let@hchar@chr}
3164 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3166 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3168
3169
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3170
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3171
3172
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3173
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3174
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3176
3177
     }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3178
3179
     }}}}}
3180 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3182 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3184 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3186 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

B.2 (u)pTFX 用の設定

3188 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラスで除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3189 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1{%
3190 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#1\relax#1}
3191 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3{%
3192 %\message{(#1)}%
3193 \bxjs@cond\if#1t\fi{%
3194 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3%
3195 }{%else
3196 \bxjs@let@hchar@out\def{{#3}}%
3197 }}
3198 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

■エンジン依存の定義 最初にエンジン(pT_EX か upT_EX か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが upT_EX であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3199 \edgf\sc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} \\ 3200 \edgf\sc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} \\ 3201 \edgf\sc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず upT_{EX} の場合の定義を示す。 JS クラスの $\operatorname{uplatex}$ オプション指定時の定義と同じである。

```
3202 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3203 \ifjsWithupTeX
3204 \def\bxjs@declarefontshape{%
3205 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3206 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3207 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-w}{}%
3208 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-w}{}%
3209 }
3210 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

 pT_{EX} の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
3211 \else
3212 \def\bxjs@declarefontshape{%
3213 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%
3214 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%
3215 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tmin10}{}%
```

```
3216 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {$1$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {$1$} \ensuremath{\mbox{$1$}} {$1$} \ensuremath{\mb
3217 }
3218 \def\bxjs@sizereference{jis}
3219 \fi
                             既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3220 \def\bxjs@tmpa#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3221 \ \def\bxjs@y{#5}}
3222 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@y{10}%
3223 \else
3224 \expandafter\expandafter\bxjs@tmpa
3225 \expandafter\string\the\jfont\relax
3226 \fi
3227 \Ofor\bxjsOx:={\jscOJYn/mc/m/n,\jscOJYn/gt/m/n,%
3228
                                                                                                                                                \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
3229
                                              {\ensuremath{\mbox{\conome}\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\conome=\
3230
                                                     \expandafter\let\csname\bxjs@x/\bxjs@y\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 pT_EX の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3231 \begingroup
3232 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3234
3235 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3236
    \ifdim\wd\z@=10pt
3237
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
    \else
3239 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3240
3241
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3242
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3243
3244
    \fi
3245 \endgroup
3246 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
3247 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

```
3251 \ensuremath{\mbox{\sc QJYn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3252 \ensuremath{\mbox{\sc}}{m}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{}
3254 \ensuremath{\texttt{Sl}}{<-} ssub*gt/m/n}{} \label{eq:local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scollar_bar_local_scoll
3255 \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}{\mbox{\mbox{$1$}}} \
3256 \end{areFontShape} \gray \gra
3257 \end{areFontShape} \gray \gra
3258 \ensuremath{\mbox{\sc QJTn}{gt}{m}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3259 \ensuremath{\mbox{\sc}}{fm}{sl}{<->ssub*gt/m/n}{}
3260 \ensuremath{\texttt{Nord}} fit $$ {->ssub*gt/m/n}_{} $$
3261 \ensuremath{\texttt{NoclareFontShape}} \ensuremath{\texttt{Shape}} \ens
                    欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
         関係の定義を行う。
3262 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3263
3264
                                      \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3265 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3266
                                      \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3267
3268 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                               {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3269
3270
                                      \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3271\ \texttt{\ \ } If x \texttt{\ \ } DeclareFixJFMCJKTextFontCommand} \texttt{\ \ \ } Qundefined
3272 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3273 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3274 \fi
3275 \bxjs@if@sf@default{%
                          \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                    念のため。
3277 \setminus selectiont
          ■パラメタの設定
3278 \prebreakpenalty\jis"2147=10000
3279 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3280 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3281 \inhibitxspcode`!=1
3282 \inhibitxspcode \=2
3283 \xspcode \ += 3
3284 \times \%=3
                    "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3285 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
                          \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
                    \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
3287 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
                    \jsResetDimen は空のままでよい。
```

■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir)は pTeX 以外では未定義であるため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ文字に使う。

```
3288 \begingroup
3289 \catcode`\!=0

\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。
3290 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
3291 !iftdir t%
3292 !else!ifydir y%
3293 !else ?%
3294 !fi!fi}
```

新版の pTpX で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。

※現在の pIATeX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。

```
3295 % 古い \@makefnmark の定義
3296 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%}
3297    !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
3298    !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
3299 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
3300 \long\gdef\@makefnmark{%
3301    !ifydir \hbox{}\hbox{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}\hbox{}%
3302    !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
3303 \fi
3304 \endgroup
```

B.3 pdfT_FX 用の処理

```
3305 \le ifx p\sine
3306 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue
3307 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
3308 \def\bxjs@cjk@loaded{%
     \def\@footnotemark{%
3309
        \leavevmode
3310
        \ifhmode
3311
3312
          \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
          \label{lastkern} $$ \left( \frac{1}{2} \right) = \frac{3}{2} .
3313
3314
              \unkern\unkern
              \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
3315
          \fi\fi
3316
3317
          \nobreak
3318
        \fi
3319
        \@makefnmark
3320
        \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
        \relax}%
3321
```

```
3322
                         \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                    3323 }
                    3324 \AtBeginDocument{%
                         \@ifpackageloaded{CJK}{%
                    3325
                           \bxjs@cjk@loaded
                         }{}%
                    3327
                    3328 }
                          X<del>_</del>TFX 用の処理
                     B.4
                    3329 \else\ifx x\jsEngine
                       \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                     適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                    3330 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                         \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3331
                    3332
                         \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                           \bxjs@let@hchar@chr@xe
                    3333
                         }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3334
                    3335 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                         \c)=\t)
                         \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3338 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\@undefined\else
                         \def\bxjs@do@precisetext{%
                    3339
                    3340
                           \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3341 \fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                    3342 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                    3343 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                         \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                    3344
                         3345
                    3346
                           \jsSimpleJaSetup
                           \ClassInfo\bxjs@clsname
                    3347
                            {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                    3348
                    3349
                         \fi\fi}
     \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                    3350 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                         \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                    3351
                    3352
                         \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                    3353
                         \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
```

B.5 後処理(エンジン共通)

3354 \fi\fi\fi

simplejasetup オプションの処理。

```
3355 \ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else
3356
      \AtBeginDocument{%
        \ifbxjs@simplejasetup
3357
          \bxjs@do@simplejasetup
3358
3359
        \fi}
3360 \fi
   precisetext オプションの処理。
3361 \ifbxjs@precisetext
      \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
3363
        \ClassWarning\bxjs@clsname
3364
         {The current engine does not supprt the\MessageBreak
          'precisetext' option\@gobble}
3365
3366
        \bxjs@do@precisetext
3367
3368
      \fi
3369 \fi
```

- ■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。
 - デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
 - bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

3370 \ifbxjs@fancyhdr

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3371 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3372 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

※和文なので \sl は無い方がよいはず。

- 3373 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}% 3374 \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
- 3375 \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
- 3376 \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
- 3378 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3379 \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%
- $3380 $$ \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\left\langle \right\rangle }$
- $3382 $$ \ \f @ncyerh\bxjs @tmpa \global\let\f @ncyerh\bxjs @tmpb \fine \global\let\f @ncyerh\bxjs @tmpb \fine \global\let\fine \global\glob$
- ${\tt 3383} \qquad {\tt \f@ncyolh\bxjs@tmpa\ \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb\ \fine \cite{thmpa}}$
- 3384 \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
- 3385 $\def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%$
- 3386 \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
- 3387 \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi

```
\fullwidth が (定義済で) \textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に合わせる。
```

```
\ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
                            \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
                    3390
                    3391
                            \verb|\edef|\bxjs@tmpa{\noexpand\\fancyhfoffset[EL,OR]{\the\\@tempdima}|,
                            }\bxjs@tmpa
                    3392
                    3393
                          \fi\fi
                    3394
                          \PackageInfo\bxjs@clsname
                    3395
                           {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}
\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。
                    3396 \def\bxjs@pagestyle@hook{%
                          \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%
                    3397
                    3398
                            \bxjs@adjust@fancyhdr
                    3399
                            \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
                    3400 }{}}
                        \pagestyle にフックを入れ込む。
                    3401 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
                    3402 \ensuremath{\mbox{\mbox{def}\pagestyle}}\%
                         \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
                        begin-document フック。
                      ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
                    3404 \AtBeginDocument{%
                          \bxjs@pagestyle@hook
                          \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
                    3406
                        終わり。
                    3407 \fi
                        以上で終わり。
                    3408 %</minimal>
```

付録 C 和文ドライバ: standard 🕾

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing

- \autoxspacing/\noautoxspacing
- ■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、 T_{EX} Live の kanji-configupdmap コマンドで使う "ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、autoは kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

3409 %<*standard>

3410 %% このファイルは日本語文字を含みます

3411 \input{bxjsja-minimal.def}

simplejasetup は standard では無効になる。

3412 \bxjs@simplejasetupfalse

■japaram オプションの処理 japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\bxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

3413 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv

jis2004 オプションの処理。

3414 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue

 $3415 \verb|\bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse| \\$

3416 \define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%

3417 \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}

\bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。

3418 \let\bxjs@jp@font\@empty

jis2004 オプションの処理。

 $3419 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjsStd}{font}{\%}}$

 $3420 \quad \texttt{\edef\bxjs@jp@font{#1}} \\$

実際の japaram の値を適用する。

 $3421 \ensuremath{$\def\bxjs@next\#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{\#1}}}$

3422 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

※ otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

3423 \ifbxjs@jp@jismmiv

3424 \g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}

3425 % \@ifpackagewith 判定への対策

3426 \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}

3427 \fi

 $3428 \ \text{ifjsWitheTeX}$

使える場合は、「\dimexpr 外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として使える)で各命令定義する。

 \j Q \j Q と \j H はともに $0.25\,\mathrm{mm}$ に等しい。

\jH3429 \@tempdima=0.25mm

3430 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

 $3431 \left(\frac{jH}{jQ} \right)$

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

```
\trueH3432 \ifjsc@mag
```

- 3433 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax
- 3434 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%
- 3435 \@tempdima=2.5mm
- 3436 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
- 3437 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3438 \@tempdima=10pt
- 3439 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
- 3441 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@
- 3442 \fi
- 3443 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が12Qになる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

- 3444 \Otempdima\trueQ \bxjs@invscale\Otempdima\jsScale
- $3445 \qquad \verb|\protected| edef| ascQ{\dimexpr| the \dempdima| relax}|$
- 3446 \Otempdima\bxjsOtruept \bxjsOinvscale\Otempdima\jsScale
- $3447 \quad \verb|\protected| edef| ascpt{\dimexpr\the| @tempdima| relax}|$

 $3448 \fi$

\jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わりに、〈実数〉Q・〈実数〉H・〈実数〉trueQ・〈実数〉trueH が記述できる。

 $3449 \ensuremath{\mbox{\sc QHLength}}{1#2} \$

- 3450 \begingroup
- 3451 \bxjs@parse@qh{#2}%
- 3452 \ifx\bxjs@tmpb\relax \setlength\@tempdima{#2}%
- 3453 \else \@tempdima\bxjs@tmpb\relax
- 3454 \fi
- 3455 \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%
- 3456 \endgroup
- 3457 #1=\bxjs@g@tmpa\relax}

```
\bxjs@parse@qh jsSetQHLength の下請け。#1 が Q/H/trueQ/trueH で終わる場合、\bxjs@tmpb にそれに
              等しい寸法の表現を返す。それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
            3458 \if j\jsEngine
              (u)pIATFX ではこの処理は不要なので無効化する。
            3459 \def\bxjs@parse@qh#1{%
            3460
                 \let\bxjs@tmpb\relax}
            3461 \else
            3462 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                 \def\bxjs@tmpa{#1}\let\bxjs@tmpb\relax
            3464
                \bxjs@parse@qh@a{trueQ}\trueQ
            3465
                 \bxjs@parse@qh@a{trueH}\trueH
                 \bxjs@parse@qh@a{Q}\jQ
            3466
                 \bxjs@parse@qh@a{H}\jH}
            3467
            3468 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2{%}
                 \ifx\bxjs@tmpb\relax
            3469
            3470
                   3471
                   \fi}
            3472
            3473 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                 \ifx\@nnil#2\@nnil\else \def\bxjs@tmpb{#1#3}\fi}
            3475 \fi
   \jafontsize \jafontsize{⟨フォントサイズ⟩}{⟨行送り⟩}: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が ⟨
              フォントサイズ〉に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、Q/H
              の単位が使用できる。
            3476 \left| \frac{1}{2} \right|
            3477
                 \begingroup
                   \bxjs@jafontsize@a{#1}%
            3478
                   \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
            3479
            3480
                   \bxjs@jafontsize@a{#2}%
                   \xdef\bxjs@g@tmpa{%
            3481
                     \noexpand\fontsize{\the\@tempdimb}{\the\@tempdima}}%
                 \endgroup\bxjs@g@tmpa}
            3484 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%
                 \bxjs@parse@qh{#1}%
            3485
                 \ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi
            3486
                 \@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
            3487
               続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
\bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。
            3488 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
 \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
            3489 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                 \edef\bxjs@kanjiskip{#1}%
            3490
```

\bxjs@reset@kanjiskip}

```
3492 \newcommand*\getkanjiskip{%
                              \bxjs@kanjiskip}
\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただしpTFX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                           るのでこの変数は常に真とする。
                         3494 \verb|\newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue| \\
   \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
  \verb|\bxjs@disable@kanjiskip| 3495 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@kanjiskip| \% |
                              \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                              \bxjs@reset@kanjiskip}
                         3498 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                              \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                         3499
                              \bxjs@reset@kanjiskip}
                         3500
    \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                         3501 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                              \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                         3502
                                \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                         3503
                              \else \@tempskipa\z@
                         3504
                         3505
                              \fi
                              \bxjs@apply@kanjiskip}
                         3506
         \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
           \setxkanjiskip3507 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
           \edef\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\verb|\ifbxjs@xkanjiskip@enabled|_{3510}
                              \bxjs@reset@xkanjiskip}
  \bxjs@enable@xkanjiskip3511 \newcommand*\getxkanjiskip{%
                              \bxjs@xkanjiskip}
 \bxjs@disable@xkanjiskip^{3512}
                         3513 \neq \frac{1}{3} \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
   \verb|\bxjs@reset@xkanjiskip| 3514 \verb|\bxjs@robust@def\bxjs@enable@xkanjiskip{%}| $$
                              \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
                         3515
                         3516
                              \bxjs@reset@xkanjiskip}
                         3517 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
                              \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
                              \bxjs@reset@xkanjiskip}
                         3519
                         3520 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
                              \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
                         3521
                                \setlength{\Otempskipa}{\bxjsOxkanjiskip}%
                         3522
                              \else \@tempskipa\z@
                         3523
                         3524
                              \fi
                              \bxjs@apply@xkanjiskip}
                         3525
                            \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
                          する。
                         3526 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
```

\getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。

```
3527 \bxjs@reset@kanjiskip
3528 \bxjs@reset@xkanjiskip\
3529 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3530 \let\bxjs@apply@xkanjiskip\relax
```

■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3531 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3532 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
      \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
3533
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3534
3535
        \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3536
3537
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3538
3539
        \fi
3540
      \else
        \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3541
3542
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3543
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3544
3545
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
          not available on the current situation}%
3546
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3548
      \fi\fi
3549 }
3550 \def\bxjs@@auto{auto}
3551 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

3552 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax

\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。

```
3553 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
3554 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
3555
      \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
3556
        \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
        \endlinechar\m@ne
3557
        \let\do\@makeother\dospecials
3558
        \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
3559
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3560
3561
        \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
        \ifeof\@inputcheck\else
3562
          \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
3563
```

```
3565
       3566
                \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                  \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
       3567
                  \@tempswatrue
       3568
                  \loop\if@tempswa
       3569
                    \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
       3570
       3571
                    \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
                    \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
       3572
                      \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
       3573
                      \@tempswafalse
       3574
       3575
                    \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
       3576
                    \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
       3577
       3578
                      \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
       3579
                      \@tempswafalse
                    \fi
       3580
                    \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
       3581
       3582
                  \repeat
                \fi
       3583
       3584
              }\endgroup
              \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
       3585
       3586 }
       3587 \verb|\color| 3587 \end{substitute} 3587 \end{substitute} \label{substitute}
       3588 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@ni1#3\@nni1{%
              \fine $$1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
              \else \let\bxjs@tmpb\relax
       3590
       3591
       3592 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
       3593 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
              \fine $1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
       3594
       3595
              \else \let\bxjs@tmpb\relax
       3596
             \fi}
\jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
       3597 \newcommand*\jachar[1]{%
             \begingroup
       3598
         \jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。
                \jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
                \ifx\bxjs@tmpa\relax
       3600
       3601
                  \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
       3602
                    {Illegal argument given to \string\jachar}%
       3603
                \else
                  \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
       3604
                \fi
       3605
       3606
             \endgroup}
         \jsJaChar を \jachar と等価にする。
       3607 \let\jsJaChar\jachar
```

3564

\closein\@inputcheck

```
下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
3608 \let\bxjs@jachar\@firstofone
```

■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、hyperref 側の処理は無効にしておく。

3609 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}

```
\bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
```

```
3610 \@onlypreamble\bxjs@fix@hyperref@unicode
3611 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
      \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
3612
      \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
3613
3614
        \KV@Hyp@unicode{##1}%
        \def\KV@Hyp@unicode###1{%
3615
          \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
3616
3617
             \csname if####1\endcsname\else
            \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3618
            {Blcoked hyperref option 'unicode=####1'}%
3619
          \fi
3620
3621
        }%
3622
     }%
3623 }
```

\bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。

```
3624 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
3625 \def\bxjs@urgent@special#1{%
      \AtBeginDvi{\special{#1}}%
3626
3627
      \AtBeginDocument{%
        \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
3628
          \begingroup
3629
             \toks\z@{\special{#1}}%
3630
            \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
3631
3632
             \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
3633
          \endgroup
        }{}%
3634
      }%
3635
3636 }
```

C.2 pTFX 用設定

 $3637 \if j\jsEngine$

■共通命令の実装

```
3638 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3639 \kanjiskip\@tempskipa}
3640 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
3641 \xkanjiskip\@tempskipa}
```

```
\jaJaChar のサブマクロ。
3642 \def\bxjs@jachar#1{%
3643 \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
3644 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5}\mbox{@nil}{\%}
 引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
     \ifx.#2#1%
 引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
     \left( x, \#3 \right)
3646
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3647
       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
3648
3649
       \bxjs@jachar@b
     \left| \cdot \right| = \left| \cdot \right|
3650
3651
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3652
       \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3653
3654
       \bxjs@jachar@b
3655
     \else
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3656
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3657
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3658
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3659
       \bxjs@jachar@b
3660
3661
     fi\fi\fi
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
3662 \ifjsWithupTeX
     3663
3664 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
3665
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
3666
3667
         \bxUInt{\@tempcnta}%
       \fi}
3668
3669 \fi
   和欧文間空白の命令 \> の実装。
3670 \ \ ifbxjs@xkanjiskip@cmd
     \def\bxjs@put@xkanjiskip{%
3671
       \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
3672
       \else \hskip\xkanjiskip
3673
3674
       \fi}
     \ifjsWitheTeX \protected\def\>{\bxjs@put@xkanjiskip}
3675
3676
     \else \def\>{\protect\bxjs@put@xkanjiskip}
3677
     \fi
3678 \fi
```

■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が prefer2004jis である。

```
3679 \ifbxjs@jp@jismmiv
3680 \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
3681 \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
3682 \fi
```

■和文フォント指定の扱い pTEX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、 \jsJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。

```
3683 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3684 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
3685 \let\bxjs@tmpa\@empty
3686 \else\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3687 \def\bxjs@tmpa{noembed}
3688 \fi\fi
3689 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3690 \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
3691 \edef\bxjs@next{%
3692 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
3693 }\bxjs@next
3694 \fi
```

■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。

※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。 (もっといい方法はないのか……。)

```
3695 \begingroup
      \verb|\global| let \@gtempa| relax|
3696
3697
      \catcode`\|=0 \catcode`\\=12
      |def|bxjs@check#1|@nil{%
3698
3699
        |bxjs@check@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
      |def|bxjs@check@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
3700
       |ifx$#1$|bxjs@check@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
3701
      |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
3702
      \def\bxjs@check@b#1keyval#2\@nnil{%
3703
3704
        ifx$#2$\else
3705
          \xdef\@gtempa{%
3706
            \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
        \fi}
3708 \@firstofone{%
      \catcode10=12 \endlinechar\m@ne
3709
      \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
      \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
3711
3712
      \@tempswatrue
```

```
3713
     \loop\if@tempswa
3714
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
3715
       \if@tempswa
         \read\@inputcheck to\bxjs@line
3716
         \expandafter\bxjs@check\bxjs@line\@nil
3717
       \fi
3718
     \repeat
3719
3720
     \closein\@inputcheck
3721 \endgroup}
3722 \@gtempa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
3723 \ifbxjs@hyperref@enc
    \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
3724
3725 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
3726 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
3727
       \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
3728
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
3729
3730
     \else\ifnum\jis"2121="8140 %sjis
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
3731
     \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
3732
3733
       \ifbxjs@bigcode
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
3734
         \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
3735
3736
         \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
3737
       \fi
3738
     fi\fi\fi
3739
3740
     \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
3741 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enable jfam=false
 以外の場合は @enablejfam を真にする。
3742 \ f\ bxjs@enablejfam\ else
3743 \@enablejfamtrue
3744 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
3745 \if@enablejfam
3746
     \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
3747
3748
     \jfam\symmincho
3749
     \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
3750
     \AtBeginDocument{%
3751
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
3752
```

```
3753 \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\@mathrm}{\@mathrm}}\
3754 \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathgt}}\
3755 \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathgt}}\
3756 \fi
3757 \fi
```

C.3 pdfT_EX 用設定: CJK + bxcjkjatype

3758 \else\if p\jsEngine

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション (プリセット指定) に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。

```
3759 \bxjs@adjust@jafont{f}
```

3760 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}

3761 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{whole}}

 $3762 \end{figure} and oc} if x \end{figure} on the constant of the constant$

3763 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}

3764 \fi

3765 \edef\bxjs@next{%

3766 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c

3767 }\bxjs@next

3768 \bxjs@cjk@loaded

- ■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
- ※取りあえず固定はしない。

3770 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}

3771 \fi

\hypersetup 命令で(CJK* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定できるようにするための細工。

※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。

※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがその場で展開されてしまう」ため困難である。

3772 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined

3773 \begingroup

3774 \CJK@input{UTF8.bdg}

3775 \endgroup

 $3776 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{\%}$

3777 \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%

3778 }

3779 \fi

~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。

```
3780 \ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined
3781 \g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%
           \ifx~\bxjs@@CJKtilde
                  \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
3783
                  \let\HyPsd@LetUnexpandableSpace\bxjs@LetUnexpandableSpace
3784
                 \let~\@empty
3785
             \fi
3786
3787 }
3788 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
3789 \def\bxjs@@tildecmd{~}
{\tt 3790 \setminus def \setminus bxjs@LetUnexpandableSpace\#1\{\%, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990, 1990,
             \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
3791
                  \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
           \fi}
3793
3794\fi
   ■共通命令の実装
3795 \newskip\jsKanjiSkip
3796 \newskip\jsXKanjiSkip
3797 \ifx\CJKecglue\@undefined
             \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3798
3799 \fi
3800 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3801 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3802 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
3803 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
             \jsKanjiSkip\@tempskipa
             \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
3805
3806 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
3807 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3808 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3809 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
             \jsXKanjiSkip\@tempskipa
3810
            \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
        \jachar のサブマクロの実装。
3812 \def\bxjs@jachar#1{%
3813 \CJKforced{#1}}
        \> は bxcjkjatype で定義されているが、保護付のマクロに変換する。
3814 \ifbxjs@xkanjiskip@cmd
            \protected\def\>{%
3816
                  \relax\ifmmode \mskip\medmuskip \else \CJKecglue\ignorespaces \fi}
3817 \fi
   ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
   ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
3818 \ifx t\bxjs@enablejfam
3819 \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
```

```
3820 {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak 3821 CJK package does not support Japanese math} 3822\ \fi
```

C.4 X¬TFX 用設定: xeCJK + zxjatype

3823 \else\if x\jsEngine

■zxjatype パッケージの読込 スケール値(\jsScale)の反映は zxjatype の側で行われる。

```
3824 \RequirePackage{zxjatype}
3825 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
3826 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
3827 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
3828 \ifx\zxJaFamilyName\@undefined
3829 \ClassError\bxjs@clsname
3830 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
3831 \fi
```

■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は IPAex フォントを使用する。

```
3832 \bxjs@adjust@jafont{f}
3833 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3834 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
3835 \setCJKmainfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexMincho}
3836 \setCJKsansfont[BoldFont=IPAexGothic]{IPAexGothic}
3837 \else
3838 \edef\bxjs@next{%
3839 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
3840 }\bxjs@next
3841 \fi
```

■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{\rm T}T_{\rm E}X$ の場合は、xdvipdfmx が ${\rm UTF-8} \to {\rm UTF-16}$ の変換を行う機能を持っているため、本来は ${\rm special}$ 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、 ${\rm hyperref}$ での方針としては、 ${\rm X}_{\rm T}T_{\rm E}X$ の場合にもパッケージ側で文字コード変換を行う方が望ましいと考えている。実際、 ${\rm unicode}$ を無効にしていると警告が出て強制的に有効化される。一方で、過去(${\rm r}35125$ まで)の ${\rm x}$ dvipdfmx では、文字列を ${\rm UTF-16}$ に変換した状態で与えるのは不正と見なしていて警告が発生する。

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\Xi}T_{E}X$ のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

```
3842 \ifnum\strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992}>\m@ne
3843 \ifbxjs@hyperref@enc
3844 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
3845 \fi
3846 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。 3847 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

■共通命令の実装

```
3848 \newskip\jsKanjiSkip
3849 \newskip\jsXKanjiSkip
3850 \ifx\CJKecglue\@undefined
    \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
3851
3852 \fi
3853 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
3854 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
3855 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
3856 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
3857
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
3859 \verb|\lambel{lem:spacingbxjs@enable@xkanjiskip}|
3860 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
3861 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
3862 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
3864
   \mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的
 にここで定義する。
3865 \ifx\mcfamily\@undefined
     \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
     \protected\def\gtfamily{\CJKsfdefault}}
3867
3868 \fi
   \jachar のサブマクロの実装。
3869 \def\bxjs@jachar#1{%
3870 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
3871 #1}
   \> は zxjatype で定義されているが、standard の仕様に合わせて変更する。
 ※元は \ignorespaces でなく \relax (\scan_stop:) だった。
3872 \ifbxjs@xkanjiskip@cmd
     \protected\def\>{%
       \relax\ifnmode \mskip\medmuskip \else \CJKecglue\ignorespaces \fi}
3874
3875 \fi
```

■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true の場合にのみ @enablejfam を真にする。

```
3876 \ifx t\bxjs@enablejfam
3877 \@enablejfamtrue
3878 \fi

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
※ FIXME: 要検討。
3879 \if@enablejfam
3880 \xeCJKsetup{CJKmath=true}
3881 \fi
```

C.5 LuaTFX 用設定: LuaTFX-ja

3882 \else\if l\jsEngine

■LuaT_EX-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す)を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \jsZw であることに注意が必要。

% 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。

```
3883 \let\zw\@undefined
3884 \RequirePackage{luatexja}
3885 \RequirePackage{luatexja-fontspec}
```

■和文フォント定義 luatexja-fontspec で使用する和文スケール値を \jsScale と合致 させたいのだが……もっと良い方法はないのか?

```
3886 \ExplSyntaxOn
3887 \fp_gset:\n \g_ltj_fontspec_scale_fp { \jsScale }
3888 \ExplSyntaxOff
```

\jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は、luatexja-preset パッケージの ipaex オプション (IPAex フォント使用) と等価な設定を用いる (luatexja-preset は読み込まない)。

```
3889 \bxjs@adjust@jafont{t}
3890 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
3892 \fi
3893 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3894 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
      \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
      \setmainjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexMincho}
3897
      \setsansjfont[BoldFont=IPAexGothic,JFM=ujis]{IPAexGothic}
3898 \else
      \edef\bxjs@next{%
3899
        \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
3900
3901
    }\bxjs@next
```

```
3902 \fi
```

欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント 関係の定義を行う。

```
3903 \DeclareRobustCommand\rmfamily
      {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
3904
       \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3906 \DeclareRobustCommand\sffamily
3907
      {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
       \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3908
3909 \DeclareRobustCommand\ttfamily
      {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3911
       \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3912 \AtBeginDocument{%
      \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
3913
      \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
3914
      \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\mathsf}{\mathsf}}%
3916 \bxjs@if@sf@default{%
      \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
```

■和文パラメタの設定

```
3918 % 次の 3 つは既定値の通り
3919 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
3920 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={`'',10000}}
3921 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`'',10000}}
3922 \ltjsetparameter{jaxspmode={`!,1}}
3923 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\T,2}}
3924 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
3925 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
```

■段落頭でのグルー挿入禁止

```
3926 \protected\def\@inhibitglue{%
3927 \directlua{%
3928 luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
3929 \let\bxjs@ltj@inhibitglue\@inhibitglue
3930 \let\@inhibitglue\@undefined
```

■hyperref 対策 unicode にするべき。

```
3931 \ifbxjs@hyperref@enc
3932 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
3933 \fi
```

■共通命令の実装

```
3934 \protected\def\autospacing{%
3935 \ltjsetparameter{autospacing=true}}
3936 \protected\def\noautospacing{%
3937 \ltjsetparameter{autospacing=false}}
3938 \protected\def\autoxspacing{%
```

```
\ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
      3940 \protected\def\noautoxspacing{%
            \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
      3942 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
            \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
      3944 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
            \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
          \jachar のサブマクロの実装。
      3946 \def\bxjs@jachar#1{%
      3947 \ltjjachar`#1\relax}
          \> の実装。
      3948 \ifbxjs@xkanjiskip@cmd
            \protected\def\>{%
      3949
              \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
      3950
      3951
              \else \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\ignorespaces
      3952
              fi
      3953 \fi
        ■和文数式ファミリ LuaT_EX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
        な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
      3954 \ifx f\bxjs@enablejfam
            \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
             {\tt \{You\ cannot\ use\ 'enablejfam=false',\ since\ the\backslash MessageBreak}
      3957
              LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
      3958 \fi
        C.6 共通処理 (2)
      3959 \fi\fi\fi\fi
        ■共通命令の実装
\textmc minimal ドライバ実装中で定義した \DeclareJaTextFontCommand を利用する。
\textgt 3960 \ifx\DeclareFixJFMCJKTextFontCommand\@undefined
      3961 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
      3962 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
      3963 \fi
\mathmc この時点で未定義である場合に限り、\DeclareJaMathFontCommand を利用したフォール
\mathgt バックの定義を行う。
      3964 \ifx\model{limit} undefined
            \DeclareJaMathFontCommand{\mathmc}{\mcfamily}
           \DeclareJaMathFontCommand{\mathgt}{\gtfamily}
      3967\fi
```

■和文・和欧文間空白の初期値

```
3968 \setkanjiskip{Opt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
3969 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
3970 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
3971 \fi
以上で終わり。
3972 %</standard>
```

付録 D 和文ドライバ: modern 🕸

モダーンな設定。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

3973 %<*modern>

3974 \input{bxjsja-standard.def}

D.1 フォント設定

```
T1 エンコーディングに変更する。
```

```
※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
```

 $3975 \in 1$ if num0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0

3976 \def\encodingdefault{T1}%

3977 \input{t1enc.def}%

3978 \fontencoding\encodingdefault\selectfont

3979 \fi

基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。

※以下は \usepackage[noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。

```
3980 \in x\ x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z0
```

3981 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}

3982 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}

 $3983 \text{lenewcommand}\{\text{lmtt}\}$

3984 \fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

※ amsfonts パッケージと同等にする。

3985 \DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{%

3986 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%

3987 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%

 $3988 \exp \text{andafter} \operatorname{OMX/cmex/m/n/10} \operatorname{csname} \operatorname{CMX/cmex/m/n/10}$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

 $3989 \def\cmex@opt{10}$

D.2 fixltx2e 読込

※ fixltx2e 廃止前の LATEX カーネルの場合。

3990 \ifx\@IncludeInRelease\@undefined 3991 \RequirePackage{fixltx2e} 3992\fi

和文カテゴリコード D.3

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 3993 \RequirePackage{bxjscjkcat}

D.4 完了

おしまい。

3994 %</modern>

付録E 和文ドライバ:pandoc 🕸

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

3995 %<*pandoc>

3996 \input{bxjsja-standard.def}

3997 \RequirePackage{bxjspandoc}

E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに "option clash" の検査をスキップする。この 時に何らかのコードを実行させることができる。

\bxjs@set@dupload@proc \bxjs@set@dupload@proc{(ファイル名)}{(定義本体)} 特定のファイルの読込が \Offilewithoptions で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプショ ン重複検査をスキップして、代わりに〈定義本体〉のコードを実行する。このコード中で#1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

3998 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc

3999 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%

\expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}

4001 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a

4002 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%

\@onlypreamble#1\def#1##1}

\@if@ptions \@if@ptions の再定義。

4004 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions

4005 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions

4006 \newif\ifbxjs@dlp

 $4007 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc d$

4008 \bxjs@dlpfalse

```
\def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%
4009
4010
      \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
4011
        \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
          \bxjs@dlptrue \fi
4012
4013
      \ifbxjs@dlp \expandafter\bxjs@do@dupload@proc
4014
      \else \expandafter\bxjs@org@if@ptions
4015
4016
      \fi {#1}{#2}{#3}}
4017 \AtBeginDocument{%
      \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
4019 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
4020 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%}
      \csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname{#3}%
      \@firstoftwo}
4022
```

E.2 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐため、とりあえず両パッケージ を無効化しておく。

```
4023 \in x\ x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0
 Polyglossia について。
4024 \pandocSkipLoadPackage{polyglossia}
4025 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
      \ClassWarning\bxjs@clsname
       {Loading of polyglossia is blocked}}
4027
4028 \ifx\setmainlanguage\@undefined
4029 \newcommand*\setmainlanguage[2][]{}
4030 \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
4031
      \ifcat_#2_\else
        \expandafter\let\csname #2\endcsname\@empty
4032
4033
        \expandafter\let\csname end#2\endcsname\@empty
        \expandafter\let\csname text#2\endcsname\@firstofone
4035
      \fi}
4036 \newcommand*\setotherlanguages[2][]{%
      \ensuremath{\texttt{Qfor}\bxjs@tmpa:={\#2}\do{\%}}
        \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}
4038
4039 \fi
4040 \else
 Babel について。
4041 \pandocSkipLoadPackage{babel}
4042 \bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{%
      \ClassWarning\bxjs@clsname
4043
       {Loading of babel is blocked}}
4045 \ \text{let\foreignlanguage\@secondoftwo}
4046 \let\otherlanguage\@gobble
```

```
4047 \  \ \fi
```

E.3 geometry 変数

geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout* が呼ばれるようにする。

```
4049 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 4050 \setpagelayout*{#1}}
```

E.4 CJKmainfont 変数

LuaT_EX (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4051 \if 1\jsEngine
4052 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4053 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4054 \fi
```

E.5 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

```
4055 \AtBeginDocument{%
```

4056 \@tempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

```
4057 \quad \texttt{\footnote{1}}  \ifx\oldparagraph\@undefined\else
```

4058 \@tempswatrue

4059 \fi

\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。

4061 \@tempswatrue

4062 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更する。

- 4064 \let\jsParagraphMark\@empty
- $4065 \fi\fi$

E.6 全角空白文字

E.7 完了

 $4072 \fi\fi$

おしまい。

4073 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4074 %</drv>

付録 F 補助パッケージ一覧 🕾

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

• bxjscompat: ムニャムニャムニャ。

• bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

• bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4075 %<*anc>

付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

G.1 準備

```
4076 %<*compat>
4077 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}
```

\bxjx@engine エンジンの種別。

 $4078 \ \text{let\bxac@engine=n}$

 $4079 \ensuremath{\mbox{\sc 0do#1#2}}\$

 $4080 \ \edf\bxac@tmpa{\string#1}\%$

4081 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%

```
\ifx\bxac@tmpa\bxac@tmpb #2\fi}
                        4083 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}
                        4084 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}
  \bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの
                          終わりまで実行を遅延する。
                        4085 \ \text{ifx}\ \text{SAtEndOfClass}\ \text{Oundefined}
                        4086 \let\bxac@delayed@if@bxjs\@firstofone
                        4087 \else \let\bxac@delayed@if@bxjs\jsAtEndOfClass
                        4088 \fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4089 \verb|\newif\ifbxac@in@old@behavior| 
                        4090 \left| \text{ImposeOldLuaTeXBehavior} \right|
                        4091 \let\RevokeOldLuaTeXBehavior\relax
                          G.2 X<sub>TE</sub>X 部分
                        4092 \ifx x\bxac@engine
                            XaTeX 文字クラスのムニャムニャ。
                        4093 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
                        4094 \bxac@delayed@if@bxjs{%
                        4095
                              \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{%else
```

```
\ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
4096
            \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
4097
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4098
            {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
4099
4100
          \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
4101
            \xe@alloc@intercharclass=3
4102
          }{%else
4103
            \PackageWarning\bxac@pkgname
              {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
4104
4105
               \@gobble}%
          }%
4106
4107
        \fi\fi
4108
        \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4109
            {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
4110
          4111
            3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
4112
            3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
4113
            30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
4114
            31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
4115
4116
          }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
4117
        \fi
4118
     }%
4119
4120 }
```

```
G.3 LuaTFX 部分
                                                     4122 \ifx 1\bxac@engine
                                                              ムニャムニャ。
                                                     4123 \unless\ifnum\luatexversion<80 \ifnum\luatexversion<85
                                                                  \chardef\pdftexversion=200
                                                                   \def\pdftexrevision{0}
                                                                  \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                     4126
                                                     4127 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4128 \verb|\logingroup| expandafter | expandaf
                                                     4129 \expandafter\ifx\csname outputmode\endcsname\relax\else
                                                     4130 \def\bxac@ob@list{%
                                                                   \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                                                     4131
                                                     4132
                                                                   \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                     4133
                                                                   \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                                   \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                     4135
                                                     4136 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
                                                                   4138 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
                                                                  \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                                   \ensuremath{\verb||left||} \textbf{lef#1} \textbf{undefined}
                                                     4140
                                                     4141
                                                     4142 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                     4143
                                                                  \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                                       \bxac@in@old@behaviortrue
                                                     4145
                                                                       \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                 \fi}
                                                     4146
                                                     4147 \protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                  \ifbxac@in@old@behavior
                                                     4148
                                                                        \bxac@in@old@behaviorfalse
                                                     4149
                                                                       \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                     4150
                                                                  \fi}
                                                     4151
                                                     4152 \fi
                                                              漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
                                                     4153
                                                                  \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
                                                     4154
                                                                       local function range(cs, ce, cc, ff)
                                                                            if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
                                                     4155
                                                                                local setcc = tex.setcatcode
                                                     4156
                                                     4157
                                                                                for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
                                                     4158
                                                                            end
                                                                        end
                                                     4159
                                                                       range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
                                                     4160
                                                                       range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
                                                     4161
```

以上。 4121 **\fi**

```
range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4162
4163
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
4164
        range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
4165
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4166
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4167
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
4168
4169
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4170
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4171
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4172
     }\fi
4173
 以上。
4174 \fi
```

G.4 完了

おしまい。

4175 %</compat>

付録 H 補助パッケージ:bxjscjkcat 🚳

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

H.1 準備

4176 %<*cjkcat>

```
4177 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
4178 \newcount\bxjx@cnta

\bxjx@engine エンジンの種別。

4179 \let\bxjx@engine=n
4180 \def\bxjx@do#1#2{%
4181 \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
4182 \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
4183 \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
4184 \bxjx@do\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
4185 \bxjx@do\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
4186 \bxjx@do\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
4187 \bxjx@do\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
4188 \bxjx@do\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
```

それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを 検査する。

```
4189 \def\bxjx@do#1#2{%
4190 \if#1\bxjx@engine
```

```
4191
        \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
4192
          \PackageError\bxjx@pkgname
           {Package '#2' must be loaded}%
4193
           {Package loading is aborted.\MessageBreak\@ehc}%
4194
4195
          \endinput}
4196
     \fi}
4197 \bxjx@do{p}{bxcjkjatype}
4198 \bxjx@do{x}{xeCJK}
4199 \bxjx@do{l}{luatexja}
    古い LATFX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
4200 \ifx\TextOrMath\Qundefined
4201 \RequirePackage{fixltx2e}
4202 \fi
```

H.2 和文カテゴリコードの設定

upIATEX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更する。

```
※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点: A830、A960、1B000。
4203 \if u\bxjx@engine
4204 \@for\bxjx@x:={%
4205 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
4206 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,08A0,0900,0980,0A00,%
4207 OA80, OB00, OB80, OC00, OC80, OD00, OD80, OE00, OE80, OF00, %
4208 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, 1720, %
4209 1740, 1760, 1780, 1800, 18B0, 1900, 1950, 1980, 19E0, 1A00, %
4210 1A20, 1AB0, 1B00, 1B80, 1BC0, 1C00, 1C50, 1CC0, 1CD0, 1D00, %
4211 1D80,1DC0,1E00,2440,27C0,27F0,2800,2A00,2C00,2C60,%
4212 2C80, 2D00, 2D30, 2D80, 2DE0, 2E00, 4DC0, A4D0, A500, A640, %
4213 A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, A8E0, A900, A930, %
4214 A980, A9E0, AA00, AA60, AA80, AAE0, AB00, AB30, AB70, ABC0, %
4215 D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, FE70, %
4216\ 10000, 10080, 10100, 10140, 10190, 101D0, 10280, 102A0, \%
4217 102E0, 10300, 10330, 10350, 10380, 103A0, 10400, 10450, %
4218 10480, 10500, 10530, 10600, 10800, 10840, 10860, 10880, %
4219 108E0,10900,10920,10980,109A0,10A00,10A60,10A80,%
4220 10ACO,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,10E60,%
4221 11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,11200,%
4222 11280,112B0,11300,11480,11580,11600,11680,11700,%
4223 118A0,11AC0,12000,12400,12480,13000,14400,16800,%
4224 16A40,16AD0,16B00,16F00,1BC00,1BCA0,1D000,1D100,%
4225 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E800,1EE00,1F000,%
4226 1F030,1F0A0,1F100,1F200,1F300,1F600,1F650,1F680,%
4227 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,F0000,100000%
4228 }\do{\kcatcode"\bxjx@x=15 }
4229 \fi
```

H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

※ここで「ギリシャ・キリル文字」は Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるもののみを指すことにする。

\bxjx@grkcyr@list 対象のギリシャ・キリル文字に関するデータ。

```
4230 \def\bxjx@grkcyr@list{%
                                                                                            % GR. C. L. ALPHA
4231 \do{0391}{LGR}{\text{LGR}}{\text{A}}%
4232 \do{0392}{LGR}{\text{LGR}}{\text{LEXTBeta}}{B}%
                                                                                            % GR. C. L. BETA
                                                                                            % GR. C. L. GAMMA
4233 \do{0393}{LGR}{\text{cmma}}{\text{cmma}}{
4234 \do{0394}{LGR}{\text{Delta}}
                                                                                            % GR. C. L. DELTA
                                                                                            % GR. C. L. EPSILON
4235 \do{0395}{LGR}{\text{textEpsilon}{E}}
4236 \do{0396}{LGR}{\text{LCR}}{\text{Z}}%
                                                                                            % GR. C. L. ZETA
                                                                                            % GR. C. L. ETA
4237 \do{0397}{LGR}{\text{textEta}{H}}%
                                                                                            % GR. C. L. THETA
4238 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
4239 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}%
                                                                                            % GR. C. L. IOTA
                                                                                            % GR. C. L. KAPPA
4240 \do{039A}{LGR}{\text{kppa}}{K}%
                                                                                            % GR. C. L. LAMDA
4241 \do{039B}{LGR}{\text{Lambda}}{\lambda}
                                                                                            % GR. C. L. MU
4242 \do{039C}{LGR}{\text{LGR}}%
                                                                                            % GR. C. L. NU
4243 \do{039D}{LGR}{\text{LCR}}{\text{N}}%
4244 \do{039E}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                            % GR. C. L. XI
4245 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
                                                                                            % GR. C. L. OMICRON
                                                                                            % GR. C. L. PI
4246 \do{03A0}{LGR}{\text{textPi}}{Pi}%
4247 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
                                                                                            % GR. C. L. RHO
4248 \do{03A3}{LGR}{\text{xtSigma}}{\text{sigma}}
                                                                                            % GR. C. L. SIGMA
                                                                                            % GR. C. L. TAU
4249 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}\%
                                                                                            % GR. C. L. UPSILON
4250 \do{03A5}{LGR}{\textUpsilon}{\Upsilon}%
                                                                                            % GR. C. L. PHI
4251 \do{03A6}{LGR}{\text{hi}}%
4252 \do{03A7}{LGR}{\text{LCR}}{X}%
                                                                                            % GR. C. L. CHI
4253 \do{03A8}{LGR}{\text{rsi}}{\text{Psi}}%
                                                                                            % GR. C. L. PSI
4254 \do{03A9}{LGR}{\text{\comega}}{\Omega}
                                                                                            % GR. C. L. OMEGA
                                                                                            % GR. S. L. ALPHA
4255 \do{03B1}{LGR}{\text{\colored}}{\colored}
                                                                                            % GR. S. L. BETA
4256 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                            % GR. S. L. GAMMA
4257 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
4258 \do{03B4}{LGR}{\text{\colored}} \delta{\colored} \delt
                                                                                            % GR. S. L. DELTA
                                                                                            % GR. S. L. EPSILON
4259 \do{03B5}{LGR}{\textepsilon}{\epsilon}%
4260 \do{03B6}{LGR}{\text{xeta}}
                                                                                            % GR. S. L. ZETA
4261 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
                                                                                            % GR. S. L. ETA
                                                                                            % GR. S. L. THETA
4262 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                                                            % GR. S. L. IOTA
4263 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}
4264 \do{03BA}{LGR}{\text{xtkappa}}{\kappa}%
                                                                                            % GR. S. L. KAPPA
4265 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}
                                                                                            % GR. S. L. LAMDA
4266 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                            % GR. S. L. MU
4267 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
                                                                                            % GR. S. L. NU
                                                                                            % GR. S. L. XI
4268 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                            % GR. S. L. OMICRON
4269 \do{03BF}{LGR}{\text{textomicron}}{o}%
                                                                                            % GR. S. L. PI
4270 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
```

```
4271 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\n}
                                                % GR. S. L. RHO
4272 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}{\% GR. S. L. FINAL SIGMA
4273 \do{03C3}{LGR}{\text{textsigma}}{\text{sigma}}%
                                                % GR. S. L. SIGMA
4274 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}
                                                % GR. S. L. TAU
                                                % GR. S. L. UPSILON
4275 \do{03C5}{LGR}{\textupsilon}{\upsilon}%
                                                % GR. S. L. PHI
4276 \do{03C6}{LGR}{\textphi}{\phi}%
4277 \do{03C7}{LGR}{\text{\chi}}%
                                                % GR. S. L. CHI
4278 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
                                                % GR. S. L. PSI
                                                % GR. S. L. OMEGA
4279 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
                                                % CY. C. L. IO
4280 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                % CY. C. L. A
4281 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                % CY. C. L. BE
4282 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
                                                % CY. C. L. VE
4283 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                % CY. C. L. GHE
4284 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
4285 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                                % CY. C. L. DE
4286 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
                                                % CY. C. L. IE
4287 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                                % CY. C. L. ZHE
                                                % CY. C. L. ZE
4288 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
4289 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                                % CY. C. L. I
4290 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                                % CY. C. L. SHORT I
4291 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                                % CY. C. L. KA
                                                % CY. C. L. EL
4292 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
                                                % CY. C. L. EM
4293 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                                % CY. C. L. EN
4294 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                                % CY. C. L. O
4295 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                                % CY. C. L. PE
4296 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                                % CY. C. L. ER
4297 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
4298 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                                % CY. C. L. ES
4299 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
                                                % CY. C. L. TE
                                                % CY. C. L. U
4300 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
                                                % CY. C. L. EF
4301 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
4302 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                                % CY. C. L. HA
                                                % CY. C. L. TSE
4303 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
4304 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
                                                % CY. C. L. CHE
                                                % CY. C. L. SHA
4305 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                                % CY. C. L. SHCHA
4306 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                                % CY. C. L. HARD SIGN
4307 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
                                                % CY. C. L. YERU
4308 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
4309 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                                % CY. C. L. SOFT SIGN
                                                % CY. C. L. E
4310 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
4311 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                                % CY. C. L. YU
4312 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
                                                % CY. C. L. YA
4313 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                                % CY. S. L. A
                                                % CY. S. L. BE
4314 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
4315 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}%
                                                % CY. S. L. VE
                                                % CY. S. L. GHE
4316 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
4317 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
                                                % CY. S. L. DE
                                                % CY. S. L. IE
4318 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
4319 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                                % CY. S. L. ZHE
```

```
4321 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                                             % CY. S. L. I
               4322 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                                             % CY. S. L. SHORT I
               4323 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
                                                             % CY. S. L. KA
                                                             % CY. S. L. EL
               4324 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                                             % CY. S. L. EM
               4325 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
               4326 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                                             % CY. S. L. EN
               4327 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
                                                             % CY. S. L. O
                                                             % CY. S. L. PE
               4328 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                                             % CY. S. L. ER
               4329 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
                                                             % CY. S. L. ES
               4330 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                                             % CY. S. L. TE
               4331 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
               4332 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                                             % CY. S. L. U
                                                             % CY. S. L. EF
               4333 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
               4334 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
                                                             % CY. S. L. HA
               4335 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
                                                             % CY. S. L. TSE
               4336 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
                                                             % CY. S. L. CHE
                                                             % CY. S. L. SHA
               4337 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
               4338 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                                             % CY. S. L. SHCHA
               4339 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                                            % CY. S. L. HARD SIGN
               4340 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
                                                             % CY. S. L. YERU
                                                             % CY. S. L. SOFT SIGN
               4341 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
               4342 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
                                                             % CY. S. L. E
                                                             % CY. S. L. YU
               4343 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                                             % CY. S. L. YA
               4344 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
               4345 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
                                                             % CY. S. L. IO
               4346\do{00A7}{TS1}{\text{\mathsection}}\% SECTION SYMBOL
               4347 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}}
                                                             % DIAERESIS
               4348 \do{00B0}{TS1}{\text{\mathdegree}} \% \ DEGREE SIGN
               4349 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                                             % PLUS-MINUS SIGN
                                                             % ACUTE ACCENT
               4350 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}}
               4351 \do{00B6}{TS1}{\textparagraph}{\mathparagraph}% PILCROW SIGN
               4352 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                                             % MULTIPLICATION SIGN
               4353 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                                             % DIVISION SIGN
               4354 }
               4355 \providecommand*{\mathbf{\S}^{\circ}}
\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕ギリシャ・キリル文字を和文扱いにするか。
               4356 \verb|\newif\ifbxjx@gcc@cjk|
    \greekasCJK ギリシャ・キリル文字を和文扱いにする。
  \nogreekasCJK ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。
               4357 \newcommand*\greekasCJK{%
               4358 \bxjx@gcc@cjktrue}
               4359 \newcommand*\nogreekasCJK{%}
                    \bxjx@gcc@cjkfalse}
  \bx0fake0grk \bx0fake0grk{(出力文字)}{(基準文字)}:
```

4320 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%

% CY. S. L. ZE

```
4361 \def\bxjx@do#1\relax{%
4362
     \def\bxjx@fake@grk##1##2{%
       \expandafter\bxjx@fake@grk@a\meaning##2#1\@nil{##1}{##2}}%
4363
     \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@nil##3##4{%
4364
4365
       \ifx\\##1\\%
         \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi
4366
         \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
4367
4368
         \mathchar\bxjx@cnta
       \left\{ else \#3\right\}
4369
4370 }\expandafter\bxjx@do\string\mathchar\relax
 ■pdfLaTeX・upLaTeX の場合
4371 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0
 まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。
4372 \@ifpackageloaded{inputenc}{}{%else
     \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
4374 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4375 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
     \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
      {Input encoding changed to utf8}%
4377
     \inputencoding{utf8}%
4379 \fi
   upIATeX の場合は当該の文字を含むブロックをの和文カテゴリコードを変更する。
4380 \if u\bxjx@engine
4381 \kcatcode"0370=15
4382 \kcatcode"0400=15
4383 \kcatcode"0500=15
4384 \fi
 各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。
4385 \def\do#1{%}
     \@tempcnta="#1\relax
4386
4387
     \@tempcntb=\@tempcnta \divide\@tempcntb256
     \expandafter\let\csname bxjx@KCR/\the\@tempcntb\endcsname=t%
4388
     \expandafter\bxjx@do@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}
4389
4390 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%
     \ifx\\#5\\%
4391
4392
       \def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%
4393
     \else\ifcat A\noexpand#5%
       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4394
         4395
     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4396
4397
     \def\bxjx@tmpb{\bxjx@do@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
     \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
4400 \if u\bxjx@engine
4401 % {\bxjx@KC/NN}{XXXX}{ENC}{\textCS}{\mathCS}
```

```
4402 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%
                                                       4403
                                                                 \kchardef#1=\@tempcnta
                                                       4404
                                                                  \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{#1}{#3}{#4}}%
                                                                   \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                                                       4406 \else\if p\bxjx@engine
                                                       4407 \def\bxjx@do@b#1#2#3#4#5{%}
                                                                   \mathchardef#1=\@tempcnta
                                                       4408
                                                                   4410 \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                                                       4411 \fi\fi
                                                       4412 \bxjx@grkcyr@list
                                                       4413 \let\bxjx@do@a\undefined
                                                       4414 \let\bxjx@do@b\undefined
\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、ギリシャ・キリル文字の場合に再定義を
                                                           抑止したもの。
                                                       4415 \verb|\@onlypreamble\xjx@org@DeclareUnicodeCharacter|
                                                       4416 \verb|\let\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter\DeclareUnicodeCharacter| \\
                                                       4417 \@onlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
                                                       4418 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
                                                                   \count@="#1\relax \bxjx@cnta\count@ \divide\bxjx@cnta256
                                                                   \expandafter\ifx\csname bxjx@KCR/\the\bxjx@cnta\endcsname\relax
                                                       4420
                                                       4421
                                                                       \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
                                                       4422
                                                                   \else\expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax
                                                                       \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}%
                                                       4423
                                                       4424
                                                                       \wlog{\space\space skipped defining Unicode char U+#1}%
                                                       4425
                                                                   \fi\fi}
                                                       4426
                          \bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not
                                                       4427 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%
                                                           \greekasCJK の場合は、無条件に和文用コードを実行する。
                                                                 \ifbxjx@gcc@cjk #1%
                                                           \nogreekasCJK の場合は、エンコーディングを固定して欧文用のコードを実行するが、そ
                                                           のエンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用コードを使う。
                                                                   \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
                                                                   \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
                                                       4431
                                                                   \fi\fi}
              \DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変
                                                           後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。
                                                       4432 \begingroup
                                                       4433 \toks@\expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}
                                                       4434 \t \end{1} ext{\end} DeclareFontEncoding@\#1\#2\#3\{\%, 1\} \t \end{2} ext{\end{2}} for the content of the con
                                                                  \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
                                                       4435
                                                                  \the\toks@
                                                       4436
```

\noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}

4437

```
4438 \endgroup\next
4439 \def\bxjx@swap@DUC@cmd{%
     \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
     \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
4441
     \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa}
   以上。
 ■X∃LATEX · LuaLATEX の場合
4443 \else\ifnum0\if x\bxjx@engine1\fi\if 1\bxjx@engine1\fi>0
   各文字について、math active を設定する。
4444 \def\do#1{%
     \bxjx@cnta="#1\relax
4445
4446
     \begingroup
4447
       \lccode`~=\bxjx@cnta
    \lowercase{\endgroup
4448
       \bxjx@do@a{~}}{#1}}
4450 \def\bxjx@do@a#1#2#3#4#5{%}
4451
     \ifx\\#5\\\let\bxjx@tmpa\relax
     \else\ifcat A\noexpand#5%
       \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
4453
         {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
4454
     \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
4455
     \fi\fi
4456
4457
     \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
4458
       \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
 「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にの
 み、こちらの設定を有効にする。
4460 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
4461 \ifx\bxjx@tmpa\pi \bxjx@grkcyr@list \fi
4462 \let\bxjx@do@a\undefined
   LuaTrX における \(no)greekasCJK の定義。jacharrange の設定を変更する。
4463 \if 1\bxjx@engine
    \protected\def\greekasCJK{%
4464
4465
       \bxjx@gcc@cjktrue
       \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
4466
4467
     \protected\def\nogreekasCJK{%
       \bxjx@gcc@cjkfalse
4468
4469
       \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}
4470 \fi
   X元TFX における \(no)greekasCJK の定義。
4471 \if x\bxjx@engine
     \protected\def\greekasCJK{%
4472
4473
       \bxjx@gcc@cjktrue
```

\def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\@ne}%

4474

```
4475 \bxjx@grkcyr@list}
4476 \protected\def\nogreekasCJK{%
4477 \bxjx@gcc@cjkfalse
4478 \def\do##1##2##3##4{\XeTeXcharclass"##1\z@}%
4479 \bxjx@grkcyr@list}
4480 \fi
以上。
4481 \fi\fi
```

H.4 初期設定

 $4482 \setminus nogreekasCJK$

ギリシャ・キリル文字を欧文扱いにする。

H.5 完了

おしまい。

4483 %</cjkcat>

付録 I 補助パッケージ: bxjspandoc 🕾

Pandoc の IAT_{EX} 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、"汎用的"に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

%テンプレートの T_{EX} コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

I.1 準備

4484 %<*ancpandoc>

```
4486 \def\bxjsp@pkgname{bxjscjkcat}
\bxjsp@engine エンジンの種別。
4487 \let\bxjsp@engine=n
4488 \@onlypreamble\bxjsp@do
4489 \def\bxjsp@do#1#2{%
4490 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%
4491 \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%
4492 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}
4493 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}
4494 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=p}
4495 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=p}
4496 \bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=1}
```

4485 %% このファイルは日本語文字を含みます.

I.2 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{⟨ファイル名⟩}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処理に関して)読込済であるとマークする。

4497 \newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%

4498 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}

4499 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%

 $4500 \left| \frac{1}{x}\right|$

4501 \def#1{2001/01/01}%

4502 \PackageInfo\bxjsp@pkgname

4503 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%

4504 \fi}

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{⟨パッケージ名⟩}: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

 $4505 \verb|\newcommand*\pandocSkipLoadPackage[1]{|} % \label{loadPackage[1]} % \label{loadPackage[1]} % \label{loadPackage[1]} %$

4506 \pandocSkipLoadFile{#1.sty}}

L3 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の \LaTeX ではこれで警告が出る。これを抑止する。

IATeX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

 $4507 \verb|\colored| ase as a second of the colored as a$

4508 \pandocSkipLoadPackage{fixltx2e}

4509 \fi

I.4 cmap パッケージ

エンジンが (u)pIATEX のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

 $4510 \if j\bxjsp@engine$

4511 \pandocSkipLoadPackage{cmap}

4512 \fi

I.5 microtype パッケージ

警告が多すぎなので消す。

 $4513 \if j\bxjsp@engine \else$

 $4514 \qquad \verb|\PassOptionsToPackage{verbose=silent}{microtype}|$

4515 **\fi**

エンジンが $(u)pIAT_{EX}$ のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

```
4516 \if j\bxjsp@engine
```

- 4517 \pandocSkipLoadPackage{microtype}
- 4518 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}

4519 \fi

I.6 Unicode 文字変換対策

Pandoc で LATEX 形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「LATEX の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

```
\cdots \rightarrow \exists \{\} \quad ' \rightarrow ` \quad ' \rightarrow ! \quad " \rightarrow ` ` \quad " \rightarrow ! \; !
```

日本語 \LaTeX では「 \LaTeX の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots{} を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc 用の \ldots の実装。非数式でありかつ後続が {} の場合は代わりに … を実行する。

- 4521 \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
- 4522 \else \expandafter\bxjsp@ldots@a
- 4523 \fi}
- 4524 \def\bxjsp@ja@ellipsis{\...}
- $4525 \ensuremath{\mbox{let}\mbox{bxjsp@org@ldots}\mbox{ldots}}$
- $4526 \def\bxjsp@ldots@a{%}$
- 4527 \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@b}
- $4528 \ensuremath{\mbox{\sc def\bxjsp@ldots@b{\%}}}$
- 4529 \ifx\bxjsp@tok\bgroup \expandafter\bxjsp@ldots@c
- $4530 \quad \verb{\else \expandafter\bxjsp@org@ldots}$
- 4531 \fi}
- $4532 \ensuremath{\mbox{\sc w}}\ensuremath{\mbox{\sc w}}\ensuremath{\m$
- 4533 \afterassignment\bxjsp@ldots@d \let\bxjsp@tok=}
- 4534 \def\bxjsp@ldots@d{%
- 4535 \futurelet\bxjsp@tok\bxjsp@ldots@e}
- $4536 \ensuremath{\mbox \mbox{def\bxjsp@ldots@e}\mbox{\%}}$
- $4537 \qquad \verb|\ifx\bxjsp@tok\egroup \expandafter\bxjsp@ldots@f|\\$
- 4538 \else \expandafter\bxjsp@ldots@g
- 4539 \fi}
- 4540 \def\bxjsp@ldots@f{%
- 4541 \bxjsp@ja@ellipsis \let\bxjsp@tok=}
- $4542 \def\bxjsp@ldots@g{%}$
- 4543 \expandafter\bxjsp@org@ldots\expandafter{\romannumeral-`}}

\ldots の実装を置き換える。

 $4544 \verb|\AtBeginDocument{%}|$

 $4545 \hspace{0.2in} \verb|\label{lem:sp@org@ldots|ldots}|$

4546 \let\ldots\pandocLdots}

I.7 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

 $4547 \verb|\IfFileExists{bxpandola.sty}{{\%}}$

 $4548 \qquad \verb|\RequirePackage{bxpandola}\relax|$

 $4549 \quad \verb|\PackageInfo| bxjsp@pkgname|$

 $4550 \qquad \{ \texttt{PandoLa module is loaded} \\ \texttt{@gobble} \}$

4551 }{}

1.8 完了

おしまい。

4552 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

4553 %</anc>